
犯罪者は英雄？

天川 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯罪者は英雄？

【Nコード】

N4280X

【作者名】

天川 流

【あらすじ】

主人公・華瀬悠希は英雄だった。そう、“だった”のだ。ある事件をきっかけに、彼の人生は周りの人間をも巻き込んで大きく動きます。恐怖、憎悪、憤怒、勇気、そして希望を抱きながらも、追い回してくる過去の因縁。これは、かつて英雄と呼ばれた一人の少年の物語。

みなさまのお陰で20万PV突破致しました！ありがとうございます！

prologue (前書き)

みなさん初めまして。天川流です。
まったくの素人ですすみません。

何かと不具合があるかと思っています。下手だと思しますので、ご指導
ご鞭撻お願いいたします。

prologue

「ハアハア・・・」

夜の街の人混みを押しのけながら俺は走り続ける。

「おいっ！早く探し出せっ！！絶対に逃がすなよっ！！」

街の喧騒の中に埋もれた男の怒声、ぶつかった女性の悲鳴、文句を叫ぶ若者の声。それらから逃げるように俺は走り続ける。

何故こんなことになった？

何度目かの疑問が俺の思考をよぎる。が、そんなことは分かり切っている。

嵌められたのだ。

では誰に？

そんなの俺が知りたい。

思いながらも足は止めない。止めようものなら首を落とされてあの世行きだろう。こんなところで死ぬわけにはいかない。

『そこを右に曲がって！』

頭に女性の声が響く。いつもは落ち着いた声音なのだが今は焦りが滲み出ている。その声に従ってビルの角を右に曲がる。その先に微かに見えるユラユラ揺らめく光の柱を確認して内心で安堵する。

「一葉っ！！あれか！？」

『聞いてる暇があるなら足を動かさない!!』

そう言いながらも彼女の声が先ほどよりも少しばかりホッとして
いるように思えるのは気のせいではあるまい。ならば。

「あれがゲートっ!!」

走る速度が自然と速まる。

『セキュリティにかからないようにしたからそのまま正面から入
って』

「いいのかよ!? 問題になるぞ!？」

『いいわよ。理事長だもの』

「思いつきり職権乱用じゃねーか!!」

つついっつついッコミを入れてしまった。けどまあ後で礼言わねーと
な。

「　　っ!!!!」

思考に余裕が出てきたとき、背中に多数の殺気を感じた。本能に
従って真横に飛ぶ。

ドブウワァー!!

俺が居た場所に突如火柱が上がる。

あ、あぶねー。あのままだったら丸焦げ……。いや、あれぐ
らいなら大丈夫か。

「しっつっつこいんだよ!!!!!!」

叫び、敵の姿を確認しようともせず光の柱へと突っ走る。

(あと200・・・150・・・)

心の中で呟きながら走る。その間も敵の攻撃は止まない。それを全て交わしながら目測で数える。

(100・・・50・・・)

「おいっ！！誰か止めろっ

！！」

もうゲートがはつきりと見える位置まで近づき、後ろから焦りの声が聞こえてくる。

(30・・・15・・・5っ！！！)

五メートルを切った時点で俺は地面を蹴って飛び込む。

「転移っ！学園都市スフィアっ！！」

叫ぶと俺の体は白い光に包まれる。怒声や罵倒が後ろから聞こえてくるが、もう手出しできないはずだ。

今度こそ安堵のため息を吐く。光の量は徐々に増していき、俺はその場から消えた。

episode 1 堕ちた英雄

魔術師、死霊術師、召還術師、精霊術師、超能力者。

術師と呼ばれる彼らが世界を発展へ導き、これらは世間の常識となっていた。

術師は生まれながらにして一般人とは違う時間軸で生きている、そんなことを思っている者も少なくないだろう。

そんな彼らの“力”は当然軍事力としても使われる。

前世紀の兵器は術師の軍隊には遠く及ばない。それ程に協力な物であり、国家が彼らを優遇するのは必然であった。

だが、彼らも人間だ。悪意を持って力を使わないとは限らない。

それは国際会議でも危ぶまれたことだ。

術師をきちんと育成し、危険な思想を抱かせないようにする。それがこの世界の課題となった。

そんなときに発案されたのが人口島“学園都市スフィア”の建設である。

各国が予算を出し合い、能力者を同じ場所で教育し、国が干渉できない場所。

すぐに国際会議で決定され、人口島の建設が進められた。なんと太平洋のど真ん中に。

飛行機で行かなければならないような場所であるが、それらを簡略化させる装置も当然作られた。

ゲート 正式名称『時空間転移魔法装置』。国の干渉ができないようにするため学園都市が許可した者のみをワープさせる夢アイ

テム。

各国が膨大な資金を投資したこれらは、ある人物の活躍により発案から僅か八年で完成された。

小、中、高、大学までの生徒数は約200万人。縦横およそ300キロメートルと広大な面積であり、もう一つの国と言っても過言ではない。

俺はそんな学園都市へとゲートにより一瞬で到着した。

「よつと」

ワープしてきた俺は初めの一步を踏み出す。

眼前にはヨーロッパや、日本風などの様々な建築物が広がっていた。今は7月16日。夏ということもあって夜だと少し涼しいぐらいの気温だ。初めてきた学園都市としては「綺麗なところ」といった感想だった。

「・・・疲れた」

そこで自分が先程まで走り回っていたことに気づいた。今更になって汗が滴り、呼吸が乱れる。

深呼吸。

肺の隅々まで酸素を行き渡らせるように何度も息を吸っては吐いていく。

「はぁー……しっかしなんというか……」

子供ばっかだな。

そう思ったが、自分も16なので口にはしない。

だがそう思うのも当然で、見渡す限り少年少女しか見当たらない。さすがに店とかには大人もいるらしいが、7時半の帰宅ラッシュのこの時間に子供だけってのはなんだか変な感じだな。

トゥルルル。

そんなことを思っていると、ポケットの中に突っ込んでいた携帯が鳴る。通話ボタンを押して耳にあてる。

「……もしもし」

『もしもし？悠希？』

電話越しに俺を呼ぶ落ち着いた声。

「一葉か。わざわざケータイにかけずに念話でよかったのに」

『私にあんたより魔力無いから疲れるのよ』

首を竦めた気配が伝わってくる。念話とは、互いの思考を魔力で飛ばして会話する魔法だ。先程一葉の声が頭に響いてきたのはこの魔法のためである。

「まあいいや。で、俺はどこに行けばいい？」

『そうね、そこから一番高いビルが見えない？』

言われて辺りを見回す。すると一葉の言った通り一際大きい建物が目についた。

「ああ、見える」

『その最上階に来て。警備には私から言っとくから』

「ん、了解」

電話を切り、再びポケットに突っ込んでビルに向かって歩き出した。

ビルにたどり着くと警備員に声をかけられたがすんなり通してくれた。

エレベーターに乗り込み16階、最上階のボタンを押す。微かな浮遊感に包まれ、上昇していく。最上階へ到着し、真っ直ぐに伸びる廊下をスタスタ歩く。

すぐに奥の扉の前に辿り着く。軽く深呼吸してドアをノックすると「どうぞ」と促されノブを回す。

「久しぶりね悠希。それとも英雄、はなせ ゆっき華瀬悠希様のほうがいいかしら？」

「黙れ腹黒女。その英雄つてのやめろ」

ニコニコ軽口を言ってくる腹黒女こと波風一葉。なみかぜ かずは

俺より10歳は年上のはずなのだが、どうみても2つ上にしか見えない容姿は俺の暴言にも眉一つ動かさずに笑顔を振りまく。

「あらあら、せっかく困つてるところを助けてあげたのに」

「それに関しては素直に感謝してる。でもそれだけはやめろ」

軽く睨むと一葉は大袈裟に肩をすくめる長い黒髪がサラサラとなびく。普通ならばこの仕草だけでもバカな男が惚れるのではないかと思わせるほどのものだ。

「まああんたには五年前に紅葉を助けて貰ったから別にいいんだけどね」

「気にしなくていいのにな」

今度は俺が肩を竦める。

「まあその話はまた今度にしましょう。じゃあ本題に入るけど・・・」

「

そこで言葉を区切る。続けられた問いは半ば予想していたものだった。

「・・・何があつたの？」

こちらを窺うように上目遣いに聞いてくる一葉に俺は目を瞑った。数十秒の沈黙の後、口を開く。

「・・・俺がロシアからの大使たち14名を暗殺したんだと」

苦笑しながら言うと、ポカンとしてフリーズ。しばらく間を置き、俺の言葉を理解したのか顔面蒼白になりながらおずおず聞いてくる。

「そ、それって何かの間違いでしょ？なんで悠希がそんなこと・・・」

最後ぐらいから消え入りそうな声になり、表情が沈んでいくのが目に見えてわかった。

「もちろん俺はなにもしてないけど、大方俺がまだ五年前のことを恨んでると思ってるんだろうな。それが日本が俺を危険だと判断して殺そうとしたとか」

「・・・・・・・・・・」

自嘲気味に言うのと再びの沈黙。実際こればかりは言い返せないだろう。確かに俺は今でもあいつらを許せないし、何度も発狂しそうにもなった。そのたびに身を切るほどの憎悪を耐えて今まですごしてきたのだ。だがそんなこと言っても信じて貰えないのはわかりきっていることだ。

（さて、これからどこに行こうか）

幸いここにはゲートがある。これを使えば他国にも一瞬でつく。もちろん向こうのゲートに大人数で張り込まれていたらアウトだが、多少の包囲ならどうにでもなる。

これからの予定を立て終えたとき、沈黙を守っていた一葉の口が開かれた。その言葉はここに来る前にある程度予想していて、ここに来て忘れていたものだった。

「・・・じゃあしばらくここで過ごしなさい。もとよりそのつもりで呼んだんだし。それまでに私があんたの無実を証明してあげる。絶対にあんたを殺させやしない」

「ちよつ、それは・・・」

迷惑かかるし。

そう言おうとしたが手で制された。一葉ならばそう言うと思っていたのだが、ここにきた安堵でそのへんを考えていなかった。彼女の顔を注意して見ると僅かに憤怒に顔を歪めている。だがそういうわけにもいかない。

「・・・そこまで迷惑をかけられない。それに俺は指名手配になるだろうし、そんなことすれば一葉だけじゃなくて紅葉にも迷惑がかかる。第一あんたはこの理事長だ。責任取らされてやめさせられたらどうするんだ？」

「指名手配になんてならないわよ」

「・・・は？」

あまりにも平然と言つてのける彼女の言葉を俺は一瞬理解することができなかった。

「何言つて」

「

「あんたは仮にもあの国で英雄なんて呼ばれてたんだから公表したらえらいことになるでしょ」

「・・・あー」

なるほど。

すごく不本意であるがそれならば納得できる。確かに俺が犯罪なんてしたって言ったら全世界パニックものだろう。俺の名前は五年前の出来事で知れわたってしまったている。

「だけどさ・・・」

逃げ道が見つからず口ごもってしまう。否定の材料が見つからない。そんな俺の態度を見て一葉は優しいげな声音で囁きかける。

「あんたは今まで一人でなんでもかんでも背負ってきたんだから、たまには他人を頼りなさい。確かに私はあんたに恩がある。けどだから助けるんじゃないの。困ったときはお互い様よ」

いつもの穏やかな笑みを浮かべる彼女に、俺は俯きながら「ありがとう」と呟いた。それが彼女に伝わったかはわからない。向かい合ってそんなことを言うなんてなんだか照れ臭い。

顔を上げて俺も心からの笑みで答える。もう心は決まった。

「じゃあ世話になることにする。もし面倒ごとになりそうになったら捨ててくれていいからな」

「そんなことしたらあの子たちに殺されちゃうわよ」

一葉の冗談で笑い合い、この話はこれで終わりとなった。

今思えばこの決断で俺の人生が180度変わったんだろう。もしあのまま逃げ続けても碌なことにはならないのは目に見えているのだから運命ってのは皮肉なものだ。

episode 2
なんで疑問系？

血溜まりの市街地を俺は血の滴る剣を握って歩いていく。

まだ足りない。

俺の中で何かが囁きかける。

足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない。

禄に考えられなくなった頭の中で、俺は求め続ける。

あいつらを殺せ。

兄さんを殺したあいつらを殺せ。

憎い憎い憎い。憎い憎い憎い。

既に頭の中は既にそれだけしか考えられない。体は勝手に殺すべく敵を求め続ける。

ひたすら歩き続けると視界に軍服を着た20名程の男たちが映った。

向こうも俺に気づいたようで10人程がこちらに向かってくる。

手にはそれぞれ武器が握られている。

復讐だ。

駆け出し、剣を構える。一瞬で距離を詰め、一番前の低空姿勢で走ってきた男を斬り伏せる。血飛沫が上がり、顔に赤黒い液体が纏わりつく。だがそんなものは俺の意識にすら入らない。

そんな俺の姿を見て、周りの男たちの顔が恐怖で歪む。今はその表情を見るたびに心地よい達成感が全身を包む。

もつとこいつらに絶望を。

手近に居たやつの腕を斬り飛ばす。苦痛の悲鳴を上げる男を放置して他の奴らに斬りかかる。

腕。胴。足。首。

気付けば辺り一面にバラバラの死体と血の海が広がっていた。

もつとだ。

もつと殺さないと。

「・・・またか」

意識が覚醒していく。薄暗い部屋の中呟く。今日の夢も最悪だな、などと苦笑しながら内心で呟く。気付けば背中がじつとりと濡れていた。

ここ五年間、良くさつきと同じ夢を見ることがある。

嫌な夢だ。

忘れてしまいたい記憶。でもうまく忘れられないらしい。現に今でもまだ鮮明に覚えている。

そんなモヤモヤした気持ちに浸っていると、いつもと違う違和感を覚えた。視線を動かすとどうやら俺が寝ていたのは見慣れない部屋のソファアだったらしい。

「・・・あー」

するとすぐに昨夜の事を思い出した。

あの後一葉と入学についての説明を受けたあと、まだ正式に転入していないから寮の部屋を使わせることはできない、ということと都市庁（一葉が昨日呼び出したでかい建物のことだそうだ）の15階、つまり昨日行った理事長室のすぐ下の宿直室で一夜過ごすことになったのだ。本当に彼女には頭が上がらなくなるな。

ソファアから起き上がり、バスルームへ向かう。この宿直室にはバスルームやトイレまで完備されているらしい。

服を脱ぎ捨て、蛇口を捻る。勢いよく冷水が出てきたが、構わず体にかける。徐々に温度が上がっていき、丁度良いお湯になったところで体を洗う。

数分間浴びると蛇口を閉じる。バスタオルで体を拭き、先程まで着ていた服を着ろうとするが止めた。そういえば昨日はこの部屋に

たどり着くとそのまま泥のように寝た。当然服は着替えてなかったので汚いし、所々破れたり焦げたりしている。

昨日の帰りに一葉に新しい着替えと制服を貰っていたので問題無いのだが、なんだか捨てるのも勿体無いなあ、などと思う自分も居る。

数分悩み続けて結局捨てることに結論づけ、制服に着替える。

まだ登校するには二時間程早く、どうするか再び思考する。

コンコン。

うんうん唸っていると澄んだノックの音が聞こえてきた。

「はー」

はい、と答える前に扉が開けられた。こんなふうに入ってくる人物を俺は一人しか知らない。

「おっは・・あれ？なんで起きてるの？」

「寝てたらどうすんだよ・・・」

入ってきたのはやっぱり一葉だった。溜め息を吐きながらの抗議もこれも予想通りスルーされた。

「まあいいや。さ、行くわよ」

「行くってどこに？」

いきなり言われても理解が追いつかない。

「どこって、学校？」

「なんで疑問系？」

的確にツッコミを入れていく俺。うん、絶好調だな。

「ほら、あたし一応理事長だから。今日高校に用事あったし、ついでにと思って」

ニコニコしながら俺の手を引っ張る一葉に、「わかったから引っ張るな」とついて行く俺だった。

登校中はまだ時間も早いということもあり、あまり注目されずすんだ。

そんな中一葉が「学校大きいよー。顎外れちゃうかも」などと言二ヤ二ヤしながら言うてくる一葉に「まさか」と真っ向から否定。そんなはず。

「……………でかつ」

……………あつた。

横で腹を抱えて笑う一葉など気にも止めず、俺は“それ”呆然と見続ける。

学校が見えない。正確には校舎が見えない。目の前に広がるのはバカでかい校門と柵ばかり。一体どれだけ金使ってるのか、などと考えるのも馬鹿らしくなるほどの広大さだった。

「……………帰っていい？」

「だーめ」

逃げ出そうとする俺の腕をがっしりホールドする一葉。傍から見ると腕を組んでいるように見えるのだが、そんなこと意識する余裕なんてない。

校門をくぐり、五分程歩くとようやく校舎が見えてきた。

「森の中の城みたいだな……」

もう驚くのも馬鹿らしくなってきた。城と呼ぶに相応しい校舎の広さに、初代理事長、各国首相に脱帽。

中に入るとやっぱり生徒は疎らだが、俺と一葉を見るとギョツと目を見開く姿に苦笑いを浮かべるしかない。

一葉は理事長だ。この都市のトップが俺みたいな一般生徒と一緒に歩いていると必然的に目立つ。

今が登校時間じゃなくてよかった、などと場違いな安堵をしていると突然一葉が足を止めた。訝しく思っただ足を止めた部屋を見る。

校長室。

そう書かれた部屋の前で彼女は深呼吸をしだした。

たかが高校の校長室に入るだけで何を緊張してるのだろうか？

一葉の方がよっぽど権力強いだろうに。

そんな俺の疑問を察したのか彼女は振り返り、小声で囁きかけてくる。

「ここの校長、ほんとムカつくの。何か嫌なこと言われるかも知れないから気をつけてね」

「げっ。まじで」

そんな奴が校長なんてしていて大丈夫なのだろうか？などと呑気なことを考えていた俺は、この後その嫌な校長に対面することを覚悟して一葉のノックを聞いた。

episode 3 愚親賢子

コンコン。

「どうぞ」

中から男の声が響いてきて、入るように促される。

「失礼します」

「失礼しまーす」

一葉はキチンと、俺は間延びした常套句を告げて扉をくぐった。

中は思ったより広いのだが、殺風景という言葉が似合う程物が置かれていない。あるのはソファアーが3つ、その間に長方形のテーブルが一つ、システムデスクが一つといったところだ。

そんな部屋に一人だけ、システムデスクの机にもたれてこちらを見ている人物がいた。

40代後半ぐらいだろうか。金髪の長髪を後ろで束ね、常に不機嫌そうな仏頂面を顔に貼り付けた男。

こいつか。

一目見ただけであまりいい印象を受けないこの男は、こちらの心情などお構いなしに口を開いた。

「・・・はじめまして、だな。ここの校長のマルク・ハイリルだ。

お前がこの高校に転入してくるなんていう馬鹿者か。どんなコネを使ったかしらんが、試験もすっ飛ばして転入とはいいい度胸だな」

「はあ？」

綺麗な発音の日本語とは裏腹に明らかな敵意を含ませた発言。さすがにこれには力チンときた。こちらを伺う一葉とアイコンタクトを開始。

（このおっさん殴っていいか？）

（だめ。ここに入学できなくなるし、下手すれば追放されるわよ？）

（くっ！止めないでくれ一葉！男にはやらねばならぬときがあるんだ！）

（セリフはかつこいいけど動機が不純です、三点）

（せんせー、満点がどれくらいかわかりませーん）

そんな茶番劇をなんと1秒の間に済ませて、なんとか平静を取り戻した俺は満点の笑顔を浮かべてマルク校長に向かい直す。引き吊つてるなんて言われなくてもわかつてる。

「じゃあ、どうしたら転入させてくれるんですかー？おっさんの気分になんて付き合ってられませんよー？」

うん。多少悪態吐くのも仕方ないだろう。ム力つくもん。それぐらい勘弁してほしい。

だが向こうは俺の言葉で眉間に皺を寄せて俺を睨んでくる。おー恐い。

「ずいぶん生意気なクソガキだな。よかろう、転入試験をさせてやる。感謝して平伏せ」

「さすがおっさん。やっぱバカは扱いやすいつすね」

がはははは、と笑う俺と校長。視線と視線が交わって火花が散ったような気がするのだが錯覚か？

そんな俺と校長をハラハラしながら挙動不審に見守る一葉。もうパニクっているのだろう。口をパクパクさせて金魚みたいだ。

「で？何すればいいんだ？まさかおっさんに勝てばいいってのか？腰が抜けてもしらねーぜ？」

「慌てるなクソガキ。お前如きに私が相手するものか」

そう言うとおっさん もとい校長は携帯を耳に当てて誰かと通話しだした。

数分後、部屋にノックが響いた。校長が「入れ」と言うとドアが開かれる。

入ってきたのは金髪を短く切った、いかにも体育会系の若い男だ

った。

「なんだよ親父？いきなり呼び出したりして」

「ヘイル。ちょっとこいつを懲らしめてやれ」

「は？」

親父と呼んだからには息子なのだろう。ヘイルは父親に言われたことを理解できていないのか、首を傾げていた。

「転入試験のことだ。このクソガキがお前に勝ったら転入といった形でな」

「ちよっ！？それはやりすぎだろ！？俺も一応ここの教師だぞ！？」

混乱しているヘイルを見ながら息子はまともなんだな、と一人で納得していた俺は、話がややこしくなるまえにまとめることにする。

「別にいいですよ。そこのおっさん、絶対折れそうにないですし」

「え！？ま、まあそうなんだけど……」

口ごもるヘイルに止どめの一撃。

「それに俺強いですし」

俺の自信過剰な態度にムツとしたヘイル先生は、予想通り俺に向き直る。

「……わかった。適性があるのであれば俺の方から推薦を出す。

その辺は心配しなくていい。じゃあアリーナに向かうか」

「わかりましたー」

いい人だな、などと感慨に浸りながら俺と一葉はヘイルについていく。後ろでおっさんが「ふん」と、鼻を鳴らしていたがスルーした。

愚親賢子。ふとそんな言葉が俺の頭をよぎったのだった。

episode 4 手品師じゃなくて魔術師ですよ

ヘイル先生に付いていき、校舎を出て五分ほど歩いたところにそれはあった。

「・・・東京ドーム？」

「アリーナだ」

我らが日本の比較対象と同じ大きさだと！？俺の反応に苦笑しながらヘイル先生はアリーナへと入っていく。

アリーナ内はとてつもなく広い。

魔法を使った模擬戦闘を行うための物なのだから広くて当然なのだが、どうしても「これ作るだけでも相当金使っただろうな」、などとここに来て何度目かの疑問を浮かべてしまう。

アリーナ中央まで到着すると、ヘイル先生は親切にも解説をしてくれた。

要約すると、このアリーナには上級魔法の結界が張り巡らされており、観客席から球技場に魔法を放つことができない。逆もまた然り。つまり暴れまわっても壊れないというわけだ。

もう一つは試験について。模擬戦形式で行い、相手を戦闘不能またはギブアップさせれば勝ちとなるらしい。

「まあそんなところだ。審判はあそこにいる二人の教員にしてみよう」

ヘイル先生の指差す方向を見ると、黒髪と水色の髪の二人の女性が手を振っていた。

「じゃあ手早く終わらせよう。親父の説得には時間がかかりそうだしな」

そう言ってさがる先生。完全に俺を見くびっているな。

心の中で少しイラついたそんな自分に軽く自己嫌悪して歩いていく男性を見守る。

15メートルほど離れたところで止まり、こちらに向き直る。

「ジェネレート」

そう呟いたヘイル先生の手が光が収束する。光が消えると手には斧が握られていた。

武装召還。

従来の魔法使いのような魔法書を持つて呪文を唱えるようなことは現在ではなくなった。魔法書の代わりとなったのが補助武装。特殊な加工が施されたそれらは、魔法が研究されて科学者たちによって作り出された言わねば魔法の簡略装置。予め武器に術式を組み込むことで、発動速度を大幅に短縮するこれらには大きく分けて三つ存在する。

一つ目は特化型。

大量の術式を保存でき、魔法だけを使うことに特化した補助武装。精霊術師や召還術師、魔術オンリーの魔術師によく好まれる。

二つ目は武器型。

魔法を戦闘の補助として使う、現代で最もオーソドックスなものである。使える術式が少ない代わりに武器として扱われるという利点がある。

最後はそのどちらにも含まれない伝説武器^{レジェンダリーウェポン}。これは現代では実現不可能と呼ばれた二つを合わせた補助武装。古代の人類が作ったこ

れらは大量の術式を保存でき、武器としても最上級、それに加えそれぞれに解析できない術式が備わっているらしい。

ちなみに超能力者は補助武装を使わない。元々一つのことの特化した超能力たちは使う必要がないのだ。

ヘイルが握っているのは武器型の補助武装。太陽の光を浴びてキラリと光る刃を見るだけで手入れが行き届いていることがわかる。それを構えて俺に聞こえる声で呼びかける。

「おい！武器ださなくていいのか？」

「あー……わかりました」

言いながら俺は手に武器を呼び出す。光が収束していき一つの形となる。現れたのは銃。

「ほう。珍しいな」

ヘイル先生はまじまじと俺の手を眺める。少し居心地が悪い。

「ほら、ヘイル先生。戸惑ってるじゃないですか」

「確かに銃使いなんて珍しいですけど、ジロジロしすぎです」
女性陣二人がからかってくる。

彼女たちの言ったとおり銃使いは珍しい。剣などと違ってこちらは接近戦はできない。かと言って長距離なら特化型のほうが断然いい。銃の利点としては、その連続性。引き金を引けばそれだけで銃弾が飛んでいくため、補助武装によって魔法を纏わせればいいだけだ。

そんな中途半端な位置にいる銃を使う者はあまりいないのだ。

「むっ、すまんすまん。ついな」

ばつが悪そうに頭を掻くヘイル先生。悪気はないだろうから別に

いいんだが。

「じゃあそろそろ始めましょうか」

黒髪の女性教師がそう呟くと、俺とヘイル先生が睨み合う。場を静寂が支配する。

「始めてください」

先ほどの黒髪の女性教師が宣言するとヘイル先生が突っ込んできた。

ブウウオン！！。

胴に斬り込んできた斧を後ろに飛んで交わす。空を切る音だけでこんななのだから余程の威力があるのだろう。さすが教師だ。

再び斬りかかってきたところを銃で牽制。斧で弾かれるが動きを止めることには成功した。

ふう。あれ受け止めたら痛そうだな。

そんなことを思いながら俺はヘイル先生を観察する。

一見パワー型にも見えるのだが、スピードもそこそこあるようだ。魔法はまだ見ていないが身体強化はなかなかのものだろう。（身体強化とは魔力を体内で循環させて身体能力を向上させる技能のことだ。）

授業までまだ時間があるとはいえ、教師までそうだとはいえない。余り迷惑をかけるのもどうかと思うのでなるべく早く終わらせることに決めた。

再び突っ込んできたヘイル先生。魔力を集中させ、それを銃弾に纏わせるようにイメージする。

【炎属性添加：銃：纏^{まとい}】

武器型で最も用いられる属性添加魔法。名前の通り属性を物体に付与させる魔法だ。

炎属性の魔法を纏った弾丸はヘイル先生の胸に向かって飛んでいく。先生は斧を胸あたりに持って行き盾にしようとする。

「そんなの・・・」

無駄だ、と続けようとしたがすぐにそれは起きた。

バキィーン！！

甲高い金属の音がアリーナを包み込む。俺以外のこの場の三人が斧を見て呆然としていた。

弾丸は斧にひびを入れて制止していた。折ろうと思えば折れたが、それだとヘイル先生に貫通してしまう可能性があったのでそうしなかった。

驚愕から立ち直ったヘイル先生は再び2本目の斧を取り出そうとするが、それよりも早く俺は走り出す。

三メートルを切ったところでヘイル先生の武器が形を結び、俺に振り下ろしてくる。

バキィーン！！

再び金属の甲高い音が響く。今度は銃で打ったのではない。刀で切ったのだ。

先程まで何もなかったはずの右手に刀が握られていたことに再びヘイル先生は驚愕の表情を浮かべる。

マジック・トレース
瞬間展開。

武装展開をする際には必ずタイムラグが存在してしまう。武装展開は武器が自分の手に握られていることを想像し、それが明確に身を結んだところで別空間から呼び出すといったものだ。人間の思考には時間がかかる。だが俺には何故かそのタイムラグが存在しなかった。一葉にそのことを教えたら瞬間展開と勝手に名付けられてしまったのである。

もちろんこんなこと知らないヘイル先生は、刀を首に突きつけられていると言っのに未だ驚愕から抜けきっていないようだ。一葉などその反応を見て必死に笑いを抑えている。

「……驚いた。おまえはきつと手品師に成れるな。俺が保証してやる」

「俺は手品師じゃなくて魔術師だからな」

軽口を交えてようやく落ち着いたヘイル先生と向かい合う。するとどこから拍手が聞こえてくる。辺りを見回すと女性陣三人が手を叩いていた。

「いやー、すごいね。ヘイル先生ってAランク魔術師なのに」

「生徒に負けただってことは退職ですね。今までお疲れさまでした。辞表は今日中にお願ひします」

「ちよっ！それはさすがに……」

女性教師二人にいじられているヘイル先生を生暖かい目で見る俺。

そんな俺のところにトコトコとやってくる一葉。

「・・・瞬間^{マジック・トレース}展開まで使って良かったの？」

「まあ、どの道これは使わないと不便だからな」

「まあ、あんたがいいならいいんだけどね」

それで話は終わりとばかりに目を逸らす。少し俺より小さい一葉と一緒に未だにいじられ続けているヘイル先生たちを見守り続ける。

・・・あ、こけた。

e p i s o d e 4 手品師じゃなくて魔術師ですよ(後書き)

戦闘描写難しいorz

感想お待ちしております。

episode 5 自己紹介で再会

その後、さんざんいじられてげっそりしたヘイル先生、いじりまくってつやつやしている黒髪女性教師 白貝清子先生しらがい きよこ と、柔らかない笑顔を浮かべる水色髪の女性教師 ミレア・フォーカス先生

、俺、一葉で校長室へ向かった。

おっさんこと校長は最初俺が来たとき仏頂面を崩してニタニタしていたのだが、息子が負けたことを聞いて顔面蒼白に。終始不機嫌だったおっさんに、今度は俺がニタニタする番となった。

結局俺の転入は認められ、今は俺の担任となったミレア先生に教室へと案内してもらっているところである。ちなみに一葉は校長室で話があるとかどうか。

今はHR間際なので生徒の数が少ない。前を歩くミレア先生は柔らかな笑みを浮かべたままだ。

俺たちはそのまま時折会話を混ぜながら教室へと向かった。

「ちょっと待っててね」

そう言われて何分たった？いや、実際の時間はそんなにたっていないはずだ。じゃあなんてこんなに時が進むのが遅い。

緊張している？

ま、まっさかー。国際会議に出席した時でも緊張なんてしなかった俺に限ってそんなことはないだろー。あの時は黒スーツの怖いおっちゃんたちに睨まれてたのに。

あ、あれ？

なんか足がカクカクしてきたぞ？　ち、違う。断じて違うぞ。これは武者震いだ。そう、これから行われるだろう強敵たちとの激戦。

「華瀬くーん。入っていいわよ」

「は、はい！！」

うわやばっ。声が裏変えっちまった。

教室内からクスクス、ハハハ、などと笑い声が聞こえてくる。くそう、お前らも同じ立場に立てば俺と同じようになるんだからねっ！

（ツンデレか俺はっ！！・・・はあ）

つい自分にツツコミを入れてしまった。もうどうにでもなれ。俺は意を決して教室のドアを開けた。

「・・・ん？」

どうした？なんでみんなそんな口を開けて啞然としてんだ？

（え、ばれた？）

だが俺はマスコミの取材なんかは断っていたから外見だけでバレるはずがない。

頭に疑問符をいくつも浮かべる俺だったが、すぐに変化は起こった。

「き・・・」

「木？」

「きた~~~~!!!!」
「うおっ!？」

いきなりの絶叫に比喻ではなく教室が揺れた。

「え?なにになに??」

あつと言う間に俺の周りに生徒が集まりだした。その中心は女子ばかり。

「あ、あのっ!彼氏とかいますか!？」

「あ、ずるい真由!抜け駆けは許さないよ!」

「猿ばかりのこのクラスにとつとつ恵みが。神様ありがとう・・・」
「泣かないで結衣。これからは猿どもなんて気にしなくてすむんだから笑顔でいましょう」

『んだところああ!!』

男子の怒りを物ともせず、というより平伏させて騒ぎ立てる女子。意味がわからない。

もう頭の中は混乱を通り越してパニックだ。もうなにがなにやら。

そんな中一人の女生徒が人垣に埋もれながら俺の前にやってきて。

「え?」

。。。
いきなり抱きついてきた。周りからは悲鳴が上がる。あれ?・

長い黒髪、表情は見えないが覚えのある髪留め、俺よりも頭一つ小さい背丈。
ポン。

いきなり胸を叩かれた。大して痛くは無いのだがその拳が俺の心に響いた気がした。

「も、紅葉!？」

「・・・悠のバカ。何も言わずに出て行って。心配・したん・・・だから」

切れ切れに発せられる澄んだ声。覚えてる、いや忘れるはずがない。

「・・・ごめん」

「・・・バカ」

顔を埋めてくるこの少女は波風紅葉^{なみかせ もみじ}。一葉の妹にして俺の幼なじみ。といってもそこまで付き合いが長いわけではない。

俺は一時期波風家に居候させて貰っていた。諸々の理由で情緒不安定になっていた俺を引き取ってくれたのが一葉だ。

そんなわけで俺は波風家に大変ご恩があるわけなのだが、その話はまたの機会に。

そんな感慨に浸っていると、周りの生徒は何が何やらといった感じで静まり返っていた。

「あー、すまない。自己紹介してなかったな。俺は華瀬悠希。紅葉の友人だ。これから一年間よろしく頼む」

先程の緊張などどこ吹く風、俺は場を収めるために改めて自己紹介する。そんな俺の対応のお陰か、生徒たちは平静を取り戻したの

か「よろしくね」「よろしく」などと返してくれた。

予想外な出来事が起こったがこれから騒がしくなるな、などと呑気にも思った俺だった。

episode 6 後でゆっくり話を聞かせてもらおうか

騒がしい自己紹介を終え、生徒たちがそれぞれの席に散っていく。紅葉も名残惜しそうにしていたが俺が言うのと渋々戻っていった。俺はというと、ミレア先生に促された席へスタスタと歩いていった。

「よつ。俺は黒崎ライラ、ライラでいいぜ。半分日本人の血が入ってるけど出身はドイツだ。よろしくな」

丁度席についたとき前の席から声をかけられた。そこに居たのは銀髪黒目の人懐っこそうな少年だった。

「ああ、よろしくなライラ。俺は……自己紹介したっけな」
苦笑しながら頭を掻く。

「悠希でいい。出身は日本だ」

そう言っただけで握手を交わすと、ライラは満足したのか満面の笑みを浮かべる。

「私も隣だからよろしくね、悠」

隣から声をかけてきたのはもちろん紅葉。こちらも満面の笑み。

「ああ、よろしくな」

俺が言うのと同時に授業開始の鐘が鳴った。

退屈だ。

今は魔術学の時間。この学校では魔術師、精霊術師、召還術師、死霊術師、超能力者の線引きは無い。現にこのクラスでもこれらの術師が混ざり合っている。授業も一緒、模擬戦も一緒、寮も一緒。こっちは他の術師への偏見を無くしていく目的なのだろう。いいアイデアだと思う。思うのだが。

退屈だ。

今日何度目かの呟きを心の中で吐き続ける。

レベルが低い。そう思った。

ここはほぼ強制的に小学生から入学させられるため、エレベーター式がほとんどだと言っていたのでそこそこ面白い授業かと期待していたのだが。

授業終了まで残り三十秒。だが一秒一秒が長い。まるでさっきの自己紹介前のような感覚だ。

15、14、13、12…………。

そう言えば昨日追われてたときもゲートまでの距離を数えてたなあ、などと下らないことが頭をよぎった。

10、9、8、7、6…………。

残り十秒を切った。早く追われ早く追われと念じ続ける。

5、4、3、2、1…………。

「ゼロ」

キンコーンカーンコーン。

呟くと同時に終令になる。号令をして教師がでていく。授業が終わった。

「終わったー・・・」

「おつかれー」

机に突っ伏す俺、苦笑しながら振り返るライラ。

「昼休み終わったらまたあるんだけどね」

と、紅葉。うげえ、まだあんのかよ。

「昼飯どうする？俺腹減ったわ」

突っ伏したままポツリと呟く。早くこの体力を回復しなければ午後まで持たない自信が俺にはある。

「あ、ちよつと待って、もう少し」

紅葉が言い終わる前に教室のドアが勢いよく開かれた。クラス中がそれに注目し、俺たちもそちらに振り向く。

黒髪を肩ぐらいで切りそろえ、前髪も揃えた可愛い少女が息も絶え絶えに立っていた。

その少女はこちらを見ると小走りにやってくる。

「悠お兄ちゃん！！」

「げふっ！？！？」

いきなり飛びついてきた。お陰で俺は真後ろから倒れ、頭も強く打った上に鳩尾に頭が入ってしまった。

きつと俺の頭には多数の星、またはひよこが回っていることだろう。

「さ、桜っ！！悠ぐったりしてるっ！！」

「わわっ！！どうしようお姉ちゃん！？」

そこからどれくらいでくれるだけですごくありがたい。

テンパっているこの少女は一葉と紅葉の妹の波風桜。なみかぜ さくら おっちょこち

よいなんだか確信犯なんだか天然なんだかよくわからない子だ。
現在、俺の上、もつといえは鳩尾に桜が座っている状態。桜が動く度に膝が入ってももの凄く痛い。

だが、幸か不幸かこの体制だと桜のスカートの中身が見えてしまいそうなのだが。

（いやいやいかなだろ！？相手は桜だぞ！？）

妹のように接してきた桜にそんな下心を向けていいはずがない！！
いくら美少女だからといってもこれだけは譲れないっ！！

「あつ！ご、ご、ごめんなさいっ！！」
するりと俺から降りる桜。

ふう、危なかった。色々な意味で。

「ご、ごめんねお兄ちゃん。お姉ちゃんに念話でお兄ちゃんが帰ってきたって聞いていてもたっても居られなくて・・・」

上目遣いで見つめてくる桜。そんな捨てられた子犬みたいな目で見つめられると怒るもんも怒れないではないか。

「・・・いや、俺も突然いなくなったりして悪かった。心配かけた」
頭を下げる、すると再び桜に抱きつかれた。

「・・・もうどっかいつちや嫌だよ・・・もう、戻ってこないかも
って・・・」

嗚咽を漏らす桜の頭を撫でてやる。柔らかい髪を梳くとミントの香りが広がってくる。俺は昼飯を蹴ってでもそのまましていると決意した。

結局桜はすぐに泣き止み、俺、ライラ、紅葉、桜の4人は学食で昼食を取るようになった。

この学園は人数も尋常じゃないらしい。現にバカでかい学食内は人で溢れかえっている。俺たちは奥の空席を見つけ、桜とライラに場所取りを任せ、俺、紅葉は食券を買いに行くことになった。

「・・・ねえ」

販売機の列に並んでいると紅葉は深刻そうな顔でこちらを伺っていた。

ああ、なるほど。

「なんで出て行ったのか、だろ？」

俺が先回りして言うとかクンと一回頷いた。

「別に。任務で出てただけだ」
嘘を吐いた。

「・・・そう」

紅葉が背を向けると同時に俺の体を刺すような痛みを伴って罪悪感が沸き上がってくる。

ごめんな。

言葉にしなければわからないとわかっているのに俺は心の中で呟いた。

俺たちはテーブルを囲んで昼食を取る。だがしかし・・・。

「なんかさっきからジロジロ見られて落ち着かねーな」

「そうかな？」

桜が可愛らしく首を傾げる。なんだかりスみたいだな。別にシスコンじゃないんだよ？

兄妹ではないから別にシスコンではないのだろうがそれはそれ、これはこれだ。

因みにみんなのメニューは桜と紅葉が鮭定食、ライラが肉うどん、俺がエビフライ定食だ。

「そりゃー、高嶺の花と今まで数々の男共が挫折してきた波風と中学トップの美少女の桜ちゃんと一緒に昼食なんて、この学園都市在住の生徒に喧嘩売ってるようなもんだしな」

「あー、納得」

この幼なじみ二人に適う美少女なんてそうそう存在しないだろう。

彼氏の一人や二人できてもおかしくないんだがな。

「私ってそんなに話がたいかしら？」

「多分な。俺は小学からずっと同じだったから気にならないけど」

紅葉が不満そうにライラを睨む。そうか二人は小学から一緒・・・。

「は！？マジで！？」

何？ってことは彼氏彼女てきな関係でも。

『違うつー！！』

「うおっ！？」

思考を読まれただど！？身を乗り出し、二人共顔を真っ赤にしながら詰め寄ってくる。え、エビフライが落ちるって！！

「なんで私がこいつと付き合わないかならないのよ！！」

「そうだぜ！！好きだったのは中二までで、今はどうも」

場の空気が凍った。いやマジで。自分の失体にようやく気付いたのか、赤面を通り越して蒼白になったライラに俺は慈愛の笑みを浮かべる。

「ライラ」

「ゆ、ゆっき」

涙目ですがりついてくるライラ。

「後でゆっくり話を聞かせてもらおうか」

「・・・・・・・・・・イイイヤアアア！！！！！！」

食堂内に絶叫が響く。

俺の笑顔は無慈悲な天使のそれだった。

「・・・・・・・・俺が惚れてたのは小5のときだった」

精気の無い瞳で罪を告白するがごとく一方的な恋バナが始まった。

場所は寮の俺の部屋。

授業が終わって放課後、ミレア先生に寮について聞いたところ、1708号室を使っていいとのこと。偶然にもライラの隣で、この真上が紅葉と桜の（姉妹ということで同室）部屋だ。

そんな俺たちが何故俺の部屋に集まっているのかというと、ライラの暴走によって思わぬいじりネタを見つけたからである。

手筈はこうだ。

まずライラを捕獲。止めに来た紅葉を魔法で拘束。実にシンプル、そして堅実的だ。

予定通りライラを捕獲し、紅葉を拘束。部屋の隅でウーウー唸っている。桜はというと、意外にもこの手の話が好きなのか目をキラキラさせてライラの話の聞こえ方としている。

そして色々尋問　もといいお願いをしたらすんなり口を割り出したのだ。

「その頃の紅葉は、すげー明るかったんだ。一回聞いたんだ、なんでそんなにテンションたけーのかって」

「波風」って呼んでたのに今は「紅葉」なんだな、と思ったが口にはしない。

「そしたらさ、あいつ『王子様が助けてくれたの』、って嬉しそうに言ってる。そんなときはその誰とも知らないやつに嫉妬したよ。でもいつか俺が紅葉を守ってやるって決心して対抗心燃やしたっけな・
・・」

自嘲気味になってきたライラ。なんだかかわいそうに思えてきた。それにしても王子様ねえ、そんなやついたのか？

「でも、中二んときには変わっちゃまって、いつも寂しそうに俯いて

たんだよ。表面は笑ってるけど内心は泣いてる。そんときに確信した。あいつがどこかに行ったんだなって」

だんだんシリアスになってまいりました〜！

さて中二ね・・・俺と同時期に紅葉の前から消えたやつってことか。

「こうなったら俺が紅葉を守ってやる。ついにその時が来たって思っ
て、思い切って告白してみたんだ」

おおー！！

「結果は見事撃沈。そんときのセリフがこりやまた傑作で『私はあ
の人を待ち続けるから』だってよ。そこで俺の初恋は終わっちゃまっ
た」

話終わると魂が抜けたようにその場でボーッとしだすライラ。紅葉
のほうは・・・。

「おい、紅葉？」

「・・・・・・・・」

返事がない、ただの屍のようだ。

桜はというと、うっとり肌をツヤツヤさせている。よっぽど満足
だったんだな。

こうしてこの第1回恋バナ選手権は幕を閉じた。

episode 6 後でゆっくり話を聞かせてもらおうか (後書き)

感想お待ちしております。

episode 7 強者の余裕

「おつす!」

「.....おう」

部屋を出ると、ちょうどライラと鉢合わせになった。だが、俺が声をかけてやっているのにまったく元気がない。

「どうした？俺が声かけてやってるんだから元気出せって」

「いや、寧ろ朝からテンションだだ下がりだ。どうしてくれるこのやろっ」

む、俺の何処に不満要素があるんだ。この心優しい。

「ならば聞こう。お前は昨日俺に何をしたでしようか」

こ、こいつ読心術の心得でもあるのではなからうか？

「え？昨日？うーん。鬼ごっこ？」

「その小学生みたいなごまかしで通用するとおもってんのかよ。ちなみに読心術なんてやったこともない。お前は考えてることが丸わかりなんだよ」

な、なんだってー!?

うーん、このリアクションはイマイチだな。

そんなバカな考えは置いといて、俺ってそんなにわかりやすい性格しているだろうか？自分ではそんな風におもったことないのだが・。波風姉妹には何故か読まれるのでそういう血筋かと真剣に考えたこともあったのに。まあどうでもいいっちゃいいんだが。

「ほら、気にすんなって。過去を振り向いてばかりでは前に進めないぞ!」

「振り向かせる原因になったお前に言われたくない!」

朝から近所迷惑も考えず騒ぎながら学校へ到着。

「だから土属性の魔法は近接戦の補助としてばかり使っんじゃ無くてだな」

あれ？なんか最初の時と違って俺の魔術講義が始まっている気がするのだが。

「いや、でもよお」

「あ、紅葉おはよー」

ビクウツ！！

「ん？どうした二人共？」

『いやっ！な、なんでも、ないっ！』

声が裏変えった。なんでこんなに焦って。

「あー、昨日のことか」

ビクウツ！！

また反応した。

つまり昨日のぶっちゃけトークのせいで気まづくなっちゃった、というのか。

「まあ気にすんなよ、な？」

『誰のせいだ！！』

「え？俺のせいなの？」

あくまで白を切る俺。それを涙目で抗議してくる二人。数分間そんなやりとりをしていると我らが担任のミレア先生がやってきた。

「はいはい。席についてくださいねー。HRを始めますよー」

間延びした声に渋々席に戻る、といっても前と左だからあまり関係

無いのだが。

「では今週末からの学年別トーナメントの話をします」

「・・・・・・は？」

え、何それ？なんでみんな何も言わないの？

「あー、華瀬くんには言ってますでしたね。この都市では学期末に学年別に各校舎一纏めにしてトーナメント戦を行うんですよ。こんな時期に転入してきても例外はありません」

「は？各校舎？」

何それ、高校ってここだけじゃないの？

「ええ、この学園都市には高校、中学、小学それぞれ26の校舎があるんです。ここは第11高校。ちなみに大学は専門機関などあるので64となっています」

「知らないんですか？」と言うような目で見てくる先生。に、26！？ていつかここ第11なの？それすら初めて聞いたんですけど。

まあとりあえず。

「せんせー、めんどくさいんで休んじやうかもですけどいいですかー？」

うん、やっぱりめんどくさそうなもの。

「別に構いませんけど、実技の成績がなくなりますよ？」

俺の策を軽々つぶしてくれちゃったミレア先生。げ、それは一大事。

これで夏休み補習なんてなったらたまったもんじゃねーぞ。せつかく夏休み前に転入してそのまま夏休みを満喫、なんて夢い夢を抱かせていたのに。

「ちなみに一位になると実技の単位がものすごく貰えますよ?」

ピクッ

「もう一年間分は余裕であるぐらいの」

ピクピクッ

「そうですか、出場しませんか。それは残念です」

「せんせー！自分、スポーツマンシップにのっとって、目の前の戦いを背を向けるような真似はしません！」

『うおおおい!!』

なんか周りから非難の声が上がった気がするが無視。今の俺の目にはもはや単位しか映っていない。道を阻む者は誰だろうと捻っちゃうよ、俺。

「まあ頼もしい。では、そろそろ終わりにしますね」

あとになって、俺はミレア先生の策にまんまとはまってしまったことに気付いて泣きたくなってしまったのだった。

まあ、単位貰えればいいか。

3 限目、模擬戦闘実習。

この時間はアリーナで魔法を用いて戦闘をするといった授業らしいらしい、というのは俺が今までそんなのを受けたことなかったからだ。

「なあー、俺とやろうぜ？」

「えー、なんでライラと？」

「失礼にもほどがあるだろっ！！」

ライラが言ったやろうぜとはもちろん模擬戦のことだろう。だが何故かいきなりキレだした。わけのわからんやつだな。

「ゆう、私とやらない？」

「ん？紅葉か。いいぞ」

『えゝっ！！』

な、なんだお前ら？なんで俺が紅葉との模擬戦を承諾したら『えゝっ！！』などと驚かれなければならないんだ？

首を傾げる俺を見かねたのか、ライラが補足説明をしてくれた。

「波風は中学のトーナメントで6位になってんだよ。そんなやつが転入生をいきなり誘うつてのが驚きなんじゃね？」

あれ？紅葉じゃない。なんてのは置いて、こいつより強い奴が
同学年に5人もいるんだ、などと全く見当はずれの考えをしてい
る俺。

そんな俺の態度をどう解釈したのか心配そうにしているライラ。

「んー、多分大丈夫だろ」

「んな突拍子もないことを・・・」

半ば呆れ気味に溜め息を吐くライラに「まあ、見てろって」と言い
放って紅葉の下に向かった。

・・・ちよつとくさいセリフだったかな？

episode 7 強者の余裕（後書き）

みなさんお気に入り登録ありがとうございますっ！！

本当にうれしいです！！

感想お待ちしております。

episode 8 いいこと（前書き）

瞬間展開の読みを

マジック・トランスから

マジック・トレースに書き換えました。

今までそれを見てきた方、ご迷惑をおかけしてすみません（泣）

episode 8 いいと

俺と紅葉は20メートル程間隔を開けて向かい合う。さっきまで模擬戦をしていた生徒も学年6位の紅葉と転校生の勝負と聞いて集まり始めていた。

「ルールどうする？」

紅葉が問う。

このアリーナに殺傷生のある物理攻撃、魔法は全て受け流される結界が張られているらしいのだが、怪我をしないというものではない。最低でも骨折まで抑えてくれるというだけだ。

だが、その程度の怪我ぐらいなら今の医療で直ぐに治る。なので本気でやり合っても普通は大丈夫なのだ。普通じゃなければ問題大有りなのだが。

「んー、フリーでいいだろ？」

フリーっていうのはルール無しなんでもありのことだ。

まあ俺はあくまで結界の許容範囲内で。

「りょーかい」

言わずとも理解したのだろう。少し不服そうではあるが、すぐに集中し始める。

すでに俺たちの周りには沢山のギャラリが集まっている。さて、

そろそろ。

「「ジエネレート」」

俺たちは同時に武器を展開する。

紅葉の手に光が収束し、太陽の光で鮮やかに光る刀が現れる。

一方俺は両手に二丁の銃を展開。今回は二丁拳銃のオンリースタイルだ。

俺の手に銃が現れた瞬間ギャラリーからざわめきがおこる。

そんなに珍しいのか？慣れれば結構使いやすいんだが・・・。

少々残念な気もするが、まあ取り敢えず置いておこう。正面には刀を構えた紅葉の姿が・・・げっ！目がマジじゃねーかつ！

軽く流そうか、などと考えていた俺とは真逆に彼女は随分気合いが入っている様子。どうしたものか。

「じゃあ俺が審判するぞ？」

ライラが審判に立候補してきた。

「いや、帰れ」

「お前俺にひどくなっ！？」

もう半泣きですがりついてくる勢いで見つめてくるライラ。

「ちっ、しかたねーな」

「俺お前になんかしたか！？」

ごほん、とわざとらしく咳払い。弄ると楽しいなこいつ。

「じゃあカウント始めるぞ？5・4・3」

なんだか紅葉から殺気を感じるんだが気のせいだろうか？まあいつも殺す気で来いつてたのが原因だろう。そうだと願いたい。

「2・1、始めっ！」

ライラの宣言と同時に紅葉が突っ込んで。

「はや」

言い終える暇も無く20メートルの距離が一気に詰められ、様子見だろう横薙の一閃。

それを後ろに飛んでかわすが、再び詰められ切り込まれる。

「うおっ！？」

交わしても交わしても距離を詰められては斬られかける。いたちごっこになってきた。

「っ！？」

突如紅葉の魔力の流れが変わった（普段垂れ流している魔力から、魔法を使う際に魔力を集中して体外に漏れることに変わる事）。周りの連中には気付かれない程の抑えられた変化だが、これは。

「いやいや！！それはちょっ」

言い終わる前に紅葉は居合い切りを放つ。だが、先程と違うのは斬線が飛んでくる上に、それに風属性と雷属性の魔法が混じっていることだ。地面を蹴り上げ、空中に飛ぶ。

「ばっか！いきなり複合魔法ぶつ放すやつがあるかつ！」

「ゆうにはこれぐらいやらないと勝てないでしょっ！！」

なんか怒鳴られた……。

複合魔法とは、その名の通り別々の属性を組み合わせ一つにした魔法のことだ。普通は高校三年生ぐらいからカリキュラムに含まれていると思うんだが。まあ、一葉の妹なのだからこれぐらいどうってこともないだろう。

今紅葉が放った魔法“風花雷塵”は、風属性と雷属性の複合魔法だ。あんなの食らったりしたら普通は一溜まりもない。

（やっぱり紅葉相手に銃はきつかったか？）

舞の如く振るわれる刀を全て紙一重で避けながら、俺はそんなどうでもいいことに思考を傾けていた。

（うーん……）

どう反撃しよう……。こっちは銃だし、距離を取らないことには。

（……いや、そうでもないか）

ちょっといいこと思いついた。

その“いいこと”を実行するために魔力を集中させる。

「　っ！！させないっ！！」

俺の魔力の流れが変わったことに気づいたのか、先程より斬線の数が増す。でも。

「隙だらけ」

周りから見るとふざけているように見られるだろう間抜けな声を出して右の銃の引き金を引く。

ズガン。

魔力でコーティングされた普通の銃弾が紅葉の腹部に当たる。身体強化をしてるだろうし、結界もあるからこれぐらいの威力なら問題ないはずだ。

だが、衝撃で数秒彼女の動きが止った。そして予め集めておいた魔力を使い、術式を発動させる。

【氷属性添加：銃：纏・氷結】

引き金を5回連続で引く。5発の弾丸が全て紅葉の足下と刀に着弾。

ギャラリーの中では「はずれた!？」なんて言ってる的外れなやつがいる。俺から言わせて貰えば“はずれた”のではなく“命中した”のだが。

着弾と同時にその部位に冷気が散り、一瞬で周りの水分が凝結。足下や刀が凍り付き、瞬く間に動きを封じる。

もつともポプラーな魔法“纏”ではあるが、その中でも派生系が存在する。普通の“纏”はただ属性をのつけて威力を上げたようなものだが、派生系はそれぞれにオプションを加えた便利な魔法だ。俺の放った“氷結”もその一つで、着弾点付近を凍り付けさせる能力がある。

俺は身動きがとれなくなつた紅葉に、武器を解除して近づいていき、

「チェックメイト」

そう言い放つて指で銃を作り、額に当ててニコリと微笑む。

「はぁ、降参する……」

溜め息を吐いてそう吐き捨てると、呆然としていた審判のライラが慌てて取り仕切る。

「し、勝者、華瀬悠希っ!」

同じく呆然としていたギャラリー共がその言葉で正氣に戻ったのか、途端に歓声を上げた。だした。

そんなことを無視して俺は紅葉にかけた魔法を解いてやる。氷が散り、やっと動けるようになった足を屈伸で解して武装解除する紅葉。

「いやー、強くなったな。最初するときなんてびっくりしたぞ」

「それでも勝てないなら意味ないよ」

口を尖らせて拗ねる彼女に苦笑しながら頭をポンポンと叩く。

さて、取り敢えずこの場をどうやって収集するか考える俺だった。

episode 8 いいこと（後書き）

感想お待ちします

episode 9 嘘

紅葉との模擬戦の後、クラスメートたちの質問責めを華麗にスルーしてライラを弄って適当に時間を潰した。

・・・何かに目覚めかけている気がするが気のせいだろう。

そんなこんなで時は昼休み、場所は食堂。

俺、ライラ、紅葉、それと中等部からわざわざやってきた桜と一緒に食事に勤しんでいた。

今日のメニューは、俺がざるそば、ライラがまたも肉うどん、紅葉と桜が昨日の俺と同じエビフライ定食。

「そう言えば高等部のトーナメントって今週だったよね？」

唐突に桜がそんなことを言い出した。

「ああ、そうみたいだな」

取り敢えず頷いておく。まあどんなのか知らないけど。そんな俺の心情を察したのか、紅葉が補足してくれる。曰わく。

「当日はケータイ端末に開始時刻、次の対戦相手と場所が随時送られてくるの。全高校が参加するから、アリーナからアリーナに移動なんてこともザラにあるわ。だからトーナメント期間中はゲートも

解放されるの。転移してバトって、また転移してっとなるから気をつけてね」

だそうだ。

「うわっ！めんどくさっ！」

「単位は？」

「うっ」

それは欲しい……。くそうっ！！

ニヤニヤしながら見てくる紅葉とライラ。今朝のやり取りを知らない桜は何がなにやらといった様子だ。

「ん？そついや期間ってどんくらいあんの？」

「進行状況にもよるけど土曜日から始まって10日ちょっとあれば終わる、なっ」

ちっ、肉貰おうと思ったら弾かれた。

なるほど10日ね。長いな、めんどいな、でも単位は欲しいな。

「そんな甘いこと言っていないで、少しは特訓でもしたら？」

「ん、まあそうなんだけどな……」

なんだかやる気でないんだよね。

『学年一位は伝説武器保持者なの？一回戦ったことあるけど、むちゃくちゃだったんだから。ゆうは“フランクス”とか“影月”とかも使うつもりないんでしょ？』

ぐーたらな考えを浮かべていたら急に頭の中に声が聞こえてきたの

で少しびっくりしたが、ライラと桜にはまだ話せ無い内容も混じっているので助かる。

『伝説武器持ち？そんな大物がここにいんのか？』

これは驚いた。

伝説武器には普通の補助武装と違っていくつか特殊な性質がある。

その一つが保有者の選択。

伝説武器は所有者を選ぶ性質がある。その判断基準はそれぞれ異なり、ある物は強さ、またある物は強靱な精神力といった具合にだ。それを普通の高校生が扱えるとはね。

それとも俺みたいな異端の存在なのか。

そんな感慨に浸っていると、先程の問いの答えを返していないことに気づいた。

『ん、まあな。あんなのポンポン持ち替えてたらさすがにまずいだろう？』

それが答えだ。

『せめて一個ぐらいは使ったら？』

『この名前だけでも怪しまれるかもってビクビクしてんだ。それに伝説武器保持者なんて今時ググれば一発で出てくる』

『・・・そう』

それだけ交わすと念話を切る。

それから食事を終え、適当にだべって昼休みを平和にすごした。

「はぁ・・・」

自室に戻るなり紅葉はベッドに飛び込んだ。妹の桜は日直で少し遅くなるらしい。

そんな中ふと昨日の昼の悠希の言葉を思い出す。

『別に。任務で出ていただけだ』

「・・・嘘ばかり」

私は別にゆうみみたいな鈍感じゃない、気づいてないとも思っただろうか。

でもそれを問い詰めるわけにもいかない。何か無闇に聞いていい話では無い気がしてならないのだ。

もやもやする感情を持て余していると、机に置かれたケータイの着メロが鳴った。

「姉さん？」

『もー、お姉ちゃんって呼んでもいいって言ってるのにつー!』

なぜかいきなり叱られてしまった。こんなバカなことを一言目に発するバカはもちろん一葉姉さんだ。

「きるよ」

『ちよつとま』

構わず切る。するとまたすぐに着信がかかってきた。

「・・・なに？」

『ひどいよ紅葉ー、いきなり切るなんて。お姉ちゃん悲しい』

電話越しに啜り泣く声。勿論演技に決まっているのだが。もう一度切ってしまうのか？などと本気で思っていると、泣き声が止み、変わりに真剣身を帯びた声が響いてくる。

『・・・今から理事長室に来てちょうだい。大事な話があるの』

「大事な話って？」

思わず聞き返してしまった。無駄だとわかっているのに。

『・・・来ればわかるわ』

案の定はぐらかされてしまった。とりあえず肯定しておいて電話を切る。

桜に「ちよつと出かけてくる」とメールを送り、外出届を提出して寮を出る。

空は薄暗く染まり、昼間と比べれば大分涼しい風が肌に触れた。

ここから都市庁までそう遠くは無く、ゲートを使う必要も無い。

私は歩いて都市庁まで向かった。

都市庁に付くと、すぐに警備員に通された。

エレベーターで最上階に上がり、廊下を真っ直ぐ突き進むと、一葉のいる理事長室に到着する。

「姉さん、入るよ?」

「はいはい」

さっきの真面目な声はどこに行ったのやら、間延びした一葉の声に促されドアのノブを回す。

「いらっしやうい」

中に入ると二人用ソファーに寝転がって足をバタバタさせている姉の姿が、そこにはあった。

「失礼しました」

「ちよつと紅葉っ!?!ごめんごめん!もうふざけないからっ!ねっ!?!」

腕を掴みながら涙目で謝罪してくる姉の姿を見て、なんだか悲しく

なってくる。

「で、なんなの？」

「うん、大したことじゃないんだけど……」

「さて、桜が待ってるから」

「待つて待つて!!」

一体なんなのだろう？大したことないなら早く帰りたいのだが。目で催促すると、「あゝ」「うー」などと奇怪な声を上げる姉。やがて意を決したように口を開いた。

「……悠希になにか言われた？」

その言葉を聞いた瞬間言いようのない不安感が押し寄せてきた。なんでかわからないけど。

「姉さん、ゆうに何があったのか知ってるの？」

「質問に答えて」

真剣な表情で問い詰めてくる一葉に、私は首を横に振る。

「……ううん。何があったのか聞いたけど、答えてくれなくて……」

「そう……」

沈黙が訪れる。

しばらくすると一葉から口を開いた。ただ、それは予想外の一言だった。

「どうする？教えてほしいなら私の知ってる範囲で教えるけど？」

「えっ!？」

その一言に驚愕していると、一葉はそんなことお構いなしに続ける。

「知りたいんでしょう?どうするの?」

その問いに、私は数秒悩んだ。やがてある疑問がよぎる。

「それは、ゆうも良いつて言ってるの?」

じゃあなんであの時に言わなかったの?

そんな早とちりした考えとは裏腹に、一葉は首を横に振った。

「いいえ、でも紅葉が知りたいなら教えるわよ?」

再びの問い。

だがその瞬間答えは決まった。

「ううん。教えなくていい」

そうだ。教えてもらわなくてもいい。

「どうして?」

優しく尋ねる姉に、私は笑顔で答える。

「だってゆうが話さないってことは、まだその時じゃないってことだもん。私の興味本位でゆうを傷つけるなんて絶対嫌。ゆうは色んなもの背負ってきてるのに、私が足を引っ張るなんて絶対嫌よ」

そうだ。

死ぬはずだったゆうは私を助けてくれた。それが偶然だったってこともわかってる。

でも私は生きてる。

ゆうのお陰で生きてる。

だから私はゆうを守りたい。少なくともゆうが自分の背負った物の重みで潰されないように支えていたい。

「だから私はゆうが自分で言い出すまで待つてる」

私はゆうを信じてるから。

「・・・もう雅人がいなくても安心ね」

「え？」

何か聞こえた気がしたのだが一葉は「なんでもない」と手をひらひら振っている。

気のせいかな？

その後くだらない話に突入しそうになったので、適当に切り上げて寮に戻る。

さっきまでのもやもやが晴れた、そんな気がしたのだった。

トーナメントまで残り4日。

episode 9 嘘（後書き）

感想お待ちします。

episode 10 推薦枠？

7月17日水曜日。

トーナメントまで後三日ということもあって、そろそろ準備が始まりだしたようだ。

何やら屋台も並ぶとか。

そんな今この頃。

サンサンと降り注ぐ太陽の光が心を清々しい気持ちに　。

「なわけあるかつ!!」

「うおっ!？」

させるわけなかった。

いきなりキレだした俺を何こいつ、みたいな目で見てくるライラ。

俺が今イライラ（ライラじゃないよ？イが多いよ？）している理由を、一言で表すと“暑いから”だ。

「暑いんだよ!! 離れるライラ!!」

「俺のせいだよ!!? いい加減にしる悠希!!」

「うるさい黙れ鉄板野郎!!」

「そこまで熱籠もってねーよ!!」

こんな道のと真ん中で俺たちは何をしているのだろうか？

通り過ぎていく生徒たちは皆俺たちを可哀想な物でも見るような目

を向けてくる。

・・・そんなことしてるより早くクーラーの効いた教室に行けばいいのに。

「あゝ、生き返るゝ」

「大袈裟なやつだなー」

そう言いながらもライラも満更ではなさそうだ。

場所は教室。

あれからあーだこーだ言い合いながらもようやく到着して、今は涼しい教室でくつろいでいるところだ。

「しかし、あの波風に勝っちまうとはなー」

「またその話か・・・」

げんなりしながら机に突っ伏す。あー、机が冷たくて気持ちいい。

昨日はそのことについて鬱陶しいくらいに聞かれ、そのたびに誤魔

化してきたのに。

「昨日も言ったが、あいつとは古い付き合いなんだから行動パターンはある程度わかるんだよ。そのせいだ」

「いや、それでもすげーよ。あいつに勝てるやつなんて同学年に5人いるかいなかだしな」

「わかった、わかったから」

俺としてはあいつに勝てるやつがこの都市に5人もいることが驚きなんだが。

「そついや一年だけトーナメントするってことは上級生はどうすんだ？この都市の一年生っていったらそれだけでアリーナ全部使っちゃうんじゃないの？」

そんな疑問が頭をよぎったので取り敢えず聞いてみる。

「あー、お前って転校生だったな。あんまり馴染みすぎてるからついこの前転入してきたことなんて忘れてたぜ。」

む、どういう意味だ？

「上級生の話だったな。俺もあんま知らないんだけどさ、二年生からは定期的に集団演習つてのがあらしいんだよ。それって魔獣指定区域に行って実際に魔獣と戦ってみるっていう危ない授業でさ、単独じゃ危険だから二、三年混合でチーム組むらしい。有望な生徒をスカウトするための品定めするとかどうとかじゃないか？」

「へー、意外と面白そうな授業あるんだな」

魔獣ってのは人間が魔法を使えるようになったときにいきなり現れだした生物のことだ。性格は大体のやつが好戦的。外見がうさぎみたいな魔獣でも熊を食ったりするぐらい怖いし強い。

魔獣指定区域ってのは魔獣が集団で生息してる場所のこと。一般人は立ち入り禁止になっている上に、その近辺10km範囲に住み着くことは法律で堅く禁じられている。

ちなみに召還術師はその魔獣を手懐けて戦わせる術師のことだ。

俺も任務でたまに指定区域に入って行って適当に数減らしてたな、などとどうでもいいことを考えていると、ふと疑問が浮かんだ。

「ん？それじゃあ三年は関係無いんじゃないのか？俺たちが二年に入るころには卒業してるわけだし」

「いや、そうでもないんだな、これが」

「は？なんで？」

今言ったことなら俺たちがその集団演習ってのをやるのは二年生からのはずだ。

そうじゃない？

頭に浮かぶ疑問が泡のように浮いてははじけ、また浮いてははじけていく。

「なんでも“推薦枠”ってのがあるらしい」
「推薦枠？」

なんじゃそりゃ？

「一年のトーナメントで十位以内に入って、どっかのチームリーダーに推薦してもらえればそのチームに入れるんだと。だから三年も観戦しにくるみたいだぜ」

「ふーん。じゃあ紅葉もその集団演習つてのやったことあんのか？」

俺が問うとライラが首を振る。

「さっき言っただけど一年だけだ。中学の時は含まれねーよ」

「あー、なるほどな」

じゃあ無理だわな。

いくら強くても経験の無い子供が魔獣と殺り合ったら命を落とし兼ねない。

紅葉が普通の魔獣と戦って死ぬとは思えないが、何が起っても取り替えしがないのが魔獣指定区域だ。

内心でその校則を作った人に感謝していると、ライラが思い出したように呟きだした。

「・・・そう言えば去年その校則について一騒動あったっけな」

「騒動？」

「あつたわね、そんなこと」

いきなり後ろから声をかけられて心臓が飛び出しかけたが、なんとか表情に出さないように自制できた。

後ろを振り向くと、今日はその長い黒髪を後ろで纏めた紅葉が立っていた。

「おはよう、紅葉。で、何があつたって？」

「おはよ。なんか去年中3の一位になった子を自分のチームに入れて
させてくれ、て言い出すリーダーたちが沢山いて、まあ結局無理だ
ったんだけど」

「へー、確かレア持ちなんだっけ？」

レア持ちっていうのは伝説武器保持者の略称のことだ。他にも伝説
武器をレア武器、と言ったりする。

「そうそう。確かにあの子ぐらいのレベルなら三年にもそうはいな
いと思う」

「へー、そんなにか」

そんな奴保持者にいたっけ？

一人だけ思い浮かぶんだが、あいつは軍隊所属のはずだしなー。

あ、でももう一人いるにはいるんだが、やっぱないな。

「まあ伝説武器保持者ってこの都市に4人もいるんだけどさ、やつ
は自分のチームにほしいつてもあるんだろっな」

「へー、そんなにいんのか」

すみません、5人です。

しかし俺のけて4人ねー。何人が会ったことありそうだが、自分か
ら会いに行く気なんてさらさらないので取り敢えずスルー！。

そうこうしているとHRの時間がやってきた。ミレア先生の話が終
わり、授業が始まる。

集団演習。

推薦枠。

そんな単語が頭の中を蹂躪して、授業なんて身が入らない。
単位のためとか思ってたけど、とんだびつくりイベントがあったもんだな。

つい頬が緩む。

これから楽しくなりそうだ。

episode 11 コーチ

「私に魔法を教えてくださいっ!!」

「……はい?」

昼休み。

今日もライラたちと学食かあ、などと呑気に立ち上がった俺はいきなり目の前の少女に頭を下げられた。

えーっと、かわいい子だな。

いや、そうじゃないだろ!!

今この子はなんて言った!?

魔法を教える!?!なんで!?

そもそも誰!?

このクラスじゃないよね!?

その前になんで俺!?

噴水のごとく沸いてくる疑問に混乱していると、目の前の少女が顔を上げる。

鮮やかな青色の長髪、女性として平均的な慎重に端正な顔立ち。その瞳は真剣に俺を見つめていた。

「あ、申し遅れました。第11高校一年B組の早川綾芽はやかわ あやめと言います」

ほう、お隣さんか（悠希たちはC組）。などと思当はずれなけとを思ってしまったのは混乱しているからだ。そうだと願いたい。

「えっと、じゃあ早川さん」

「綾芽でいいですよ」

なんだかペースを掴みにくいな、この子。

「じゃあ、綾芽さん。取り敢えずなんで俺に？」

まず当たり触りの無いところ攻めていこう。うん、それがいい。

「はいっ！華瀬さんが学年6位の波風さんにあっさり勝ったと、友達に聞いたので」

「うん、その友達連れてこようか。でないと俺が殺される」

後ろからとてつもない殺気を感じるんですが、まさか紅葉さんじゃありませんよね？怖いから確認しないけど。

冷や汗がだらだら流れてくる俺の心情などつゆ知らず、話を続ける綾芽さん。

「それに華瀬さんって、英雄の『華瀬悠希』と同姓同名じゃないですか、そんな人に教えて貰うなんてちょっといいかな、って」

ビクウツ！！

いきなり笑顔でそんな爆弾を投下してきた。

心臓が飛び出すかと思う程の衝撃に、俺と紅葉は引きつった笑みを浮かべる。

「はははははー、同姓同名ってただだよー。そんなことないってー」

「そ、そうよ。あはははー」

俺も紅葉もこの際若干カタコトなのは仕方がない。

俺たちは今爆弾処理の最中なのだからそんなことに変わってなどいられるかつ。

ひとまず念話で作戦会議。

『まずくない？』

『非常にまずいな』

『どうする？』

『どうしようか』

やばい何も決まらない。

焦る俺たち。

そんな中、案外直ぐにことはすんだ。

「まあ、そうですねー。でも華瀬さんに教えて貰いたいっての冗談なんかじゃ無いんですよ？」

き、きたあー！！！！これだー！！！！

「う、うん。まあいいよ」

それぐらいでこの話がスルーされるなら安いものだ。

「本当ですか！？ありがとうございますっ！！」

「いやいや、こちらこそありがとう」

逸らされてくれて。

俺の最後の言葉に首を傾げる綾芽さんだったが、直ぐにそんなこと忘れて上機嫌で教室を出て行った。

「・・・・・・これが日本でいう嵐が過ぎたってやつか？」

「ああ、そんなとこだ」

ぐったりとうなだれる俺と紅葉。

訝しく見つめてくるライラだったが、すぐに興味を逸らして時計を見る。それに俺たちもつられる。

桜も待たせてることだし昼飯行かねーとな。

放課後。

俺はアリーナへ来ていた。もちろん綾芽さんの特訓のためである。トーナメントの近いこの時期はアリーナが一般開放されているため

生徒たちも自由に使える。既にアリーナにはチラホラ人影があり、皆技や魔法を磨くために努力を積み重ねている。

いいねー、若いって。

年寄りくさい思考を振り払い、待ち合わせの人物を待つ。

・・・遅いつ!!!

HRが終わってももう1時間は立っているはずだ。長引いたとしても大分前についても可笑しくないはずだ。

迷った？ いやまさか！。

「すみませーん!!」

そんなことを思っていると、目的の人物が現れた。

「待ちました？」

「うん、すごく」

ドラマみたいに「いや、今来たところ」なんて言う筈もない。そんな俺の態度にしきりに頭を下げる綾芽さん。

「す、すみませんっ！！その、迷ってしまっ」

「……………まじで？」

先ほどのバカみたいな予想がなんと当たってしまっていた賞金とか貰えないかな？

「いや、頭上げて。そろそろ始めないと日が暮れるから」

「は、はい！！すみませんっ！！」

いや、だから……………まあいいか。

俺の言葉にもう一度深く深く頭を下げ、目を瞑る。

「ジエネレート」

綾芽さんが呟くと手に光が集まる。実戦では目を瞑っての武装展開なんてできないが、学校の模擬戦なんかでは展開まで相手が待つてくれるので、集中しやすくするために目を瞑って行う人も少なくない。

やがて光が散り、彼女の手に一メートルほどの杖が現れた。

「特化型ねー」

魔力保有量が多い魔術師などに良く使われる魔法オンリーの補助武装だ。

なるほど、と頷いていた俺だったが、次の瞬間には啞然とさせられた。

「おいで、クウ」

彼女が呟くと今度は空中に魔法陣が浮かび上がる。
その中から水色の少女の妖精が現れたのだ。

「せ、精霊術師っ!?」

さっきの魔法陣。あれは召還術師や精霊術師が魔獣、精霊を呼び出すために展開する物だ。別にそこまで珍しいものではない。だが問題があった。

「なんで俺に教えてもらおうと思ったんだっけ？」

「え？友達が華瀬さんの魔法がすごいって言ってたからですけど？」

はあ、この子はほんとに確信犯なんだか天然なんだか。

「確認のために聞くけど、魔術師と精霊術師だと魔法の発動の仕方が違うって知ってる？」

「え!? そうなんですか!？」

やっぱりか……………。

「いいか？魔術師は自分の魔力を補助武装に組み込まれた術式に流し込んで発動させるのに対して、精霊魔法は魔力を補助武装に流し込んで術式を展開、そして精霊が補助武装に魔力を流し込んで発動するという手順が必要なんだよ。精霊と同じ属性のしか使えないけど、その分精霊魔法は少量の魔力でも威力が強いつてわけだ」

「そ、そうだったんですか……」

なんでそんなことも知らないのだろう。こんなの学園都市の小学校で教えられただろうに。

「その、私勉強苦手で。成績もいつも下の方で」

そんな俺の疑問を察したのか、苦笑いをしながら言ってくる。上目遣いが妙にかわいらしい。

「……まあいいか。そのかわり役にたつかわからないぞ」
「はいっ！お願いしますっ！」

満面の笑顔を向けてくる綾芽さんに毒気を抜かれた俺は、これから彼女に魔法を教えることになってしまった。

この日はアリーナが閉まるギリギリの時間まで行われたのだった。

トーナメントまで後三日。

episode 11 コーチ（後書き）

感想お待ちします。

episode 12 英雄の肩書き

“英雄”

その肩書きは嫌いだった。

ただ怒りに身を任せて殺戮の限りを繰り返していただけなのに、後々そんな風に呼ばれ出した。

呼ばれる度に「人殺し」と罵倒されている気がしてならない。事実向こうの国ではそう呼ばれているだろう。

別にそのことに後悔しているわけではない。

ただそう感じるというだけだ。

だからその肩書きが“英雄”から“犯罪者”に変わったところで何も感じない。

だがなんだろうこのやり場の無い気持ちは。

矛盾している。

何も感じないはずなのに苛立ちを隠せないでいる。

そんな自分がただやるせなくて、情けなくて。

俺はただ心の中で叫び続けることしかできなかった。

7月18日木曜日。

今日も暑い中蟻たち（俺たち）はせっせと巣穴（教室）に餌（教材）

を運んでいた。
なぜこうなったのか改めて振り返ることにしよう。

数分前。

「あら、いいところに」

そんなミレア先生の第一声には嫌な予感しかなかった。

「どうしたんすか、先生？」

おい、ばかやろう。

この選択肢は黙って通り過ぎるしかないだろうっ
いやだよ、絶対嫌なことしかおこらないよ、今死刑宣告待つ囚人の
気持ちだよ。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど」
そらきたぞ。

「もちろん慎んでおう」
「辞退させて頂きます」

何か勝手に承諾しそうになったバカがいたので変わりに断っておい

た。

「何言つてんだ！？ミレア先生の頼みだぞ！？」

「お前こそ考えて見ろっ！！相手はあのミレア先生だぞ！？」

睨み合う俺たち二人。

やがてどちらからでもなく。

「「じゃんけん」」

「なのであの時に俺はパーを……」

自分の手が恨めしい。

そんな出来事があり、現在教材室から次の魔術学の授業に使う教材を運びに行くところだ。

教材室は校舎の隣に位置するため、屋外を通らなければならないのだ。

「なんでここだけ校舎と別なんだよ」

「魔法に使う教材なんて幾らでもあるからな。量てきに校舎内だと入りきらないんだと、ほっ」

頼まれた教材を抱え、俺たちは来た道を戻る。

「なー、これ終わったらジューズ奢って。てか奢れハゲ」

「なんで俺が奢んなきゃなんたいんだっ!?!?てかハゲてねーよ!」

「え?気づいてないの?頭頂部の頭皮が若干……」

「マジで!?!やばい!?!どうしよう!?!」

「正常なままだった」

「悠希っ!?!」

しょーもないことで笑い合い、道も半ばまできた。

もう少しで着く。

そんなことを思っていると突如耳元で誰かが囁いた。

ゾクッ!!

ゾツとするような冷たい声、背筋に途轍もない寒気を感じ、反射的に振り向く。

だが、そこには何もない道がただ延びているだけだった。

気のせいかな？

いや、そんなはずはない。

あの背筋に走った戦慄は本物だったはずだ。

ならば十中八九、ネクロマンサー死霊術師の“ハイド隠蔽”の魔法だろう。

だが問題は普通の死霊術師の“隠蔽”で俺が気づかないはずがないということだ。

「ん？どうした悠希？」

「……なんでもない」

訝しげな顔で俺の顔を覗き込むライラにそう答え、再び歩みを進める。

あの凍るような冷たい声音。どこかで聞いたことがある。

この都市の住民、もしくはここに侵入でき、俺の背後を取れるほどの実力者で、なおかつ幻術などに長けている死霊術師。

（あいつ……いや、そんなはず……）

頭を振り、その考え否定しようとする。だが、頭の中にへばりついたまま中々消えてはくれない。

さっきのあの言葉が心の中に居座り続け、心に暗い影を落とす。

とりあえず手に持った教材を教室に運ぶ当初の目的を遂行するために足を動かす。

背後に気をつけてください。

未だに耳に残るその言葉と冷たさから逃げるように俺その場を後にした。

5 限目、死霊学。

この時間は死霊術師の特徴などについての授業だ。

死霊学講師のデミス・クリア先生が、仏頂面のまま教科書を読み上げている。

普段なら寝て過ごすのだが、今の俺には死霊術師は特別な意味合いを持つ。

「死霊術師は自身の姿を隠した隠密行動を得意とする術師だ。幻術で身を隠し、ある時は魔法、ある時は武器で、またある時は使い魔で相手に襲いかかる」

普通の術師にも魔獣を手懐けて使い魔とするものはいる。ただ、召還術師と違うところはそれ自体で戦うか、あくまでサポートをさせるか、それに使い魔の数などもある。使い魔を手懐けるにはそれな

りのセンスと知識がいる。そのため召還術師の使い魔の数の平均は15・3、それに対して他の術師は0・4。この統計から見てもわかる通り他の術師だと極端に少ない。

そんな中でも死霊術師の中では使い魔を所持しているものは多い。理由としては自分の身代わり、もしくはさつき先生が言ったように死角からの先制攻撃などが挙げられる。

「もう一つ彼らには特殊な魔法がある。それが“傀儡”^{くぐつ}だ。無系統魔法に属するこの魔法は、ある程度の質量の物体を自由に動かせる。死霊術師が戦場でこそ、その真価を発揮できるのは動かせる物、要は死体が沢山あるからだ」

そのことを聞いた生徒はみな顰めっ面をしだす。女子の中では顔を青白くさせている人もちらほら。

無系統魔法、または解析不能の能力。^{インビシブル・アビリティ}

解析不能の名前の通り、現代の科学では解明できない魔法のことだ。その人が生まれたときから潜在的に持っている固有魔法や、伝説武器の特殊性についてもこれが言える。

その中でも“傀儡”は固有魔法に含まれる魔法だ。

そんなことは実戦でなんども見てきたことだし、普段ならこの授業も退屈だと感じるのだが、今朝のことが未だに頭から離れずについて聞き入ってしまった。

我ながらどうかしてる。

内心で苦笑しながら意識を思考に落とす。

今朝のあいつ死霊術師だった、それは間違いない。

だが普通の学生でも無いだろう。でなければ気づかないはずがない。

俺の頭の中では半ば誰なのか結論がでている。

だがまだ確証がない。

だがもしあいつならなんの目的も無しに俺に接触する筈がない。

じゃあなんの用で？

俺が犯罪をおこしたからか？

でもそれだけでわざわざあいつが出向く玉か？

頭がオーバーヒートしそうな程の疑問を処理していると、ふとある考えが頭をよぎった。

わからないなら直接本人に聞き出せばいい。

そんな元も子もないことなのだが、なんとなくあいつがいそうな場

所に心当たりがあった。

取り敢えず頭の中で予定を組み立てる。

そうこうしている内に授業が終わりへと近づいていった。

前ではライラがいびきをかきながら爆睡。

隣ではせっせと鉛筆を動かしている紅葉。

そんな二人をぼんやり眺めながら授業が終わるのを今か今かと待っていた。

e p i s o d e 1 2 英雄の肩書き（後書き）

感想よろしくお願いします。

episode 13 死神との約束

「2日間ありがとうございましたっ!!」

目の前で深々と頭を下げる綾芽さんに、どうしたものかと苦笑いしながら考える俺。

今は7時半少し前。

今日も彼女の指導をして、アリーナの閉館時間ギリギリに切り上げて寮へ帰っているところである。

明日はアリーナが整備で使えないため、明日の特訓も無くなり、自動的に今日までとなったのだ。

「そんなに畏まらなくなったっていいって。たった2日間しか教えられなかったし、俺も精霊魔法を直に見られて参考になってるから」

思ってもいないことを口にした。

精霊魔法を参考にどうかいうレベルはとくに卒業しているし、他国の軍隊と合同で任務に当たっていたこともあつて熟練した精霊術師を目の当たりにしたこともあるので今更参考にはならない。

「そうなんですか。それなら良かったです!」

満面の笑顔を向けてくる彼女に心が痛む。

纏わりつく罪悪感に気付かれないよう俺も笑顔を向ける。

「それじゃ俺こっちだから」

「え？寮はこつちですよ？」

首を傾げる綾芽さん。

「ああ、ちよつと用があるから」

「そうなんですか？なら門限に遅れないようにしてくださいね。寮長の説教がこれまた長いんです」

忠告してくれる彼女に「努力する」と手を振り寮とは別の方向へ向かう。

「……ジェネレート」

彼女が見えなくなったところで呟く。手首に光が纏わりつき、ブレスレット型の補助武装が現れた。

特化型だ。

補助武装を複数持つやつは少数ながらいると前に話したと思うが、

俺はその中でも一際多い。

マジック・トレース
瞬間展開なんていうチートな技を使えるのでタイムラグ無しに武器を持ち替えられるからだ。

だが特化型と武器型を同時に使いこなせるやつは極稀だ。

理由は三つある。

一つは魔法を並立発動出来る者が少ないということ。
簡単に言つと魔法を発動させる手順を同時に複数も出来る人間は限られているということだ。

二つ目は補助武装はその構造上常に魔力が流れる仕組みになっていること。

特化型と武器型では構造が異なるため、流す魔力も別々に流さなくてはならない。

最後は魔力の消費が凄まじい割に発動するまでの時間が長いということ。

当然のことながら一つのコップに水を入れるのと2つのコップに同時に水を入れるのでは2つの方が量も時間もかかる。

魔力もそのことが言えるわけだ。

だから特化型と武器型2つを持つ奴はほとんどいない。

俺はその三つ全て問題無く使えるので、大丈夫なのだが。

魔力を流し込み、術式を展開。

魔法が発動し、俺の周りを風が覆う。突如足が地面から離れ、俺の体は上昇していった。

風属性の“浮遊”という魔法だ。

これまた魔力消費が激しい高等魔法を使って移動することにしたのだ。

俺はそのまま歩いてきた方向とは反対　つまり学校へと向かつ

た。

流石に薄暗い空に点のように浮かぶ俺に気づくやつなどいないだろうと思った矢先に不穏な視線を感じた。

「……ビンゴ」

学校まで残り1kmぐらいの距離でこの射抜くような視線を感じるということは、俺の予想が的中していることを伝えていた。

屋上にゆっくり着地すると、そいつは突然現れた。いや、元からいたのだろうが“ハイド隠蔽”の魔法を使っていたのだ。

目に映るのはプラチナブロンドの髪を短く切った俺と同じ歳なのだが、そうは思えない小柄な美少女だった。だが、その少女の顔はおよそ感情というものが抜け落ちたように感じるほど無表情なものだった。

そんな中金色の瞳だけが俺を射るような視線を投げかけてくる。

「お久しぶりです“ テュラン” さん。よくここがわかりましたね」

「やっぱり“ トート” だったか。別に、ただの勘だよ」

“ 死神”^{トート}の2つ名を持つ彼女はニコラ・ベール。俺がドイツ軍との合同任務で出会ったドイツ軍所属の死霊術師だ。^{ネクロマンサー}（ちなみに“ テュラン” ってのはドイツ語で暴君って意味なんだとか。つけたやつに抗議したい）

「それで、どうしてここに来たんだ？」

改めての問い。だが予想通りの答えが返ってきた。

「あなたを抹殺するように命令を受けました」

「あー……やっぱりか」

予想していたとはいえ実際に口にされると結構辛いな。頭をガシガシ搔いていると、ある疑問が沸いてきた。

「じゃあなんであの時殺らなかったんだ？あの時以外でも殺す機会なんていくらでもあっただろ？」

あの時とは今朝の教材を運んでいたときのことだ。思えばあの時以外にも隙なんていくらでもあったはずだ。当然の疑問に、しかし全く別の答えが返ってきた。

「私も明日からこの高校に転入することになりました。既に書類は提出しています」

「はい？」

抑揚の無い声でそう言うニコルに対してわけがわからず混乱する俺。
そんなことなどお構いなしに彼女は続ける。

「明後日のトーナメントには出場できるそうです」

「は？」

全く意味の解らない言葉を紡ぎ出すニコラの顔から思考を読もうとするが、無表情の彼女からそんなことは無駄とすぐに諦めた。
首を傾げる俺に、彼女は更に意味の解らないことを言い出した。

「そこで私と戦ってください」

「……………は？」

さつきから「は？」しか言っていないな、俺。

いやいや待て待て！！

何考えてんだよこいつ。

全く表情を動かさないこいつに探り合いで勝てるはずもなく、取り
敢えず思いついたことを問う。

「……………えーっと……………なんで？」

「あなたには前に一度負けましたから」

「は？」

あれ？俺、こいつとやり合ったことあったっけ？

いくら記憶を辿っても思え出せない。そんな俺を見て察したのかニコラが続ける。

「第六次世界大戦の時です」

「……」

その言葉に顔をしかてしまう。

忘れていたのに忘れられない単語。

俺の心に穴を空けた出来事。

俺が英雄なんて欲しくもない栄光を得た戦い。

七年前。

当時最強の軍事国家であるロシアが中国に侵攻したことが引き金となり、世界中を巻き込んだ大戦争。

およそ二年間で一旦休戦になり、今現在も冷戦状態が続いている。

頭の中でズキズキ痛む何かを抑えながら、言葉を紡ぎ出す。

「お前も“あれ”に参加してたのか？まだ10年ってなかったろ？」

「あなたにだけは言われたくありません」

即座に無表情で言い返してきたニコラに思わず苦笑いを浮かべる。
だが、それでもおかしい。

「あの時はヨーロッパと極東、あとアメリカは軍事同盟を結んでいたはずだ。ドイツもその中に含まれていたはずだろ？」

強大な戦力を誇るロシアに対抗するためにすぐさま各国が軍事同盟を結んだ。

それでも今は休戦状態に持ち込んだだけなのだ。

首を傾げる俺に、ニコラはコクリと頷く。

「そうです。私は実際にはあなたとは戦っていません」

「どういうことだ？」

わけがわからん。

こいつは何が言いたいんだ？

もう今日何個目かの疑問符を浮かべていると、急にニコラが押し黙った。

重苦しい沈黙が数瞬流れたが、彼女は口を開いた。

「あなたは私の獲物を横から奪い取りました」

……あれ？そんなことあったっけ？

「私は当時には伝説武器を所持していましたが、そんなときに初めて伝説武器所持者と戦いました。ですが苦戦してしまっていたところをあなたが乱入してきて一瞬で終わらせてしまったんです」

……あ。

「……もしかして弓使いの女か？」

コクリと頷くニコラ。

あー、思い出した。

確か開戦から一年ぐらい経ったときだっただろうか。

まだそのときは暴走していなかった頃なのでよく覚えている。
だが、あの時は。

「……………女の子が襲われてると思ってたぞ」

あんなところに子供がいたら普通逃げ遅れたって思うだろ。

俺もなんとか間違えられてその度に居心地の悪い思いをしたものだ。
そんな感慨に捕らわれていると、ようやく話が見えてきた。

「つまりあの時自分が倒せなかった相手を俺が倒したのが悔しいと？」

コクリ。

再び頷いた。

こいつ見かけによらず負けず嫌いなんだな、きっと。
けどなあ。

「なんでわざわざトーナメントなんだ？」

当然の疑問。だが、

「他のところだと狭すぎます」

「あーなるほど」

こんなところでレア持ち二人がやり合ったらとんでもない大惨事になりかねない。

でも俺に何のメリットがある？

「あなたが私に勝った場合、軍には私から命令の中止を要求します。もし拒否されても私が軍を辞めればすむ話です」

「は！？」

何をいきなり言い出すんだこいつは。

俺の心情を察したのだろうニコラがそんなことを言い出した。俺としては嬉しいのだが。

「……お前はそれでいいのか？」

「はい。これは私の意志です。それに私は他の保持者たちと同じように祖国への執着はありませんので」

即答でそう言い切るニコラ。

伝説武器所持者はどういうわけか自国への執着心が薄い。もちろんそうじゃないやつもいるが、基本的に保持者たちは自分の欲求を優先させるのだ。

「そうか、なら俺も遠慮せずに済むな」

「伝説武器を使いたくないなら使わなくてもいいです。勝てる自信があればですけど」

うっ、読まれてる。

こいつもしかして精神干渉の固有魔法でももっているのではなからうか。もしそうなら今世紀二人目の発現者だな。

「では私はこれで。また明日お会いしましょう“テュラン”さん」

「ああ」

突如彼女の身体が霞む。

“隠蔽”の魔法を使ったのだろう。そこで俺はあることに気づいた。

「これからは“テュラン”は止める。恥ずかしい」

「ではなんと？」

「好きに呼んでいい」

もうすでに彼女の姿は見えなくなってしまったが、顎に手を当てて悩んでいるのがわかった。

「では悠希さん、と。私のこともニコルで構いません」

「わかった」

“ニコル”という愛称で呼ぶことを認めてくれたって事は少しは距離が縮まったかな？

気配も感じられなくなった彼女にそんなことを思い、少し嬉しくも感じた。

このときには門限を過ぎていることになった。たぐいづいてなかったのだった。

トーナメントまで後2日。

episode 14 心の弱さ

「ニコラ・ベールです。よろしく願いします」

抑揚の無い声で無表情な美少女がそう言うと、クラス中が沸いた。盛り上がるクラスメートとは裏腹に、俺は顎が机につくかというぐらい口を開けて呆然としていた。

俺の前と左、つまりライラと紅葉が首を傾げながら俺を見ている。

何が起こったかと言うと、ニコルが転入してきたのだ。しかも俺のクラスに。

ふと昨夜の彼女の言葉が頭をよぎる。

『また明日お会いしましょう』

……………。

あいつ知ってやがったなっ！！！

せめて心の準備ぐらいさせてほしい。

恨めしく睨みつけると、クラスメートの熱狂（男子女子両方）を受けながらも無表情のニコルは唐突に俺へと目を向けた。視線と視線が交わる。

「先生。あそこの席に座ってもよろしいでしょうか？」

ニコルが指差したのは俺の後ろ。

クラス中が静まり返り、俺を凝視する。

だが口を開けて呆然としている俺の意識には入らない。

「はい、いいですよ」

絶対面白がっているミレア先生が頷くと、スタスタとこっちに向かってくる。すると彼女は俺で足を止めた。

「おはようございます悠希さん。昨晚からまだそんなに経っていませんが、今日も1日よろしくおねがいします」

そう言つてぺこりと頭を下げる。

ニコルのこの発言でクラス中から悲鳴なんだか歓喜なんだかよくわからない叫びが上がった。

いきなり何言い出すんだこいつはっ!?

「ゆづき……」

「……ゆづ、昨晚何があつたの?」

「違う!! 激しく誤解している!!!!」

ライラと紅葉が俺を疑わしげな視線で見つめてくる。

本当に違うんだーっ!!!!

それから誤解を解くのに1限目の魔術学を丸々使ってしまった。

元凶であるニコルは無表情のまま首を傾げるだけなのだから余計な
ちが悪い。

明日はトーナメントのため、授業は午前中だけとなった。今日は整備のためアリーナも使えず、特訓もできないので俺の部屋はライラ、紅葉、桜、綾芽さん、ニコルの6人が集まって少々狭く感じてしまう。

「なんで俺の部屋に集まるんだろう？」

「さあ？」

俺の素朴な疑問に曖昧に答えたのはライラだ。

「男の子の部屋に入るのって初めてだから緊張しますう」

「ここが悠希さんの部屋なのですね。綺麗に整理整頓されています」

初めて来た二人（前者が綾芽さんで後者がニコル）は物珍しげに辺りを見回す。

「お兄ちゃんって昔から几帳面だもんね」

ニコルの言葉に桜が頷く。

「別に几帳面ってわけじゃない。ただ汚いと落ち着かないだけだ」

「世間一般ではそれを几帳面と言います」

ニコルの厳しいツツコミ。

心なしかいつもより表情が和らいでいるような……いやわかんね。

それからくだらないことなどで盛り上がっていると、ライラが思い出したように口を開いた。

「そういえばさ、ニコラちゃんはトーナメントに出られんのか？」

「あー、そうね。なんてったってトーナメントの1日前だし」

それに紅葉も便乗する。もっともな意見だがニコルは首を縦に振った。

「ミレア先生に聞いたところ、トーナメント表に組み込んでいただけるようです」

「そうなんですか。がんばってくださいね、ニコラさん」

笑顔で応援する桜にコクリと頷くニコル。

『で、この子はどっいった知り合いなの？』

突然頭に紅葉の声が響いてくる。念話だ。

『だからそんな関係じゃ』

『そうじゃなくて』

俺の言葉を遮り、真剣身を帯びた声色が頭に響く。

『……なんのことだ？』

『とぼけないで』

誤魔化そうと試みるも、直ぐにバレてしまった。幾分か声の温度が低くなったのは気のせいではあるまい。

『弱ったねー……』

どこから話した物か。

『えつとな』

『ただの戦友です』

観念して答えようと思った矢先、別の声が割り込んできた。驚いて辺りを見回すと、ニコルがジーっとこちらを見ていた。

『ね、念意同調！？』

隣ではこちらも驚いた紅葉が目を見開いていた。

念意同調というのは、念意による通信を傍受、または妨害するための魔法だ。

だが傍受する回線に割り込むために脳波をその回線に合わせなければならぬため、かなり難しい高等魔法に値する。

『に、ニコル……。脅かさないでくれ』

『こそそと人の秘密を話すのは感心しませんね』

『すみません……』

絶対零度の声に俺たちは消え入りそうな音量で声を飛ばした。

『先程も話した通り、私と悠希さんはただの戦友です。一年前、悠希さんはドイツ軍と合同任務を受け、私はそこで知り合いました』

六年前の出会いは意図的に避けてくれたのだろう。無表情ではあるが人の嫌がることを言わない彼女に内心で感謝を述べる。

それで満足したのか、紅葉は「そ、そういうこと」と半ば逃げるように念話を切った。

今、回線に入っているのは俺とニコルだけ。だが、妙に重苦しい沈黙がながれていた。

『ここにいる方々はみな知っているのですか？』

沈黙を破ったのはニコルだった。知っているとは俺の秘密のことだろう。

彼女の問いに他のみんなには気付かれないように小さく首を振った。

『……いや、紅葉だけだ』
『そうですか』

それだけ言い残し、ニコルも念話を切る。

さっきの話の意図はなんだったのだろうか？

ただの確認のための言葉だったのかもしれない。もしかしたら違つかもしれない。

紅葉とニコルの声が聞こえなくなった頭の中は妙に静かに感じた。

トゥルルル

ライラたちが帰ったのを見計らってシャワーを浴び、髪を拭いている所でケータイが鳴った。

ディスプレイに表示されているのは『波風一葉』の文字。

時刻を確認する。

今は夜の8時半。

こんな時間に呼び出したたらどうしたものかと冷や冷やしながら通話ボタンを押した。

「もしもし」

『あ、悠希？今ちよつといいかしら？』

案の定電話越しから一葉の優しい声が響いてきた。

「ああ、できれば外出はやめてほしい」

『安心なさい。今日は電話で済みますから』

その言葉を聞いた瞬間内心で安堵する。だが、続けられた言葉は安堵とは程遠かった。

『あんたの濡れ衣の件だけど、やっぱり少し可笑しなところがあるのよね』

「おい……」

『違法なことはやってないから問題ナツシング』

真面目な話もこいつが話すと緊張感なくなるな、このやろう。
俺の考えを即座に否定して言葉を続ける。

『魔力の痕跡が見つからなかったみたいなのよね、見つかったのは殺された術師の物だけ。普通なら武装展開しただけで痕跡は残るはずなんだけどね。一つを除いて』

「……伝説武器保持者が絡んでるって？」

普通の補助武装は展開の際に魔力を撒き散らすように具現化させる。だが伝説武器は魔力を発散させずに具現化するのだが、未だにどういうメカニズムで具現化されるのはわかっていない。

俺の推測を肯定するように一葉は話を続ける。

『そう。で、被害者の傷口から推測すると武器は刀じゃなくて剣なんだって。刃渡りはどれくらいかわからないけど』

「日本が保持している伝説武器の中で剣は二つ。俺の“フランク”と“デュランダル”だけ、ってことか」

伝説武器、それも剣の類となればある程度は絞り込める。

アメリカの“エクスカリバー”に“テストロス”、イギリスの“メルフェス”、中国の“スサノオ”そして。

「ッ！……ロシアの“ガラドボルグ”！……」

『そう、私は全部ロシアの自作自演だと思う』

その瞬間“やつ”の歪んだ笑みを思い出してしまう。それと同時に吐き気がこみ上げてきた。

悲しみ、怒り、恨み、憎悪、様々な負の感情に押しつぶされそうな胃を抑え、なんとか耐える。

『……大丈夫？』

ようやく落ち着いたところに一葉の心配気な声が響いてきた。

「ああ、悪い。でもやつが関わってるなら、もう一葉は心配しなくていい」

『なんでもかんでも一人で背負い込むのは悪い癖』

一葉の真剣な声に思わず苦笑を漏らす。

「そうだったな」

『わかればいいの。それじゃおやすみ。明日はがんばってね』

「ああ」

電話を切ると、堪えきれなくなった吐き気と共にそのまま洗面所に駆け込む。

「うっ」

我慢しきれず胃の中の物を吐き出す。何度も何度も。

「はあはあ……くそっ！！！」

あいつを思い出ただけで嘔吐する自分の弱さに反吐がでる。

擦り切れるような痛みをあげる胃を俺は思いっきり殴りつけた。

「っっっ！」

痛みで床にうずくまってしまふ。

そんな自分にうんざりしながら瞼を閉じた。

こんなんでニコルに勝てるのか？

頭をよぎるそんな疑問も、今はどうでもよく感じてしまふ。

俺はそのまま意識を手放した。

episode 15 沈みかける意識

ドンドン。

ドアを叩く音で俺は目を覚ました。

ドンドン。

喧しい音が部屋を包む。

「おい悠希、早く起きろ」

「ゆうー、集合に遅れるよー」

この声はライラと紅葉か。

今何時だろう？

時間を確かめたいが、身体がすごくだるい。

「お兄ちゃん？早くー」

「悠希さーん。私たちまで遅刻しちゃいますう」

桜と綾芽さんが催促する。

「ゆう？入るわよ？」

ガチャリと扉が開く音がした。それと同時に4人分の足音がこちらへ向かってくる。

一人足りない気がしたが、それはニコルの物だろう。

「ッ！？おい、どうした悠希っ！？」

角に差し掛かったところで俺が床に倒れていることに気が付いたのだろう。4人が駆け寄ってくる。すると綾芽さんが俺の額に手をやった。ひんやりとされていて気持ちいい。

「す、すごい熱ですよ！？」

彼女の言葉に全員の顔色が青くなる。だが今はそんなことどうでもいい。

「……ライラ、今何時だ？」

「まさか出るつもりなのか！？やめとけて！！」

「何時かって聞いてんだよ」

「ッ！！」

幾分凄みを聞かせた声を投げかける。そんな俺に吞まれたのか、ライラはポツリと呟いた。

「……7時57分だ」

「開会式は？」

「……………8時半」

それだけ聞き出すとヨロヨロと立ち上がる。

「ちょっとお兄ちゃん！？そんなふらふらなのに本当に出場するの！？」

心配気に見つめてくる桜。見ると他のみんなも同じ様な視線を投げかけていた。

無理矢理笑顔を作り、桜の頭にポンつと手を乗せる。

「心配しなくても大丈夫だって。そのうち治る。ちょっと準備に手間取るから先に行っててくれ。確か集合はうちの高校のアリーナだったよな？」

「あ、ああ……」

それでも動く気配の無いみんなに、どうしたものかと重たい頭で考えようとすると、紅葉が先に口を開いた。

「行きましょう。ここに居てもゆうが気を使うだけだもの」

「……わかった」

そう言うのとそれぞれ部屋を出て行く。

最後に部屋を出て行くとする紅葉が、ふと足を止めた。

「……絶対来なきゃ許さないから」

「俺が嘘付いたことなんかあったか？」

「……………バカ」

最後に軽口を言うと、紅葉が何か言ったような気がした。だが考えるよりもぐらつきかける身体を支えなければならなくなり、そんな暇も無かった。

体内に魔力を循環させ、筋肉の代わりに魔力で身体を動かす。自分を一つの機械として扱うイメージだ。

俺はその状態でクローゼットにある制服に着替え始めた。

寮を出たときには既に開会式まで15分を切っていた。走らないと間に合わないだろう。だが、

「ジェネレート」

ブレスレット型の特化型補助武装を呼び出し、魔力を流し込んで、術式を発動させる。

この前と同じ“浮遊”の魔法を使って俺はアリーナへ一直線に飛んでいった。

およそ五分で到着し、近くの茂みに着地する。

もう何をするにしても億劫だ。だがこんなことで諦めていたら一生あの男に屈するような気がしてしまう。

それだけは絶対ごめんだ。

ふらつく身体に鞭を打って、アリーナの中へ入っていく。

中には第11高校の一年生だけで埋め尽くされていた。
これの26倍の生徒数か。
そりゃすごい。

取りあえずCクラスの場所を探す。今日は常に行くことになった身体強化で視力を上げる。辺りを見回すとすぐに紅葉たちを見つけることができた。

「すまん、遅れた」

うまく回ろうとしない舌までも魔力で動かす。もう自分の意志なのが魔力が意志になったのかよくわからなくなってきた。

「……本当に大丈夫なのか？」

「闘ってりや忘れられる」

未だに心配そうな視線を投げかけるライラに苦笑する。
すると、ある異変に気が付いた。

「ニコルはどうした？」

彼女の姿が見当たらないのだ。訝しく思って問うと、紅葉が答えた。

「さっきまで居ただけだね。先生に言ってどっか別のところに行っちゃったみたい」

「へー……」

正直ありがたかった。

今の俺の姿を見たら彼女は失望してしまうだろうな。そんな感慨に浸っているとついに開会式が始まった。

その時のことは、正直良く覚えていない。

開会式が終わったのか、気が付いたら俺は歩いていた。

ケータイを開く。

俺の最初の試合はどうやら15分後、つまり一番最初の第一試合のようだ。

場所は第6高校の第2アリーナ。

意識が無かった割にしっかりしていたらしい。

ゲートがある方角にきちんと向かっていた。

「転移、第6高校」

ゲートに付き、俺は呟く。

すると沢山の光に包まれ、次の瞬間には別の場所に立っていた。

眼前には第11高校とあまり変わらない馬鹿でかい校舎が広がっていた。

ここが第6高校か、あんまりデザインは変わらないんだな。

そんな感慨に浸りながら足を進めるが、ある疑問が過ぎる。

第2アリーナってどこ？

なにぶん初めて参加するもんだから他校のどこにアリーナがあるかなんてわからない。

取り敢えず誰かに聞こうと思い、周りを見回す。するとお喋りをしている女子生徒三人を見つけた。この子たちに聞くことにしよう。

「ちょっといいかな？」

「え？は、はいっ!？」

いきなり硬直し出す彼女たち。だがこっちとしてもあまり構ってられない余裕はない。

「第2アリーナってどこか教えてくれない？」

「は、はい!!えっと、そこを真っ直ぐ行つて……」

道を指で指しながら何故かたどしく説明しだす黒髪の少女A。
だが、

「……………ごめんさっぱり」

さっぱりわからない。

そんな俺をクスツと笑う茶髪のおっとりした少女B。

「よ、よろしければご案内しま、致しましょうか？」

何故かすごく仰々しく提案してくる金髪の少女C。

「ああ、助かる」

俺が頷くと、ガッツポーズやハイタッチを交わし出す彼女たち。訝しげに首を傾げる。

「どうかしたのか？」

「……いえっ……」

「凄く息びつたりだな」

まったくズレの無い反応。俺の素直な感想にえへへ、と照れる少女B。

「そろそろ時間無いし……いいかな？」

「……ごめんなさいっ」

と、少女C。

「あ、あの……私、春日野遥かすがのはるかっていいいます……！」

少し歩くと少女A　もといい春日野さんが少々テンパリながら名乗ってきた。

少し驚いていると、意図はわからないが同様に他の二人も便乗した

す。

「私は水谷里香^{みずたに りか}だよ。私たち三人はこの生徒なの。よろしくねえ」

「せ、セシリー・ビーンですっ！！よろ、じゃなかった！！ふつつか者ですがよろしくお願い致しますっ！！！！」

少女Bこと水谷さんと、少女Cことビーンさんも自己紹介していった。

正直俺は今凄く喋りたくない状態なのだが、女の子に名乗らせといて自分だけ名乗らないのは寝覚めが悪いだろう。

「第11高校の華瀬悠希。よろしくな」

「……え、え……っ?!?!?」「」「」

え、何?なんか変なこと言ったっけ?

いきなり驚きだした彼女たちに若干後ずさると、春日野さんが目を爛々と輝かせて詰め寄ってきた。

「も、もしかして波風さんを倒したっていう最近話題の転校生さんですか?!?」

た、他校にまで伝わってんの!?

広めたやつ出てこい。今は無理だけどミンチにしてやる。

そんな風に質問責めを受けながら歩いていくと第2アリーナに到着した。

「で、ではゆっきーさんまた」

「またねえゆつきいー。観客席で応援してるからねえ」
「が、がんばってくださいませゆつきー様」

珍妙なニツクネームで呼びながら手を振ってくる三人。この短時間でいつのまにか愛称で呼び合う仲になっていた。別にいいんだが。

さつき観客席で応援すると水谷さんが言ったが、そこまで時間を取らせるわけには……と、抗議したのだったが、頑なに首を縦に振ろうとはしなかったのだ。

諦めた俺は手を上げて応え、控え室に向かう。

控え室は思いの外広かったが、今は第一試合ということもあって中には誰もいなかった。

途中ベンチに座りたい欲求にかられかけたが、ここで座るともう立てなくなるような考えに捕らわれてしまい、結局座ることはなかった。

開始三分前の放送が鳴る。

俺は重い身体を引きずって球技場内に向かった。

球技場内に上がると、観客席から歓声が湧く。だが、すでに思考さえも重たくなってきた俺には届かった。

前を見据えると誰かが立っていた。それだけしかわからない。

「君が噂の転校生か。今日は楽しませてくれよ」

もう声も出したくない。

このままぶっ倒れていたい。だが、そんな醜い醜態をさらせるわけにもいかず、ただ目の前の男を見据える。

そんな俺の態度をどう感じ取ったのか、男は舌打ちをした。

「随分生意気なんだね。上下関係つてのを教えてあげるよ。ジェネレートっ!!」

男が言い放つのと、開始前のサイレンが鳴り始めたのは同時だった。

「これより!! 第一試合華瀬悠希vsアルフレッド・ボートンの試合を始めます」

審判らしき男の声がスピーカーで増幅されて聞こえてくる。

「武装展開しなくていいのか?」

審判が問う。

だが、何を言われたのか理解できない俺は何も反応できなかった。

「そうか、では初めっ!!」

その声と同時に俺は対戦相手、アルフレッドの背後に半ば無意識で回り込んでいた。

ドサッ

会場内が静まり返る。

開始一秒も経っていないのにアルフレッドが倒れたのだ。

ぼかんとしている審判を尻目に俺は控え室へ向かう。

そんな俺の態度で我に返ったのか、彼が俺の下へ駆け寄きた。

「い、今のは何をしたんだ？」

至近距離で話しかけられたお陰で、俺に対するものと理解できた。

「別に。首筋を瞬間的に圧迫して気絶させただけです」

「ま、魔法は？」

「身体強化だけです」

愕然とする審判。

どうでもいいから早く終わらせて欲しい。

「もういいですか？」と、目で催促すると、ようやく気がついたのが再び声を上げた。

「す、すまない。勝者っ!! 華瀬悠希っ!!」

その言葉で正気に戻った観客が一斉に沸いた。
今度こそ俺は控え室へと戻っていった。

控え室に戻ると、ロッカーに置いてあった携帯に6通のメールが届いていた。

順番に見ていく。

ライラ

一回戦突破おめでとう！！
その調子なら大丈夫だな！！
こっちは波風が一回戦突破したぞ！！
俺もがんばるねーとな。

紅葉

初勝利おめでとう。
倒れちゃうんじゃないかって心配してたんだからね？
こっちも一回戦勝ちました。
お互い頑張ろう！！

桜

お兄ちゃんおめでとー！！
さすがお兄ちゃんだね！！
でも、あんなにきつそうにしたので心配です……。
無理しないでね？

綾芽

悠希さん初勝利おめでとーございます！！
私は悠希さんが勝つて信じてましたよ！！
お体は大丈夫ですか？
限界を感じる前に棄権してくださいね？

一葉

まずは初勝利おめでとー。
でもどうかしたの？
らしくなかったわよ？

大会運営

一回戦突破おめでとーございます。
対戦相手が決まりましたら再びメールさせて頂きます。

(ニコルからは無し、か。というか情報回るの早いな)

返信を打つ体力も無く、そのまま携帯を閉じた。

控え室を出ると、そこには先程ここに案内してもらった遙、里香、セシルの三人がそれぞれの顔に興奮を隠せないような表情を浮かべて立っていた。

「す、すごいです！！学年23位を瞬殺なんて！！」

真っ先に詰め寄ってきたのは遙だ。

若干気圧されていると、里香とセシルまでも寄ってきた。

「ゆっきーすごいですう。あれって身体強化あ？全く見えなかったよお」

「あ、あんな短時間の模擬戦見たことないでございますっ！！」

のほほんとした里香がそういうと、妙な尊敬語を使ってくるセシルが目を爛々と輝かせた。

「そ、そんなことないから、ね？」

ここで意識を手放すまいと必死に三人を宥める。
朦朧とする意識の中で俺たちはゲートまで移動した。

「あ、私たちは第9高校ですの」
「じゃあねえゆっきー」

「失礼いたしますっ!!」

ゲートまで到着すると、三人が先に転移する。

そこでようやく安堵の溜め息を吐くと、手放すまいと気を張っていた意識の糸がプツンという音をたてて切れてしまった。突如視界が霞だす。

「くそっ……!」

俺はそこで意識を手放した。

まどろみの中でわずかに写る視界には、無表情な女生徒が立っていた。

「ゆっ!!」

誰かが俺を呼んだ。

重たい瞼をゆっくりと持ち上げると、そこには紅葉、ライラ、桜の顔があった。どうやら気を失っていたらしい。どこかの高校の保健室のようで、消毒液の匂いが充満していた。

「……どれくらい気を失ってた？」

「ここに運び込まれて二時間ぐらい……だと思っよ？」

安堵の表情を浮かべる桜。見回すと他のみんなも同じような顔をしていた。

「早川さんもさっきまでいたんだけどな。次が初戦だから行かせた」と補足するライラ。

彼の言うとおり確かに綾芽さんの姿が無い。

「……俺の次の試合は？」

「まさかまだ出るつもり！？無茶よっ！！」

ということはまだ棄権にはなっていないらしい。

俺はポケットに突っ込んだケータイを開き、大会運営からのメールを確認する。

「あと30分後か」

ベッドから起き上がり立ち上がろうとすると、再び激しい目眩に襲われてふらつきかけたが、すかさずライラが支えてくれたお陰で、もう一回倒れずに済んだ。

「こんな状態でもまだ単位が欲しいのかよっ！！！！」

ライラの怒声が耳元に響く。
いきなりのもので驚いてライラの顔を見上げると、少し褐色の顔を憤怒に歪めさせていた。

「そんなものために、これ以上ダチを放っておけるかよっ！！！」

“ダチ”。

その言葉が心に突き刺さる。

今までそんなことを言ってくれる友人なんて紅葉たちやレア持ちの一部ぐらいしかいなかった。

ただ自分の憂さ晴らしの為に力を使い回す俺を、殆どのやつは怖がるか、憐れんでいたんだと思う。

そんな俺を認めてくれたライラ。そんな彼の優しさに甘えそうになる。

「……悪いライラ。今はもう単位のことなんてどうでもいいんだよ」

だが、これだけは譲れない。

「じゃあ　！！」

「俺はあいつの影に怯えたくない。弱いあの頃のままで居たくない。これは俺の意地だ。例えお前らでも邪魔はさせねー」

例え唯一無二の友を失おうとも、もうあの頃の無力な自分に戻りたくない。

守れたかもしれない誰かを守れないなんて絶対に嫌だ。

ここにいる紅葉以外は意味わからない発言だっただろう。だが、俺の本気に気圧されたのか、次の言葉を言い返せないライラたち。そんな彼に背を向け、ふらつく足取りで出口に向かう。

「……………すまん」

最後にそう吐き捨てるように呟き、逃げるように次の会場へと向かった。

第21高校、第一アリーナ。

大勢の歓声に包まれながら、俺はそのど真ん中に立っていた。

こんな中でも先程のライラとの会話が頭に流れ続けていた。

ライラは俺が今限界なんて言っていたが、こんな体調での学校の模擬戦なんて、何度となく赴いた戦地での命がけの戦いに比べたら全然マシだ。

だが、そう思う反面疑問に思うこともある。

この脳が破裂しそうな頭痛はなんだ？

これが血管の痛みだったらわかる。何度となく経験した“あれ”だ。

でもこれはなんだ？

再びの疑問に頭は答えを出してくれない。

これも頭痛のせいかな？

いや、普通の状態でも答えはでないだろう。

頭に張り付く問いを無視することに決め、俺は正面を見据える。

目の前では次の対戦相手の男子生徒が屈伸をしていた。

「僕は新原和彦にいほらかずひこ！今日はよろしくねっ！」

顔を上げ、人懐っこそうな童顔なこの少年、新原和彦が大きな声でそう言う。それが耳に入れた。少し寝たお陰か、さっきよりは大分マシになったみたいだ。

「ああ、俺は華瀬悠希だ。よろしく」

そんな彼にこちらからも名乗ると、それっきり会話も途切れ、周りの騒音とは逆に俺たちは静かに開始の合図を待った。

「これより二回戦の新原和彦vs華瀬悠希の試合を開始します」

女性教員のその宣言がアリーナ全体に響いた。それと同時にざわつきも収まる。

一試合目が嘘のように、まだ痛む頭でそんなことを確認することができた。

そんな中で和彦の呟き声が耳に入る。

「ジェネレート」

そう言い放つと同時に彼の右手に光が集まり弾ける。現れたのは杖だった。

「特化型？」

「そうだよ」

俺の疑問に肯定の返事で答える和彦。

それは綾芽さんと同じ特化型の補助武装だった。

「君は？」

まじまじと見てみると、和彦が首を傾げながら尋ねてきた。その後の言葉が省略されていたが武器をどうするのか、というものだろう。

少々迷ったが、今は少しでも魔力の消費を抑えたかったので首を横に振る。

渋い顔をされると思ったが、彼は別段気にした様子も無くただ「そう」とだけ応えて武器を構える。恐らく俺の第一試合の映像でも見たのだろう。この会場はカメラがいくつも設置されていて、校内ページでどの試合も見られるらしいからな。

「では始めてください」

そんな感慨に浸っているといきなり開始の合図を告げられ。一瞬反応が遅れた俺は嫌な気配を感じて真横に飛ぶ。すると俺のいた場所に突如火柱が上がった。

あれ？デジャブ？

前にも同じようなことが合ったような気がして首を傾げる。そんな間にも和彦は術式を展開させ、次々と様々な魔法を放ってくる。俺はそれをかわし、徐々に距離詰めていく。

残り三メートルを切った頃、俺はある異変に気が付いた。

（なんでさっきから同じような攻撃してんだ？）

和彦の放つ魔法は、全て遠距離系の単発攻撃。属性付きではあるが、当たらないのだから次の手を打ってもいいはずだ。

手札を変える暇がない？いや、でも何か隠して。

思考に脳を傾けながらも、徐々に接近する。あと二メートル。

「　　ッ！！」

二メートルを切った辺りから変化に気がついた。

和彦が笑ったのだ。

攻撃が止まる。

刹那の勘を頼りに後ろに飛ぶ。だが、

「もう遅いよ」

和彦が一瞬早く術式を発動させた。俺から半径五メートルの土が、紙を捲るように俺へと迫る。

【土属性魔法：土塊流丸】

上下左右逃げ場のない地面が押し寄せてくる。この魔法は対象がある程度近くにいないと発動ができない。さらに、魔力消費の激しい高等魔法だ。

これが決まれば勝ちが決まったような物だろう。本人もそう思っているに違いない。

まあ相手が俺で残念だったな。これなら外から中が見えない。

「トレース」

マジック・トレース
瞬間展開を使って、一瞬で刀形態の武器型補助武装を呼び出し、魔力を込め一閃。

【無属性魔法：風切】

無属性魔法とは、その名の通り属性の無い魔法の総称だ。魔力の塊を打ち出すと解釈してもあまりかわらないだろう。

魔力が斬線にしたがって飛んでいく。そして土の壁にぶつかつた瞬間、土の壁が真つ二つに切れた。切り開かれた土の壁を悠然と通り抜け、辺りを見回す。

こちらをみる視線の多くはそんな俺の態度、そして手に持つ刀に疑問や驚愕しているものが大半を占めている。その中でも和彦が一番呆然としているだろう。決まったと思つた魔法があつさり切られ、本人は飄々とでてきたのだから当然だ。

そんな彼の心情を察し、素直な感想をもらす。

「よくやるぜ。ずっとあの魔法と他の魔法の術式を並立展開させてたのか。どうりで低レベルな魔法しか打ってこないはずだ」

術式の並立展開、それは複数の術式を同時に展開させることを指す。恐らく三年でも極わずかな人しか使えない技法を彼は不完全とはいえやってのけたのだ。

前にこの学校のレベルが低いなんて思ってたが訂正しなければならぬ、などと思いつながら、和彦との距離を一瞬で詰め、いっせいのときのように刀を突きつけ、ニコリと微笑む。

「……降参します」

両手を上げる彼のその宣言で、この日の俺の試合は全て終わってしまった。

和彦との試合を終えて、俺はすぐに寮へ戻った。

模擬戦中は忘れられていた頭痛などが再び襲ってきたからだ。寮に戻る途中も何度か意識が飛びそうになったが、なんとか到着できた。

着替えるのも億劫でそのままベッドに倒れ込む。

だが、確認しなければならなかったため、ポケットに入れたケータイを取り出した。

大会ホームページに接続し、試合状況を確認する。

（紅葉、ライラ、綾芽さんも全勝。ニコルは……）

彼女の名前を探す。

（……………こっちも勝ち進んでるな）

ニコラ・ベールの名前を見つけ、内心で安堵すると共に当然か、とも思った。このままいけば明日の最後には俺と当たるのか。

案外早めにやりあえそうだと思いながら、激しい眠気に身を任せ、泥のような眠りについた。

episode 18 三回戦・召還術師・（前書き）

すみません

新原雅人 新原和彦に変更します（汗）

本当にすみません……

兄さんは優しくった。

弱きを助け、悪を裁く。俺にとってのヒーロー。

兄さんは強かった。

戦場では敵味方が恐れる程の鬼神の如き力があつた。

でもやっぱり優しくった。

殺されかけている仲間がいたら自分の危険を省みず突っ込んでいった。

そんな兄さんを尊敬していたし、憧れていた。

でもあいつがやってきた。

俺のせいで兄さんがあいつに殺された。

今の世界を変えられるだけの人材を俺ごときの存在のせいで殺させてしまった。

俺は自分とあの銀髪の男を決して許さない。

絶対に俺はあいつを殺す。

それ以外に兄さんと世界への償いが思い浮かばない。

けど俺は弱い。

あの男を思い出しただけで恐怖や怒りに自我を失ってしまう。

兄さん、俺は兄さんみたいにはなれないよ。

「ッ！ー！」

焼かれるような頭痛で俺は目を覚ました。

痛い。

頭を抱えうずくまるが、この痛みは消えそうにはない。

しばらくそうして、体が痛み慣れるのを待ち、時間を確認する。

今は朝8時44分。

2日目以降は自分の試合にだけ行けばいいのだが、あと約一時間後には俺の試合が始まる。

そんな丁度いいタイミングで頭痛で起きる。

こんな偶然ってあるのか？

もしかして身体が戦いを求めている？

頭をよぎる憶測を無視して身体を起こし、昨日着たままだった制服すら着替えず、覚束ない足取りで俺は次寮を出た。

「やあ」

寮を出ると、突然声をかけられた。振り向くと、声の主は人懐っこそうな笑みを浮かべている。

「……新原君、だっけ？」

大変失礼なことだが、彼の名前が一瞬浮かんでこなかった。俺の不自然な間に気が付いたのか、少し苦笑している。

「和彦でいいよ。昨日で試合終わったから君の試合を見に行こうと思ってね」

「俺も悠希でいい。それでわざわざ待ってたのか？」

彼がここにいるということはそういうことだろう。和彦のような術師をうちの学校では聞いたことがない。だが、俺の予想と反して彼は首を振った。

「それもあるけど、聞きたいことがあってね」
「なんだ？」

首を傾げる。

すると彼は笑みを消し、真剣な顔で尋ねてきた。

「……体調は大丈夫？」
「ッー!!」

まったく予想していなかった。バレたのか？たかが生徒に一体なぜ？驚愕していいると、和彦が再び言葉を続けた。

「僕の家は代々医師の家系なんだ。筋肉の使い方わかる、悠希は筋肉じゃなくて魔力で身体を動かしてるよね」

そんなことまでバレてたのか。

俺は今も身体のを全てを魔力で動かしている。もしこれを止めようものなら立ってられないだろう。

だが、そんなことで俺の体調がわかるやつが居るとは思わなかった。

「だから今日は僕が悠希をサポートしようと思ってね。本当なら止めさせたいところだけど、できない理由があるんでしょ？」

「それは……」

話せない。話すのであれば全てを明かさなくてはならない。思案顔になった俺を見て、和彦が再び首を振った。

「別に聞こうなんて思っていないよ。ただ、悠希のケアや、倒れたときに早めに処置できたほうがいいと思って。よければ僕を使って欲しい」

どう言うつもりなのだろう。昨日知り合っただけの俺にこんなに親切にしてくれるなんて。

思わず彼の目を覗き込む。少なくとも邪心は無さそうだ。

「……すまない。じゃあ宜しく頼む」

「任せて！」

笑顔で頷く和彦。彼の厚意に甘えることにして、俺たち二人は次の試合に向かった。

第3高校、第2アリーナ。

俺たちはその控え室に居た。和彦の真意は未だにわからないが、悪い奴ではなさそうなので別段気にする必要も無いだろう。

「じゃあ行ってくる」

「うん、がんばってね」

ベンチに腰掛けている彼にそう声をかけ、場内へ歩いていった。

フィールドは相変わらずの熱気に包まれている。俺が入った瞬間に歓声が沸いた。やはり第一試合や第二試合よりも数が多い。

上に進めば進む程負ける人も出てくるため、観客がその都度増えるのは納得できる。だが、それにしてこれは多すぎる。

大方、一回戦で補助武装無しで瞬殺、さらには学年10位の和彦（これはさっき聞いたことだが）に勝ったとあって俺の注目度も鰻登りに急上昇中なんだろうなあ。単に手加減してる余裕が無いだけなのだが。

げんなりしながら中央に移動する。対戦相手はもう来ているようだ。

「よ、よろしくお願いしますっ！！」

「あ、ああ。よろしく」

いきなり対戦相手の女子生徒に話しかけられてびっくりしたが、相手も緊張しているようで、こちらおどかさよりは自分の緊張を解すためと言った方がいいのかもしれない。

「これより、三回戦、たかみや すず華瀬悠希vs高宮鈴の試合を開始します」

開始前のサイレンが鳴る。

「ジェネレートっ！！」

そんな中、一際大きな声で目の前の女の子が言い放った。彼女の左手には和彦や綾芽さんと同じ杖。

昨日と同じ嫌な予感しかせず、とりあえず俺も武器を呼び出すことにした。

「ジェネレート」

両手に光が集まり弾ける。二丁拳銃の武器型補助武装だ。

俺が具現化させると、やはりと言うつかお約束と言うつか、周りからざわめきが起こった。

やっぱり目立つよな、などと呑気に思いながら開始の合図を待った。

「では始めっ！！」

「オープンっ！！」

開始が告げられた瞬間、彼女が真っ先に口を開いた。これはまずい。

彼女の周りに5つの魔法陣が浮かび上がり、その中から五体の何かが現れた。

二体はでかい蜂のような生物。他三体は白銀の狼。

「召還術師か……」

五体同時に多重召還できるのだからそこそこの召還術師なのだろう。でかい蜂はランクEの『ポイズンキラー』、狼はランクDの『アイスウルフ』。

魔獣にはランクという物がある。上から準にSS、S、A、B、C、D、E、Fまであり、強さや危険度によって格付けされている。ちなみに魔獣指定区域も危険度から同様にSS〜Dランクまで枠組みされる。

まあランクEとDならば妥当な所だろう。

迫り来る魔獣たちから避け、雅人の時と同じように俺は徐々に近づいていく。

魔獣たちはそれをさせまいと俺に食らいつこうとしてくる。だが、俺は引き金に手をかけた。

「大人しくしてろ」

【雷属性添加：銃：纏・封縛】

雷属性の魔法を纏わせた弾丸を五発撃ち出す。轟く銃声の中で銃弾が五体の魔獣に触れると、突然魔獣たちが痙攣しだした。

“封縛”は体に電気を流して動きを封じる魔法。泣き出すことも適わず、五体の魔獣は地面に平伏した。

「どうする？」

銃口を術者に向け、問う。彼女は迷うことなく手を上げて降参してくれた。

「勝者！！華瀬悠希！！」

その瞬間歓声という名の銃弾が飛び交い、俺の頭を揺さぶる。いや、もとからあった痛みが集中が切れたせいで戻ってきたのだ。

再び足元が覚束なくなる。悲鳴を上げる身体に鞭打って控え室に戻る。

っ
て
い
っ
た。

「悠希っ！」

控え室に戻ってくると、和彦がすぐさま駆け寄ってきて、よろける俺の身体を支えてくれた。

「お前、将来いい嫁さんになるよ」

「ぼ、僕は男だよっ！！」

中学生に間違えられそうな童顔を真っ赤に染め、頬を膨らませて抗議してくる和彦。それを無視してケータイを取り出す。

「次はいつ？」

すると、先程の抗議を止め、和彦もケータイを覗き込んできた。いつ、とは次の試合の時間だろう。

「二時間後、みたいだな」

まだ俺の対戦相手の試合は行われていないらしい。そのどちらかが勝てば俺と当たるようだ。

「どうする？見に行く？」

尋ねる和彦に、しかし俺は首を横に振った。

「いや、見ても仕方ないだろ。どっかで休む」

「大した自信だね。次は多分学年5位だよ？」

……………5位？

「それって学年6位の波風紅葉より強いのか？」

「彼女を知っているのかい？あー、そう言えば彼女と模擬戦をして勝ったという噂があったね。うーん……」

首を傾げて考えているのだろう。やがて顔を上げ口を開いた。

「どうかな。リオ……あ、学年5位のエリオ・コンティのことなんだけど、彼はパワータイプだからね。技術では波風さんの方が上だと思う」

「じゃあなんで紅葉が6位でそのエリオってのが5位なんだ？」

俺の問いに「知らないの？」と、逆に首を傾げる和彦。

「トーナメントの決勝戦が終わったら上位20人でバトルロイヤル形式で3日間サバイバルが行われるんだよ。それで先に負けていった人たちの順位が決まるってこと」

「つまり紅葉が先に誰かに負けたってことか」

「そういうこと」

なるほど、だからトーナメント期間がこんなにも長いのか。俺が一人で納得していると、補足とばかりに和彦は続けた。

「去年は学年1位の人が片っ端から片付けていって1日かからずに終わったんだよね。そのお陰で僕が10位に入れたんだけど……」

そんなやんちゃな奴なのか。学年1位って。

苦笑いしながら言う和彦の頭にぽんと手を置き、俺は首を振った。

「いんや、お前の腕はなかなかのもんだったぞ。本当ならもう少し上の順位だったはずだ」

俺がそういうと、彼は照れたように頬を染め出した。そんなやりとりをしながら俺たちは控え室を後にした。

「和彦ー、水くれー」

「はいはい」

結局保健室のベッドで休むことに決め、甲斐甲斐しく世話をしてくれる和彦を眺めていた。

「お前、本当に男辞めて女になった方がいいと思う。世界の為に」
「そんなことないよっ!!」

俺の弄りにも一々反応してくれたり、色々大変だなこいつも。自分がしていることを棚に上げてそんな感慨に浸っていると、和彦が水を持ってきてくれた。

「はい。タオルもそろそろ取り替えた方がいいね」

俺の額に置かれたタオルを取り、ひんやり濡れた別のタオルに変えてくれた。

本当になんでこいつが男なのだろう。まるで母親のようだ。

「お母さーん、アイス食べたーい」

「お腹こわ……お母さんじゃないよっ！！男だよっ！！」

しまった、つい言葉に出てしまった。

プリプリ怒りながらも働き回る和彦から目を離し、ケータイを開いて対戦相手の試合を見ようと思ったが、手で制された。

「どうせ見るならあのテレビで見ようよ」

和彦が指差したのは、保健室の壁に埋め込まれている大画面テレビだった。

「見れんの？」

「校内放送で今あつてる試合なら全部見られるよ」

ほう、それは凄い。

素直に感心していると、和彦が置かれていたリモコンのボタンを手早く押す。電源を入れチャンネルをいじりだすと、お目当ての試合が映った。どうやらこれから始まるらしい。

「あのハルバート使いがそうか？」

「うん」

頷き肯定。画面の中ではハルバートの武器型の補助武装を持った長身の男と、杖状の特化型を携えた気弱そうな女の子が対峙していた。

なんだか。

「温厚そうな奴だな」

「ははは、実際リオは優しいからね」

もっとう、ゴツいのを想像していた俺は決して悪くは無いと思う。
パワー型って言うてたし。

俺の言葉に苦笑しながら和彦は画面を見つめていた。

始まる。

それから俺たちは無言で試合の行く末を見守った。

「ふーん、土属性主体のゴリ押し、か」

試合が終わり、俺はそんな感想をつぶやいた。結果は圧勝、もちろん学年5位の。

「あの女の子もまあまあ強かったけど、相手が悪かったね。ご愁傷様」

おい和彦、テレビの向こうに向かって「ご愁傷様」なんて止めなさ

い。可愛いそうだろう。

合掌までしてそんなことを言い出す彼に心の中でツツコんで、先程の試合を思い返していた。

試合は終始女の子が魔法を撃つ、5位が弾くまたは土属性の魔法で相殺、距離を詰めて攻撃、女の子が避ける、の繰り返しだった。特化型の弱点である近接戦に持ち込む確実な戦法だ。なのだが、

「……えげつねー」

それが素直な感想だった。なすすべなく倒されていく女の子の姿があまりにも可哀想に見える程に。俺の呟きに苦笑いする和彦も同意見なのだろう。

「まあ、確實って言えば確実なんだけどな。あれは事前に相手のことを調べてキチンと対策練った戦い方だったし」

「誰だって相手を調べたりするよ。悠希みたいなのが少数派だけ」

あれ？そうなの？

首を傾げる俺に、呆れたような視線を投げかけてくる。

和彦は最後にはあく、長いため息について俺に向き直った。

「で、今回は相手の情報を手に入れたよ。どんな戦い方にするの？」

「どんなって言われてもな……」

相手も俺のことは調べてるだろうしなあ。今まで使った武器は銃と刀。手持ちはまだまだあるとはいえ、あまり手の内を見せたくはない。

それに伝説武器は論外。国家機密で情報漏洩されていないのが一つあるとはいえ、そんなものが普通の学生相手に使えるわけもない。

「もういつそ両方使うか」

「？何が？」

だんだん考えるのが面倒になってきた俺は投げやりに結論を出したのだが、つい声に出してしまっていたらしい。首を傾げる和彦に「気にすんな」と言っただけでベッドから降りる。まだふらつくが寝ていたお陰か、和彦の介護のお陰かだいぶマシになっていた。そんな彼にふと振り向いて笑顔を向ける。

「将来はナースになれるぜ」

「男だよっ！！」

親指を立てて最高にいい顔をしている俺に顔を真っ赤に染める和彦。そんな俺たちは次の試合へと向かった。

e p i s o d e 19 作戦会……議？（後書き）

感想お待ちします！！

「体調は？」

心配気に見つめてくる和彦に「問題ない」とだけ答えておく。

第18高校、第2アリーナ控え室。

そこで俺たちは次の試合を待っていた。あと10分後にはここで俺は学年5位のエリオ・コンティと戦うことになる。戦うと言ってもたかが学校の模擬戦なのだが。

和彦の最後の体調チェックを受け、軽く伸びをする。

まだ体調は悪い、それも最悪だ。だが魔力で身体全てを動かせば問題ない。普段より魔法には制限がかかるが、どでかいの一発撃ってアリーナを吹っ飛ばすわけでも無いのでこちらも問題ないはずだ。

「じゃあ行ってくる」

そう一声掛けて、競技場に向かっていった。

場内では既に対戦相手が待っていた。テレビで見た以上に優しそうな顔をしている。

「君が華瀬君だね。今日はよろしく」

突然話しかけられたらことに多少びっくりしたが、差し出された手にいつまでも反応しないわけにもいかず、手を伸ばして俺たちは互いに握手を交わした。

「ところで、和彦に勝ったんだって？じゃああの噂は本当だったんだね」

手を離すと、いきなりそんなことを言ってきた。こんなやつにまで広まってるのかよ、などと自分でやったことを棚に上げてげんりする俺。

そういえば、

「和彦とは知り合いなのか？妙に仲良さそうだけど」

なんか和彦も“リオ”って呼んでた気がするし。
俺の疑問を肯定するようにエリオは頷いた。

「同じ第3高校のクラスメートだよ。中学の頃何度かトーナメントで一緒になったからね」

なるほど、クラスメートなわけか。どうりで。
一人で勝手に納得していると、試合開始前のサイレンが鳴った。

「これより四回戦、華瀬悠希vsエリオ・コンティの試合を開始します」

その宣言で俺の五感が徐々に冴えていく。それと同時に身体の痛みも引いていくようだ。

「「ジエネレート」」

俺とエリオは同時に呟く。光が集まり、俺の両手には二丁の銃が、エリオの手にはハルバートが現れた。

「あ、そうだ」

言い忘れていたことがあった。

「どうかした？」

首を傾げるエリオ。試合前に呑気にこんな反応が出来るのは、彼の自分が負けるわけが無いという自信のためだろう。そんな彼に一つ言っておかなくてはならないことがあったんだった。

「負けても恨みつこ無しな」

「ははは、お互いね」

笑い合う俺たち。きっと周りから見るとアホにしか見えなんだろうなあ。

「始めてください」

バカなことをやっている、開始の合図がアリーナに響いた。俺たちは同時に駆ける。

そういえば入学試験のときにもハルバート使いのヘイル先生とやりあったな、などと思いながら銃口を向け、両手の引き金を引いた。

二回の銃声。

牽制目的で放った銃弾は狙い通り、エリオの脚を一瞬止めた。

それで充分。

「トレース」

マシククトレース

瞬間展開。一瞬で武器を呼び出す俺だけの技能。他の人間には何も無い空間に突然現れたように見えるその技を使って呼び出したのは日本のスぺアマガジン。

素早くリロードを行い、そして再び引き金を引いた。

飛び出す銃弾。さっきと同じようパターンだ。だが、

「術式展開」

俺が呟くのと変化が起きるのはほぼ同時だった。

銃弾がはじけたのだ。

突如エリオの周りに冷気が漂い始める。変化を感じ取ったエリオは、さすがの反応速度で後退しようとする。だが、

「発動」

再び呟く。

エリオの周りの水分が凝結。瞬く間に巨大な鳥籠ができあがった。

「な、なんだよ、これ……」

呆然と立ち竦んで消え入りそうな声でそんなことを呟く。まあ驚くわな。

これは俺が適当に考えて作ってみた簡易魔法術式具“術式弾”だ。銃弾一発に術式一つ分を詰め込み、魔力を込めて打ち出すと発動できる優れもの。

元々は「一発一発違う魔法使えたら面白いなあ」などという子供心から作り出した物だが、なんとまあ何だかんだで出来ちゃったのだ。特許取ったら儲かりそうだが、生憎そっちには全く興味無いので今のところ広めるつもりはない。

そんな隠し玉ならぬ隠し弾を持っていたことなんて知るはずないエリオは、もう脱出しようともせずポカンとしている。

「おーい」

手を振っても反応が無い。これって俺の勝ちでいいの？

審判に尋ねようにもその審判さえもポカンとしているのでどうしようもない。

………イラッ

だんだんイライラしてきた俺は、通常弾に入れ替えて球切れおこすまでガンガン撃ちまくった。もちろん魔力コーティングして威力を落としている。

「いたたたたっ!!!」

今やパチンコ玉並みの威力に変わった銃弾がエリオの身体のうちこちに当たり、彼は涙目でうずくまりだした。

「目え覚めたか？」

「……痛い」

こいつは意外と泣き虫なのだろうか？涙目で訴えてくる姿が妙に様になっている。なんだか自分が弱いもの虐めしている気分になってきた。

「やらないなら降参してくんない？なんか俺が惨めになってくる」

「え？あ、ああ、すまない」

再びエリオがハルバートを構え、氷でできた鳥籠の檻に一振り。

ガキーン。

金属同士が衝突したときのような甲高い音を上げたと同時にエリオは数歩後ろによろけた。

「か、かったいなー……」

「そう作ったからな。もう終わらせるぞ？」

問いではなく確定として呟き再び術式弾のマガジンと交換し、エリオに向けて引き金を引く。

「発動」

銃弾がはじけ、術式が発動。

【雷属性魔法：蛇竜】

名前の通り雷でできた蛇竜が現れ、標的に向かって這うように進む。そして鳥籠の中に入った瞬間、獲物に飛びかかる。

さすがにまだ動けないなんてことはないエリオだったが、必死にかわそうとするも、完全に避けきることはできず尾に触れた。

「がつ！？！？」

その瞬間、流れ込んできた電流に短い呻き声のようなものをあげてついに倒れ込んだ。

「勝者、華瀬悠希」

勝敗が決した。これで次はニコルとだな。

ピクピク、と痙攣しているエリオを尻目に俺はその場を後にしたのだった。

episode 20 四回戦 - 術式弾 - (後書き)

すみません。

明日から更新に少し日を空けるかもしれません……。

「和彦、次の試合は？」

場所は保健室。

すっかりお世話になってしまっているベッドに横になりながら次の試合の時間を聞いているところだ。

「ちよつと待ってて」と、ケータイを取り出してトーナメントのホームページにアクセスした和彦。やがて、終わったのか顔を上げて口を開いた。

「次は三時間後みたいだね。対戦相手はニコラ・ベレーさん。今までの試合を見るかい？」

尋ねてくる和彦、しかし俺は首を横に振った。

「いや、あいつが記録に残るような模擬戦で手の内明かすような真似するはずない」

それに本気でやるはずもない。そんなことしたら結界の中だろうと対戦相手の首が飛んでる。

言い切る俺に、和彦は多少目を見開いて驚きを表した。

「へえ、よくそんなことわかるね。知り合いなのかい？」

「ああ」

一言だけ肯定で返すが、和彦もそれ以上のことは何も聞かずについて

くれた。こういう相手への心配りができるやつってすげーな。尊敬できる。

そんな感慨に浸っていると、コンコンとノックの音が部屋に響いた。

「どう
」

ぞ、と続ける前にガラガラと、扉が開かれる。前にも言った気がするが、こんな失礼な入室の仕方をするやつを俺は一人しか知らない。

「悠希っ！」

「帰れ一葉」

いきなり飛びついてきた一葉をベッドから飛び降りてかわし、威嚇しながら睨みつける。傍から見たらさぞかし奇妙な光景だろう。

「り、理事長！？」

すっかり忘れていた和彦が素っ頓狂な声をあげた。何がどういふことなのかわからないと言った感じで、目を白黒させている。

「あ、新原君だっけ？悠希がお世話になってます」

「あ、え？は、はい、こちらこそ……」

いきなり一葉の矛先が自分に向けられて気が動転しているにも関わらず、彼女のお辞儀を反射的に返してしまうのは、彼の育ちの良さの現れだろう。確か医者の家系とか言ってたからな。

思わぬ発見をした俺だったが、さすがにこのままだと和彦が気を失いそうな程混乱しているので、いい加減説明してやることにした。

「和彦、少し落ち着け。こいつはただの知り合いだ。空気と思っ
ればいい」

「あー、それひどーい」

いきなり一葉が拗ねだしたが取りあえず無視。

和彦はというと、苦笑いしながらもどうにかいつも通りの俺の態度
に落ち着いてくれたみたいだ。

それを待つて、俺は一葉へと向き直った。

「で、何の用だ？」

「あ、そーだった」

わざとらしく手を叩いて、そんなことをほざきやがった。呆れてた
め息を吐く俺の心情などつゆ知らず、くるりと回って和彦のほうに
向いて、申し訳なさそうに手を合わせて言った。

「悪いんだけど、悠希と話があるからちょっと席を外してくれない
かしら？」

なんだがすごく嫌な予感がするんだが気のせいだろうか？気のせ
いであって欲しい。

そう言われた和彦は一瞬どうしようか、と俺に目で聞いてきたが、
とりあえず俺が頷くと素直に席を外してくれた。

ピシャリとドアが閉まったことを確認した一葉は、再び俺に向き直
った。

「さて、聞かせて貰いましょうか。なんで術式弾まで使ったの？」

そのことか。

「別に。“トライデント”と“ジャッジメント”は使えないんだ。なら手持ちで使えるのを増やしたほうがいいってだけ。術式弾は公にしてないどころか、知ってるのはお前らと一部のレア持ちだけだし、正体がバレることもないからな」

実際そういう目的があって使ったわけだし、嘘はついてないよな？ 自問自答を繰り返している俺を見て、「そう」とだけ答える一葉。なんか今日はやけに聞き分けがいいな。訝しく思っていると、次の言葉を投げかけられた。それは奇しくも今朝の和彦と同じ問いで。

「で、体調は大丈夫なの？」

……………。

「……いつ気付いた？」

「二回戦のとき。いつもより脚裁きが固かったしね」

「良くわかるな。画面越しなのに」

俺の素直な賞賛に、えへんと豊満な胸を突き出して威張る一葉。褒めるすぐこれだ。

「風邪？ 魔力を循環させて回復力上げてる？」

「ああ。けど、どうにも効き目が無いらしい」

だが、俺のその言葉の次の瞬間には真剣な面もちで恐る恐る聞いてきた。

「……もしかして“転生継承の儀式”？ これ以上はさすがに悠希で

も……」

「いや、違うと思う。第一“痛覚系”ならまだしも俺は“血液系”だ。もしそうなら頭痛じゃなくて血管にダメージがくるはずだ」

他の人間が聞いても全くわからないだろう単語の嵐。

その言葉で安心したのか、一葉は表情を緩めて安堵のため息を吐いた。

その話はこれまでということ、話題は俺の次の試合のことになった。

「次は“トート”が相手なんですよ？ そんなんで大丈夫なの？」

「……ほんと良く知ってんな、お前。探偵にでもなってるよ」

こいつにニコルの話をした覚えは無いのだが……。

もう諦めた。はなからこいつに探り合いで勝てるはずがないんだ。今までの俺の人生がそう物語っている。

最後に一回盛大にため息を吐いて、言葉を紡ぎ出す。

「ああ、術式弾が使えるメリットがあるつつつても向こうはレア持ちだ。俺みたいにリロードせずにすぐ撃てる。下手すりゃ“ファラックス”使っ羽目になるかもな」

「あれって情報漏洩されてないんだっけ？ 国際バンクのデータにも載ってないの？」

一葉の問いに頷く。別に一葉には隠すようなこともない。

「あれもお前らと一部のレア持ち、それと日本の上層部しか知らないはずだ。そもそもあれはバレるような代物じゃない」

「あー、確かに」

一葉が想像したのか、少し苦笑を浮かべていた。

聞きたいことは全部聞いたのか、いきなり回れ右をして扉に向かいだした。だが、扉の前に立つとふと足を止めた。振り向かないまま口を開く。

「無茶はしないでね？」

「昔みたいな真似はしねーよ。だいたい学校のイベントで無茶なんてしないから心配すんな」

そう応えると、そのままドアを開けて出て行ってしまった。顔を向けていなかったなので表情まではわからなかったが、雰囲気は笑っていた気がする。

少し元気が出た俺は、やっぱり払いされた和彦を呼び戻すためにケイタイのコールボタンを押した。

e p i s o d e 2 1 探偵のような理事長（後書き）

感想お待ちします!!

episode 22 決意、出陣

「で、なんで悠希なんかが理事長の知り合いなの？」

「それってちよつとひどくないか？」

保健室に帰ってきた和彦の一言はそれだった。ちよつとムツときたが、まあ当然の疑問だろうと無理矢理納得することにする。

ただ、どう話せばいいか分からず、少しの間考え込んでしまった。

「えつとな」

俺が口を開いた瞬間、幸か不幸か扉が勢いよく開かれた。

「ゆうー!!」

「はっ!?!紅葉!?!」

いきなり扉が開いたことに驚いてそつちを見ると、いきなり紅葉が息を切らしながら走ってきた。そのあとからも桜、ライラ、綾芽さん、紅葉もあわせて4人が駆け込んでくる。

突然のことでニコルが居ないことなど気にかけることもできず、訳が分からなくなっていた俺に突如涙目の桜が抱きついてきた。

「一葉お姉ちゃんからお兄ちゃんが保健室にいるって聞いて……心配したよう……」

掠れ声をあげながら顔を俺に埋める桜。周りを見ても心底心配した、といった面持ちの三人と、俺と同じく気が動転している和彦がいるだけだった。

まあ、一葉が教えるだろうことは何となく予想できていたことだが、余りにも早すぎるだろ。

一番考えられるのは誰かが試合中で、それが終わって来たところなんだろう。

そんな憶測が脳内で飛び交っていると、黙っていたライラが口を開いた。

「ったく、とうとう倒れたのかって三人とも心配してたんだぞ。もつとすまなさそうな顔しろ、バカヤロウ」

「ライラさんもここに来るまでハラハラしてたくせに」

「なっ、何言つてんだよ綾芽ちゃん！！別にそんなんじゃない」

「別にライラさんだけじゃないんですから気にしないでいいのに」
「なっ ！！」

真っ赤になりながら抗議するライラにも動じずニコニコ微笑む綾芽さん。

そんな彼女を見て俺は 。

「すまん」

桜を離し、深々と頭を下げる。威勢を張った割に試合が終わるたびに保健室で和彦に介護されるこの始末。目も当てられない。

ゴスッ

「いつてッ！！！」

そんなときにいきなり頭上から鉄拳が降ってきた。ズキズキ痛む頭を抑えながら顔を上げる。そこには拳を握り締めながら怒りの表情

をした紅葉の顔があった。

「謝るなら最初から心配かけないでよッ！！私たちの気も知らないで！！」

叫ぶ紅葉。

返す言葉も見つからない。自分の意地の為だけにこんなにも心配してくれる友人たちが嬉しくもあり、同時に本当に申し訳ない。

「……………すまん」

「……………バカ」

再び頭を下げる俺をポカポカ殴る紅葉。

しばらくそうしていると、やけに言いにくそうな声が聞こえてきた。

「あのお……………僕出てようか？」

居場所の無い和彦の情けない一言。だが、周りの反応は呆れなどではなかった。

「あれ？新原君？どうしてここにいるの？」

そんな彼が居たことに心底驚いたような表情をする紅葉。今まで気づいてなかったのか…………。

半泣きの和彦を見て、なんだかすごくいたたまれない気分になってしまった。仕方ないので説明してあげよう。

「昨日の対戦で俺の体調に気付いたらしい。それで和彦の親が医者らしくて、面倒見てくれることになったんだよ。そうだよな？」
「うん、うん」

コクコクと何度も頷く和彦に苦笑していると意外や意外、ライラが和彦に向かい合った。

「確か学年10位の新原和彦くんだったか？こいつが迷惑かけたみたいで悪いな」

「お前は俺の保護者か！！」

なんだか先程の一葉のようにぺこりと頭を下げるライラと、同じく頭を下げる和彦に激しくツツコム俺。

そんなのお構いなしに世間話を始めた5人に、俺は苦笑しながらも混ざっていった。

第11高校、第2アリーナ。

何の因果か俺とニコルの決戦の場は俺らのホームグラウンドとなった。

その控え室。俺たち六人はそこで試合時間まで待つことになった。控え室には試合中継の大画面テレビが設置されており、ここで試合を見ることができる。何かあったときのために、と聞かない5人はここで応援してるとのことに決めたらしい。もう半ば諦めている俺は、集中するために昔ながらの黙想を始めていた。

「そついやお前知ってるか？」

そんなときに主語の無い問いをライラが投げかけてきた。思わず「何を？」と尋ね返し、目を開く。だが、答えたのは綾芽さんだった。

「ニコラさん、全試合その場から指すら動かさずに対戦相手を気絶させてるんです。上級生の間でもその話が持ちきりなんですよ」

「ふーん……」

あいつ意外と派手なことやってんだな。

考えられるのは幻覚系の魔法で攻撃を隠しているか、あるいは自分の居場所を錯覚させているか。まあなんにしても、

（レア使ってたか……）

ここで言うレアとは伝説武器の呼称のことだ。

武装展開時の光を感じていないということは最初っから展開してんだろうしな。それも隠蔽^{ハイド}かなんかの幻術で隠してるだろう。あんなの普通に持ち歩いてたら恐ろしすぎる。

そんなことを考えていると、開始10分前のアナウンスがなった。背中に走る寒気を振り払うように俺は立ち上がる。

しかし、場内に入ろうとしたところで袖を掴まれた。振り向くと紅葉が俯きながら袖を握っている。

「……どうした？」

なるべく優しい声でそう囁きかけると、彼女はゆっくり口を開いた。

「無茶はしないでね？」

「はははっ、一葉にも同じこと言われた」

それはさっき一葉が保健室から出て行くときの去り際のセリフと同じものだった。微笑みながらそう告げると紅葉は顔を真っ赤にしなからブツブツ言い出した。

そんな彼女の頭にポンと手を乗せ、他の4人にも目を向けて優しく微笑んだ。

「安心しろ。別に死にやしないって」

そんなバカみたいな宣言に、全員「なんだそりゃ」と言った感じでそれぞれ笑みを浮かべた。

「じゃ、行ってくる」

「気をつけてよ」

「勝ってこいっ!」

「がんばってね!」

「怪我しないでくださいね?」

「何かあってもすぐ駆けつけるよ」

俺がそう言つと紅葉、ライラ、桜、綾芽さん、和彦の順で応援?の言葉をかけてくれた。そんな彼らに背を向け、俺は場内に向かう。

だが、一つ嘘をついた。

本気でやりあったら死ぬ、ということだ。しかも俺の体調は最悪。さらにレアは使えない。悪条件に悪条件が積み重なり、俺はこの歩みが死へと繋がっているような気がして背筋を震えた。けどまあ、

「後戻りなんてできるわけないよな」

それに簡単になんて死んでやるもんか。
そう自分へ言い聞かせ、徐々に聞こえてくる歓声へと向かって足を
早めた。

歓声と言う名の騒音を浴びながら俺は対戦相手、ニコラ・ベールと向かい合っていた。なんと彼女は前の試合が終わってすぐに上がってきていたらしい。

多少罪悪感を感じはしたが、今更どうこうなることでもないし、向こうは何も感じはしないだろう。ていうか何考えてんのかわからんからそう思うしかない。

俺が来たとき少し顔を動かして以来微動だにしないニコルを見て、なんだか無性に帰りたくなった。

そんな俺の内心とは裏腹に観客の声援は時間が過ぎることに激しさを増す。恐らく謎の転校生二人の対決、みたいな感じで興味を持ってきた人がかなりいるだろう。東京ドーム並みの広さのアリーナの観客席はほぼ満席状態だ。

これは紅葉たちが控え室に留まったことが正解だったな。

そんなことを思っていると、開始前のサイレンが鳴った。

「これより第5試合、ニコラ・ベールvs華瀬悠希の試合を開始します」

アナウンスが響く。それと同時に俺は短い単語を呟いた。

「ジエネレート」

もう見せてしまったので出し惜しみする必要も無い。二丁の銃形態の補助武装を呼び出し、術式弾の詰まったスペアマガジンと交換す

る。

「…………おし!!」

最後にガシャツ、と音をたてて入れ替え完了。気合いを入れるために頬を叩き、試合に集中する。

「悠希さん」

しばらくそうしていると、ニコルが呼びかけてきた。その抑揚の無い声が発せられたことに驚き、首を傾げながら彼女を見た。

「本気できてください」

ニコルがそう呟き終えるのと同時に試合開始の合図が響いた。

「始めてください」

それと同時に俺は地面を蹴ってニコルへ接近する。だが、

「ッ!」

突如背中に寒気を感じ、勘に従って右に飛ぶ。ブオンツ、という何かを振った音が寸前まで俺が居た場所から発せられた。

ニコルを見る。だが相変わらず動いた気配がない。

（幻術……ってわけでもなさそうだな）

俺の第六感があれば本物ニコルだ、と告げている。その通りだとするならば、あいつが動かずに武器を振り回す方法は一つしかない。

「……こりゃ、ガチでやらんと死ぬな」

苦笑しながら俺は右手の銃口をニコルに向け、それと同時に走る。地面を踏みしめる感触と同時に“何か”が空気を切り裂く音が聞こえる。それを右へ左へ飛んでかわし、両手の引き金を引いた。

ズガガンッ

二発同時に銃弾が飛ぶ。全て先程入れ替えた術式弾だ。

それが同時に弾ける。

右側の術式は巨大な水球を生成するものだ。それをニコルへと放つ。だが、見えない“何か”によって水球は真っ二つに切り裂かれ、ニコル本人に届いたものは無かった。

だがこれでいい。

二つ目の術式を発動する。

瞬間、周りに飛び散った水はニコルの周りに幾つもの水球を作り出す。

先程より幾分小さいが、それを補う数がある。水球の数は約30個。それら全てがニコルへと殺到する。たが。

「まあそつなるよな……」

水球の下から影が伸びる。その影が水球を包み込み、影へと引きずり込んだのだ。正直気色悪い。

そつなるとわかっていたとは言え、さすがに目の前でグロテスクな

光景が広がっては俺の気分も萎えるものだ。

だがいつまでもぼーっとしているわけにはいかない。そう思って再び走り出すと、突如俺の足下の影が蠢きだした。

「あー、もう！！気持ち悪い！！」

女性が使っているまじき魔法に、俺は思わず叫んだ。地面を蹴り空中に飛ぶ。

だが、それと同時に影から手が伸び、俺を引きずり込もうと迫ってくる。

うげ、キモイ。

どんどん距離が縮まってくる俺と影の手。もう魔獣なんかより断然気持ち悪い。

どっかのホラー映画でありそうなシチュエーションに思わず苦笑しながら、今度は普通の銃弾が詰まったスピアマガジン呼び出し、今入れてあるマガジンと交換した。

影との距離、およそ一メートル。こんなことなら刀かなんか呼び出した方がよかったかなー、などと考えながら空中で回転。魔力を込め、引き金を引いた。

【氷属性添加：銃：纏・氷結】

着弾と同時に影が氷る。だが、水球を飲み込んだ影までもが俺に殺到しだした。

形勢逆転とはまさにこのこと。いや、最初から俺の方が不利だったのかもしれない。

迫り来る影全てに銃弾を当て続ける。弾数はギリギリってところか。

数秒後、着地と同時に全ての影を氷付けにした俺は次の攻撃に警戒しながらニコルへと向き直った。

「あぶねーよ、殺す気か」

「あなたはこれぐらいでは死にません」

偉く高い評価を受けてんのな、俺って。

再びの風切り音を聞き、反射的に身を屈める。もう銃じゃまずいかな。

「トレースッ！」

瞬間展開、銃の代わりに刀を。今日何度目かの風切り音を展開した刀で防ぎ、弾く。

そのままニコルへと突っ込み、殺到する影を全て切り裂いていく。

久し振りの高揚感。

影の手をやたらめったら斬りまくっていると、そんなものを自覚した。

楽しい。

俺ってこんなに戦闘狂だっけ？などの疑問も今はどうでもよく感じた。まるでおもちゃを得た子供だな。

きっと俺の顔は狂喜に歪んでいることだろう。

斬る、走る、また斬る。

そうこうしてる内にニコルが間合いに入った。確認するより早く俺の腕は動く。

「うらあああ!!!」

雄叫びをあげながら刀を振り下ろす。もう結界の補助が聞かないほどの威力と速さを備えた一撃。

カキーンッ。

突如金属同士がぶつかり合った時特有の澄んだ音がアリーナに響いた。

俺の刀を黒光りする真つ黒な物が受け止めていたのだ。

それを確認した俺は一旦距離を取り観察する。

ニコルの手に握られたそれは、本人と同じくらいの大きさの巨大な鎌だ。装飾の施されたそれは、禍々しくも心を奪われそうな程美しい。観客も思わず息を飲んでいる。

「ようやく“デスサイズ”のお出ましか。いい加減疲れた」

漆黒の鎌、それはニコルの所持する伝説武器、“死神の鎌”デスサイズ。この

“デスサイズ”のみの無系統魔法、それがさつきから見えない攻撃の正体だ。

「無系統魔法“霧の中の首狩り（ミストリッパー）”。鎌自体を魔力で操って、おまけに見えないんだから他の生徒が不思議がるのも無理無い」

伝説武器の名前と所持者の名前は調べれば割と簡単に分かる。だが、無系統魔法については完璧に情報が漏れないようにされている。理由は単純に不利になるから。当然のことながら情報を持っているのと持っていないのではえらい違いだ。得意属性、使用武器、攻撃パターン、などなど持っていれば持っているほど有利になる。それはレア持ちの場合も同じだ。伝説武器の能力まで開示されては他国へ侵略に出る国まで現れるかもしれない。特に今はロシアが控えているのだから尚更だ。

これらの理由によつて無系統魔法、特に伝説武器の能力を知るものはほとんどいない。よつてニコルの能力を知っている者はこの中では俺だけだろう。

そんなことを考えていると、突如今まで動かなかったニコルが走り出した。

いや。

俺は前方のニコルではなく、何も無い背後に向かって切りかかる。

刀は振り切るより早く止まった。再び金属同士の衝突音が響き、それと同時にニコルが突然現れた。

幻術で自分を作り出し、さらに自分の姿を隠して攻撃。セオリー通りではあるが、ニコル程の高レベルの術師が使うとまるで本物の死神に狙われているようだ。

刀と鎌が交錯する。

何度も何度も切りかかるが、その度に弾かれ、いなされる。

身体はすでに思考で動いていなかった。体調のことなど頭には入らなかった。

ただ自分についてこられるだけの術師に狂った獣のごとく切りかかる。もう止まらない。

楽しい。

その単語が頭を占めていた。これだけの戦いはいつぶりだろう。もう結界の許容量を超えたこれは本物の殺し合いだ。

まだいける。まだ動く。

斬撃の数が増す。斬線の煌めきが俺の視界を覆っていく。それにっられるようにニコルも鎌を振るう。

もつと速く、速く、速くッ！！

「ッ！！」

だが、変化は起きた。鈍い感触が俺の手に伝わってくる。刀が折れた。

おそらく激しい打ち合いのダメージが補助武装の耐久値を上回ったのだろう。

根元から折れた刀身が宙を舞う。だが、それには目もくれず、俺は迫り来る鎌を見つめていた。

もう、どうなっても知らねー。

「トレース」

俺は新たな武器を呼び出す。一際輝く光が俺を覆った。

episode 24 眠り（前書き）

すみません。

少し忙しかったものでいつもより更新が遅れました。

また目をあけることもあるかもしれませんが、今後ともよろしくおねがいします。

episode 24 眠り

一際輝く光が俺を包む。この感じも久し振りだ。手に集まる光に感動を覚えながら見つめ、ふと目をニコルに向けると、彼女が振るう鎌がゆっくり見える。

……“フアランクス”。

心の中で呟くのと、手に重さが伝わるのはほぼ同時だった。それを強く握り締める。握った何かを振るい迫り来るニコルの鎌を弾く。いつも無表情なニコルの顔が今回は驚きに見開かれた。だが、流石に反応が速い。すぐに距離を開け、こちらの様子を窺ってきた。

「……………今のはなんですか？」

試合が始まって初めて開いたニコルの口からは抑揚の無い声が響いてくる。さすがにいつまでも動揺しているわけないか。

驚くのも無理はない。俺の手には何もないのだから。いや、確かに手にちゃんと握ってある、けど本当に何も握っていない。

ここにあつてここに無い剣、それが“幻剣フアランクス”。俺の伝説武器の一つ。

誤解の無いように言うが、見えないのが能力ではない、剣自体に実体がないのだ。

というかそもそもこの剣に能力は無い。不思議なことにこれには伝説武器特有の無系統魔法の類が無い、あるのは普通の伝説武器以上

に術式の保存容量が多いといったところか。
無系統魔法が使えない代わりにほぼ無限に近い数の魔法が使える剣、
伝説武器の中の例外。

周りからは俺が手ぶらでニコルの鎌を弾いたように見えただろう。
事実アリーナ内はざわめきだしている。そんな観客の反応など知っ
たことではなく、俺はニコルに向かって口を開いた。

「やり合ってりゃ分かる」

だが、俺が言ったのは色々と省略しすぎな言葉だった。一々説明す
るのも面倒くさい。これはただ楽しみたいだけという狂った理由で
出しただけなのだから。

そう思った俺は、仕切り直しとばかりに再び地面を蹴った。それに
反応したニコルも素早く俺へと肉薄してくる。

互いの距離が武器の間合いに入ったと同時にそれぞれの武器を振る
った。何度も何度も繰り返される衝突音、完成された芸術のごとき
交錯。

「らあああ!!」

吠えながら俺はありったけの魔力を見えない剣に叩きつけ、術式を
展開。

【無属性魔法：剣技：旋断線・虚空】

そのまま居合い切りの要領で一閃。だが、そこから放たれるのは魔
力の塊。

斬撃と化した魔力がニコルに向かって飛んでいく。だが、それすら

も彼女の鎌が防ぎきった。それがどうにも心地いい。

肉薄しながらも互いの魔力がまるで同胞を見つけたように呼応する。だがまだこんなもんじゃ足りない。

剣撃の嵐、そう呼ぶに相応しいほどの軌跡を描きながら俺たちは剣と鎌を振るい合った。

どれくらいそうしていただろう。5分か、10分か、あるいは一時間か。

半ば無意識で動く身体の中で、俺は少しの乾きを感じだしていた。

先程からニコルの反応が鈍ってきた。いや、俺の速度に追いついてこれなくなってきたのほうか正しいのかもしれない。

秒数が増すごとに俺の斬撃の数も増していく。さらに見えない剣を相手にしているのだから精神的疲労も少くないだろう。

だが、心地よい満足感が薄れてきたのは紛れもない事実だ。

「まだだ、もっと付いて来いニコルッ!!」

叫び、俺の腕は一迅の閃光のように走り、握られた不可視の剣を振り回す。それについてこれなくなってきたニコルは、徐々に撃ち漏らしが出始めた。

剣先がニコルの端正な顔を掠める。そこからうつすら血が滲み出した。

それを確認すると、なぜか乾きがひどくなりだした。

苛立ちを抑えられず、俺はニコルの頭上に向かって無意識に剣を振り下ろす。

だがそこで自分が今しようとしていることを自覚して背筋が凍った。“幻剣フランクス”はゆっくりと、だが確実にニコルの頭へと近づいていく。この距離ではもう防御もままならないだろう。

俺は今本気で剣を振り下ろしている。それはつまり結界の補助を突き抜け、殺そうとしていると言っていることだ。

やめろッ!!

だがもはや止まらない。ニコルの頭を切り裂き、鮮血が飛び散る数瞬先の未来が頭をよぎった。

止まれええええ!!

心の中で叫ぶも口は開かない。自分の身体が乗っ取られた、そんな気がするほど身体が言うことを聞いてくれない。

《はい、ストップ》

頭の中に声響いたと思ったら突如頭を殴られたような衝撃が走った。急に身体力が抜け、握っていた剣の重さも抜け落ちた。視界が暗転し、俺はそのまま暗闇の中に落ちていった。

「ゆうッ!!」

控え室の実況テレビで悠希がいきなり倒れたのを見て、紅葉たちは反射的に場内に向かっていった。

場内では観客がざわついていてるものの、誰も悠希を助けようとする者を居なかった。

そんな観客にふつつと怒りが沸いてきたが、今は怒鳴り散らしている暇は無い。

そんな中、うつ伏せで地面に倒れている悠希の隣にぺたりと座り込んで啞然としているニコルの姿があった。彼女にも何があったのかわからないのようだ。では彼女が気絶させたのではないだろう。

「悠希ッ!!」

真っ先に悠希の下へ走り寄ったのは和彦だった。遅れて全員が到着し、取り囲むように和彦の診断を待った。

しばらくして和彦が顔を上げるが、その顔に焦りを浮かべていた。

「……わからない」

「「「は!?!」」」

全員の声が重なる。それほど全員が驚愕させられたのだ。だが、そんなこととは裏腹に次の和彦の言葉に絶句させられた。

「なんで気を失ったのか全くわからない。体調的にはさつきより良い、寧ろ治つてると言ってもいいくらいなんだ……」
「どういうことだ!？」

拳を握り締め、唇を噛む和彦にライラは混乱しながら尋ねた。

「言葉通りの意味だよ。外傷はまったくくない。脈も呼吸も体温も正常に戻ってるんだ。なのに意識が無い……」

全員が絶句する。だが、そんな中でさつきから座り込んでいるニコラが口を開いた。

「何にしても悠希さんを運びましょう。保健医の教師に見て頂いた方が確実です」

「……そうですね。ニコラさんの言う通りです」

ニコラの発言に綾芽が頷く。悠希を運ぶことに決め、ライラが担ぎ上げてアリーナを出す。未だにざわついている観客を冷たい眼差しで一瞥して紅葉は先に言ったみんなの後を追った。

episode 25 深淵に住まう少女

「……………どこだ、ここ？」

何故か俺は真っ暗な空間の中にポツリと立っていた。どうしてここにいるのか、混乱する頭の中である一つのことばかりがよぎった。

「ッー！ニコルー！」

叫んでも誰も返事を返してくれない。あの後いったいどうなった？俺は確かニコルを　　。

「殺していないから心配しなくてもいいよ？」

「ッー！」

いきなり女性の声が聞こえてきた。突如目の前が光り出し、弾け散った。まるで武装展開の光を何倍にもしたような明かりに、一瞬目が眩む。

徐々に視力が戻るにつれ、声の主を確認する。

それは不思議雰囲気を纏った少女だった。歳は俺と同じぐらいだろうか、おっとりした笑顔を浮かべながら長い透き通るような黒髪をなびかせている。

「……………だれ？」

こんな訳の分からない状況でも口は素直な疑問を呟いた。だが、反対になぜか少女は驚愕に目を見開いた。

「わからないん？私はいつもあなたと一緒にいるのに……」

驚愕から一転、心底悲しそうな目をする目の前の少女に、何故だかわからないが罪悪感を感じてしまう。

だが、本当にわからない。これは事実だ。それなのに知っているような気もしてならない。自分の気持ちに混乱しながら少女を観察する。

結論から言つと見覚えすら無い。彼女の口振りからすると、ただ一回だけ通り過ぎただけの人というわけでも無いだろう。まだ若干の寂しさを漂わせる表情をしながらも無理に笑顔を作つて俺に微笑みかけてきた。

「まあ仕方ないかな。そのうちわかるようになるから」

そう言つて笑顔を向ける彼女に、心のどこかで何かが引っかかるような感じがした。曖昧な気持ちを引きずりながら、とりあえずこの疑問を置いておく。

「君はここがどこだかわかるか？確か俺は気を失つて……」

「ここ？ここはあなたの心の中。あなたの深層意識の奥深く」

は？今なんて言つた？

首を傾げる少女からとんでもない単語を聞いた気がするが気のせいだろう、きつと。

「えーっと、もう一回言つてくれない？」

「だからここはあなたの心の中」

あはー、なんだか目の前が真っ暗だよ。あ、元から暗いのか。

全く意味が分からないといった面もちで首を傾げる少女。俺の方がわけわからないです。すみません。
混乱のおかげか、面白くもないことを思いながらどうにか平静を装う。

「ま、まあ百歩……いや、一億歩譲ってそういうことにしとく。で、なんで俺はそんなどこに来てんだ？なんであんなそんなところにんだ？なんで」

「落ち着いて」

どうやら言動までは平静とまではいかなかったらしい。口からいくつもの疑問が吐き出されるが、彼女に指摘されて恥ずかしくなる。微笑む彼女は、どこから話したもののか、と言った感じで人差し指を唇につけて可愛らしく考え込んでいる。

やがて考えが纏まったのか、俺に向き直った。

「じゃあ、まずあなたがここに来た理由から。まあ、ここはあなたの中だから少し語弊があるかな？」

おどける彼女に目で促す。だが、

「理由は簡単。私が呼んだから」

「……は？」

間抜けな声を上げたことも、口が開いていることも今は気にならなかった。というより気にしてもらえない程彼女の言葉は驚きだった。だがあの本人は首を傾げて「知らなかったの？」的な目で見てくる。

「どういう」

「すごい頭痛とか眠気とか無かった？もう動きたくないってぐらい

の

「え……」

身に覚えがありすぎる。何度も倒れ、その都度誰かに迷惑をかけてきたあれだ。

だがなんでそんなことをこいつが知っている？

「だって私がそうしたんだもの」

「ッ！？」

俺の思考を読みとったような言葉と、その内容に驚愕する。一体こいつは。

「一体こいつは何なんだ？何処までが本当のことなんだ？って思ってるでしょ」

「ッ……！」

また考えていることを読まれた。間違いない、こいつは俺の思考を呼んでいる。俺は鋭くを睨む。だが、

「……フッフ……アハハハハハッ……！」

突如、信じられないことに彼女は俺の表情を見て狂ったように笑い声をあげだした。

優しい笑顔から一転。陶醉したような彼女に呆然としながらも警戒を解かない。豹変した彼女はなおも笑い続ける。だが、徐々に笑い声も小さくなっていき、彼女は先ほどと同じ笑顔を向けてきた。

「ごめんなさい。あんまり反応が可笑しかったものだから」

可笑しかっただけで年頃の女の子があんな声で笑っちゃだめだろ。若干引きつった笑みを浮かべながら、そんなことを思ってしまった。まだ警戒を解かずにジッと睨み続ける。そんな俺の態度に再び口元を吊り上げて獰猛な笑みを浮かべるが、どうにかこらえたのか、笑顔のまま語りかける。

「なんで考えが読めるのか、だっけ？簡単よ。それはここがあなたの心の中で、こことリンクしている私はあなたの心と繋がってる。だから思考が読める」

「な　ッ！！」

いきなりそんなことを言い出す彼女に今日何度目かの驚きを露わにした表情をする。俺の心にリンクしているだって？ふざけんじゃねーよ。

勝手に自分の心がいじられたような、そんな感慨が胸を打つ。だが一つ引つかかる。

「ちょっと待て。じゃあなんで俺はお前の思考が読めない？」

「そんなのあたしが人間じゃなくて、心を持たないからに決まっているじゃない」

何言っただよこいつ。全然意味わかんねーよ。

もう色んな意味で錯乱してきた俺はキツく彼女を睨む。そんなことをしても向こうを喜ばせるだけだとわかっていてもそうせずにはいられなかった。

予想通り彼女は恍惚とした笑みを浮かべて嬉しそうにしている。歪んでやがる。

「じゃあ何か？お前は俺の中に住む住人で、俺と話があるからあの頭痛を使っただけをこっちに呼んだってのか？」

「住んでるってのはちょっと違う。まあいいけど」

こいつ……。

「ならとつとと用件言つて元のところに帰せよ」

ここで殴りかかっては帰れない、なんてことにもなりかねないため自制する。だが、向こうの反応は期待したのとは真逆の答えだった。

「話しても帰してあげない。と言うよりまだ帰せない」

「何言つて……」

俺が呟くのと少女の顔がいきなり眼前に現れたのはほぼ同時だった。反射的に後ろへ下がろうとするが、何故か体はびくりとも動かない。そんな中彼女の声が辺りに透き通るように響いた。

「あなたは何が欲しい？何を求めて、何を望むの？」

幾分か温度の低い問い。先程と違って目に力強い意志のようなものが映っている。

突然の彼女の変わり具合と意図のわからない問い。彼女は一体何がしたいんだ？

「あなたは何が欲しいの？仲間？金？それとも愛？望めば手に入る。望まなければ永遠に手に入らない」

再びの問い。望み。願い。その単語が頭に繰り返し響いてくる。何故だか心の底から沸き上がってくるもの、それが漏れるように俺の口は動き出す。俺の望み、それは……。

「……力が欲しい。あいつを殺せるだけの力。あいつに屈さないだけの力。そして」

保健室。

紅葉たちは今日の試合を全て終えてから、ずっとここに入り浸っている。

彼女たちの目の前では苦しそうな表情をしながら一向に目を覚まそうとしない悠希の姿があった。

今は夜七時過ぎ。

もうとつくに生徒がいる時間は過ぎているが、横にいる姉、理事長である波風一葉のおかげで保健室にすることを許可されている。

だがこの場では礼を言う者も居らず、またそれが必要とされる場面でもなかった。

「……紅葉、何個か質問いいか？」

「……なに？」

そんな中、沈黙を破ったのは小学校から腐れ縁のライラだった。だが、その顔にはいつもの人懐っこい笑みは無く、暗い表情でこちらに目を向けずに聞いてきた。

「悠希の最後のあれ……あれは伝説武器だろ？もしかしてあれのせいじゃねーのか？」

「それは……」

肩を震わせながら問うライラに、思わず自分が知る全てのことを話しそうになり、慌てて口をつぐむ。そんな紅葉の態度を見て掴みかかるほどライラは子供ではなかった。

「それは無いわ」

いきなり隣から返事を返された。驚いて振り向くと、そこにはいつものように明るい表情の一葉がライラを見つめていた。そのいつもと変わらない笑みに啞然とする。

「じゃああれは　　！！」

「確かにあれは伝説武器よ。けどそれ以上は駄目。これは他人が軽々しく話していいものじゃないの」

怒鳴りかけたライラの言葉を遮って一葉はさつきとは一変、真剣見を帯びた瞳で睨むように彼を見据えていた。

そんな彼女にそれ以上何も言えなくなつたライラは唇を噛み締めて目を逸らしてしまう。

場に再び沈黙が流れる。だが先程よりも空気が重いと感じるのは気のせいではないだろう。それに耐えきれなくなつたようにおずおずと手を上げる綾芽。

「じゃ、じゃあどうして悠希さんは起きないんでしょうか？和彦君や先生が言つたように、異常はどこにもないんでしょう？」

もつともな意見だ。この場にいる全員が同じことを思っているだろう。

あれから色々と調べてみたが、和彦の言つたとおり異常はどこにも見つからなかったらしい。それなのに未だに悠希は目覚めない。まるで意識を閉じ込められたようにずっと眠り続けているのだ。

だが、そこであることがよぎつた。

「姉さん、もしかして“転生継承の儀式”なんじゃ……」

その疑問にニコラと一葉、それと桜以外が一斉に首を傾げる。この単語は一部の人間しか知られていないことなのだから無理も無いだろう。

「えっと」

「それはありません」

苦笑いしながら答えようとする一葉を遮ってニコラが口を開いた。それにやや驚いたが、本人は相変わらずの無表情で続けた。

「悠希さんは“血液系”です。それに“転生継承の儀式”で長時間の眠りについた事例は今までにありません」

簡潔に言い切ったニコラに、概ね同意見といった様子で頷く一葉。そのやりとりを意味分からず聞いていたであろう他の三人の内、しびれを切らした和彦が口を開いた。

「えっと、その転生継承の儀式？それっていったい……」

おずおずと言った様子で聞いてくる彼の疑問を全員持っているのだろう。全員が聞く体勢に入っている。

一葉は「一応これも機密事項だけどね」と前置きしながら苦笑いしている。

「みんなは伝説武器ってどうやって所有者の下に行くか知ってる？」
「え？えっと、適合者が見つかり次第、国際委員会の使者から直々に譲渡される、ですよね？」

何を今更、といった風に答える和彦。

そう、伝説武器はその特殊性のため取引での受け渡しができない。だがそれでも手に入れようとするものもいるために世界各国の伝説武器は一度『国際委員会』に保管され、適合者が見つければ渡すといったシステムがとられている。

それは常識となっていていることであり、この場で知らない者はいないと言っていていいだろう。

だが、それは大きな誤りなのだ。

「表向きはそうです。けど本当は違います」

それに答えたのは桜だった。含みのある言葉にライラ、綾芽、和彦が首を傾げる。

「結論から言うと国際委員会にはそんな仕事は無いわ。ううん、そもそもそのシステムすら存在しないのよ」

「「「えっ!？」」」

桜から引き継いだ一葉の言葉に全員の驚愕が重なる。まあこの話をされて驚かない人の方がどうかしているだろう。だが、そんなことなど無視して一葉は続ける。

「伝説武器は適合者しか使えないっていうのは知ってるわね? もつと言うと伝説武器は適合者が触れる、もしくは魔力を流し続けてないと具現化さえできない。つまり所持者のある程度近くに無いと具現化できないというわけ」

「え!?! じゃあ」

恐らく続きは「どうやって保持者たちは伝説武器を手に入れたのか？」といったものだろう。だろうというのは一葉がその続きを遮ったからだ。

「保持者たちが伝説武器を手に入れられた理由は簡単よ。武器そのものが適合者の下に現れるから」

「へ？」

驚愕に絶句した和彦と綾芽。そんな中でも素っ頓狂な声をあげたライラに失笑してしまう紅葉。だが、それにも気にした様子を見せず、一葉が再び話を続ける。

「けど無償で現れるわけじゃないの。適合者は対価を払わなければならぬ。それも強制的に」

「い、一体何を……？」

もう聞きたくない、けど聞かなければならない。そんな複雑な表情を浮かべながら和彦は尋ねる。

だが、今度は少しの間を置いて明るかった表情を少し暗くさせてから口を開いた。それに全員が息を飲む。

「……大きく分けて3つ。一つ目は“細胞系”。これは身体の一部を代償にするパターン。二つ目は“痛覚系”。全身の痛覚が刺激されたような痛みを代償を払うパターン。そして最後が“血液系”。全身の血管から血液が噴き出されることを代償にするパターン。適合者は各個人の性質によってこの三つの内の一つに当てはまるの。で、それらが起こって武器が具現化するまでを“転生継承の儀式”というの」

全員が沈黙。何度聞いても背筋が凍える程の辛さ。それが伝説武器、

最強の兵器の実態である。知らないライラたちは全員が顔を青くさせている。

「で、でもそれって　　！！」

「ええ、死ぬ可能性もあるわね。特に“血液系”の場合は血液不足が確定のようなものだから一番危険が高いの」

それがここで寝ている少年の一つの顔。力を手にしようとして何度も死にかけた男。

そんな感慨にふけっていると、再び一葉が話し始める。

「けどね、それでもこの子が負った心の傷に比べれば些細なことなの」

そう言う一葉の顔にはどこか影があった。紅葉は悠希の過去については何も知らない。知っているのは一部の秘密だけなのだ。だがこの一葉だけは知っているのだ、悠希にかつて何があったのかを。

そう思うと心がチクリと痛んだ。そんな感傷を振り払い、一葉の言葉を一字一句聞き逃さないように耳を傾けた。

「それは私の口からでは言えない。それにこれを私が言うのもあれだけど……」

言葉を区切り、再びいつものような笑顔を向ける。

「……悠希のこと、これからも支えてあげてね」

そう言って頭を下げた一葉を見て。全員の気持ちを代表してライラが口を開いた。

「へっ、何を今更そんなこと言ってるんですか。そんなの言われなくてもわかってますよ」

照れくさそうなライラの言葉に全員が力強く頷く。紅葉は一つ、一葉に「心配いらないよ」とだけ声をかけ、それからこの暗い話は終わりとなった。

それから夜8時を回ってから明日の試合に備えて早く寝なさいと言う一葉の意向で全員寮へ戻ることとなった。

悠希のためにも絶対トーナメントを勝ち抜いて見せる。満点の星空を見ながら強く心に焼き付けた紅葉だった。

「……そう」

俺の言葉に満足したように頷く彼女に、ますます意味が分からなくなる。

ここはこの少女が言う俺の心の中。周りは暗いのに何故か彼女の姿ははっきり見える。きつと向こうからも同じようなものなのだろう。そんなどうでもいいことに自分の中で確認すると、計ったようなタイミング（実際に俺の心を読んでいるのだろう）で話を続けた。

「じゃああなたにチャンスをあげる。手に入れるも手に入れないもあなた次第よ」

「……は？」

いきなりそんなことを言われて、つい間拔けな声を出してしまった。そんなことなど気にするつもりも無いのか、彼女はおもむろに右手を上げる。

パチン。

彼女が指を鳴らすと同時に彼女の姿がかき消えた。驚いて左右を見渡すが誰もいない。しかし、

「はッ!？」

いきなり地面が消えたような感覚がしたかと思と、突然浮遊感が身

を包んだ。消えたよう、ではない。本当に消えたのだ。
必死に手を伸ばすも何かに触れる気配すらない。

「なんだってんだよッ!」

いきなり自分で自分でもびっくりするほど大きな声で怒鳴ってしまふ。だがこの状況で大声を出したとこれで何も変わらないだろうことは俺にだってわかる。とりあえず現状の確認を急ぐことにする。

現在、猛スピードで落下中。手を伸ばすも何かにふれる気配は無い。

結論。

心の中にも重力なんてのがあるんだな！。

そんなバカなことを思いながらも俺は右手に集中する。

「ジェネレート」

このまま落ちて下に激突しても大丈夫なような気もするが、念には念を入れて補助武装を展開

「……あれ？」

いくら待っても光が現れない。もう一度呼んでもやはり変化はおこらなかった。

「うつそー……」

そんな中でも勿論落下が止まっていることなんてないわけで、今現在もかなりのスピードで急降下中。冷や汗が止まらない。

どうしたものかと思案するも、打開策が全く思いつかない。いつそ

呪文詠唱してでも魔法を使うか？

補足しておくが、別に魔法は補助武装無しでも使えないわけではない。ただ、魔力の配分が難しいやら、呪文が長いやらでほとんど使う者もない。そんな苦肉の策があるのだが、なんか下につくまで時間が無いような気がするんですけど……。

俺の予感は見事的中（まあ、当たっても結果が変わるわけではないのだが）。周りは未だに暗闇に包まれているが、俺の頭上　というより（逆さまなので）地面らしきものが何故か光を反射しているのが見える。

いや、あれは……。

「……水？」

よく見ると少し波がたっているようだ。まあ普通に考えて地面から水に変わったところで死ぬのは変わらないだろう。

そう思うと自然と恐怖心にかきたてられるもので、さっきから顔が徐々に青くなっているのがわかる。何が言いたいかと言うと、

「いいいやああだあああああ！！！」

情けない程の絶叫を上げながらも落ちていく。つまりいくら今までに危険なことをしてきたからって痛いのは嫌なのだ。それが死ぬほどだとすれば尚更。

そんな必死の訴えでまさか重力に逆らえるはずもなく、俺と水面の距離はものすごい速さで縮まっていき、そして

ドッパアアン！！

俺は真っ逆さまに水面に激突した。

「ハアアアアッ！！」

紅葉が両手に持った刀が一閃し、相手の腹部に食らいつく。衝撃吸収の結果も完全ではない。相手が死なない程度にダメージを軽減させるだけなのだ。そのため胴体が真っ二つになるわけではない。痛みと衝撃がある程度通るだけなのだが、当然気絶させるには充分すぎる。

防ぐこともできずに横腹に強烈な一撃を決められた対戦相手はそのまま地面に倒れ込んだ。

「勝者！！波風紅葉ッ！！」

今日最後の自らの勝利に多少安堵しながらも、心は保健室で未だに意識を失っている悠希のことが大半を占めていた。

これで紅葉の学年順位は20位台に乗ったことになる。今のところ勝ち進んでいるのはライラとニコラの二人だけ。綾芽は負けてしまい、順位は64位となってしまうたが、本人曰わく「今までよ

り500位以上上がっている」とのこと。悠希の特訓がちゃんと身についていたらしい。

明日からは20位以上を決めるトーナメント。気を抜いていたつもりは無いが、更に気を引き締めていかなければ足下を掬われるだろう。

控え室から荷物を取り、アリーナを出ると既にライラたちが微笑みを浮かべながら待っていた。小走りで駆け寄ると、自然に笑みがこぼれてしまう。

「明日からいよいよ本番ですねっ！！私の分まで頑張ってください！！」

「おいおい、今までがウォーミングアップみたいな言い方だな……」

ライラの的確なツツコミなど気にした様子も無く、激励を送ってくる綾芽。そんな彼女の態度に唇を尖らせて拗ねてはいるが、ライラも満更では無さそうだ。

「しかし、俺が20位にくるとはな。夢にも思わなかったぜ」

「何言ってるのよ。あんたは実力があるのに集中できてないから順位が低かったのよ」

そんな謙遜を言うライラに今度は紅葉がツツコむ。

実際ライラの実力は第11高校でも屈指の物だ。にも関わらず、今まで目立った成績を残せていないのは、

「……あがり症なのもわかるけどさ。………勿体無いよね」

「なッ !！」

呆れた風に紅葉が言うと、真っ赤になって抗議しだすライラ。そう、ライラは極度のあがり症なのだ。試合になると緊張しすぎてほとんど動けなくなってしまう。

それが何故今日に限ってこうなのかと言うと、やはり悠希の存在が大きいのだろう。

未だに意識が戻らない友人のことを考えすぎるあまり、別のことは考えられない。ゆえに今日は試合に集中できていると言っわけだ。しばらくそのネタでいじっていると、ふとあることに気がついた。

「そういえばニコラさんは？」

彼女の姿が見当たらない。少し気になったので聞いてみたのだが、何故か全員辺りを見回している。

「あれ？さっきまでいたはずなんだけどね……」

「お姉ちゃんの試合は一緒に見てたよ？」

男の子にしては低い身長で女の子みたいな顔立ちの和彦が可愛らしい仕草で首を傾げ、我が妹ながらも美少女と呼ぶべき桜も首を傾げると、男なら誰しも喜びそうな雰囲気を醸し出していた。

しかし、ここにいる和彦以外の男はライラしかいないのだが、ライラは小学校のときから桜を知っているし、和彦のことを友人と認識しているせいなのか、全く反応を見せない。

まあそんなことはどうでもいいが、少しニコラが心配になってきた。

ヴー、ヴー。

そんなとき、ポケットに入れておいたケータイが鳴った（鳴ったと言っても、マナーモードになっているためバイブレーションが鳴ったという意味）。

確認すると、ディスプレイには『mail』の文字。

疲れましたので今日は先に戻ります。
お疲れさまでした。

ニコラ・ベール

簡素な文を読み上げ、ケータイを再びポケットに収めて、メールの内容を話す。

「そうですか。いくらニコラさんでも疲れは溜まりますよね」

「もしかして無理させちゃったかな？……」

「だな。あのでっかい鎌も伝説武器って言ってたし」

綾芽の発言に全員が難しそうな顔になる。ニコラへの罪悪感を抱いたのか、場の空気が重くなる。

「……そろそろ帰ろっか。今考えても仕方無いわよ」

結局そこにたどり着き、紅葉の提案に今度は全員が頷く。そこで桜

が思い出したように声を上げた。

「あっ！今日お兄ちゃんのお見舞い行ってないよ！！！」

「……あ……」

ごめんゆう。忘れてた。

慌てて紅葉たちは悠希の眠る保健室へと向かった。

暗闇の中。何かに包まれているような感覚が肌に伝わり、恐る恐る目を開く。

「……生きて、る？」

疑問系ながらも自らの声が発せられたことに多少の安堵を抱きつつも、辺りを見回す。首を動かす度に抵抗がかかり、酷く疲れる。どうやら俺は今水中（心の中らしいのでその表現が的確かわからないが）にいるようだ。それにも関わらず息は出来るらしい。

一体あの女は俺に何をさせるつもりだ？

浮かんでくるこの疑問が一番大事なように感じられ、さっきまでの思考を切り替える。

なんか願いとかが聞かれたけどそれが関係しているのだろうか？
仮にそうだとしてもどうやって叶えるつもりだ？俺の願いを叶えてあの女にはなんのメリットがある？

まさか女神様がぐーたらな小市民である俺にぐーたらしている褒美をくれるってわけでも無いだろう。というかそんなことされても混乱するのが普通だ。

落ち着け俺。あの女が言っていたことにヒントがあるはずだ。

「むー……」

.....。

スミマセンお手上げです。どうやら俺の頭は俺の思った以上に悪いらしい。

約二分ぐらい黙考していたというのにヒントの欠片も、閃きも何も思いつかないとは……。一体どれだけ使わなければこんなアホな脳みそになれるんだろう。

自分で自分を貶してはずんずん気分が沈んでいく。もうお通夜並のテンションに落ち込んだ俺。

そんな俺の目の前が突如光り出した。

「?なんだ?」

悲しいかな、もうこういうことに慣れた俺は「またなんかめんどくさいことか」などと予測して苦笑いしていた。

だが、それも現れた人物を確認した時点で、心臓が止まったような感覚に襲われ、目を見開いた。

現れた人物は男。

少し長めの黒髪に、身長は今の俺よりも少し高いぐらい。切れ長の目の整った顔立ち。その人物は黒く輝く刀を持っていた。

「な、なんで

」

一体なんの冗談だ……。

「どう、して」

何故、なんでこの人が目の前に立っている……。

「兄……さん……？」

見覚えあるなんて者じゃない。愛刀の伝説武器、闇刀“影月”を携えた俺が知る中で最強の剣士。後に“影月”が俺の下へやってきて尚、この人のように扱いこなせなかった。そんな俺の憧れが なせまさと 華瀬雅人が。

「なんでここに出てくんだよッ！！兄さん！！！！」

兄さんは答えない。ただ、俺に向けた刃が鈍く光るった。

伝説武器、闇刀“影月”。

現保持者『華瀬悠希』。

元保持者『華瀬雅人』。

夜色の吸い込まれるような刀身を持つ伝説武器。

元保持者『華瀬雅人』の死亡後、現保持者『華瀬悠希』へ再適合した。

これが国際バンクに登録されている情報だ。

伝説武器は保持者が触れる、または魔力を流し続けなければ使用はおろか、具現化さえできない。

そのため俺の兄　華瀬雅人の死亡後、具現化仕切れずに欠片も残さずに消えた。

はずだった。

それから丁度一週間後、影月が俺を選ぶまでは。

適合者の移動、これは有り得ないわけではない。

保持者が伝説武器の所有権を放棄　つまり保持者が死ねば次の適合者が現れれば再適合することができる。

だが通常、再適合にはそれなりの月日を要する。伝説武器は保持者の精神面、肉体面で自身に相応しいものを選ぶのだから、そのような人物が一週間そこらで見つかる筈がない。

一般的に再適合者が見つかるのは五年後〜十五年後の間。それが肉親だろうと変わる筈がない。

にもかかわらず“影月”は一週間後に兄さんの実の弟である俺を適合者として選んだ。

これには何か意図があるのか？

それが今まで抱いてきた素直な疑問だ。

もしかしたら兄さんが俺に託した、そんな希望を抱いたこともあった。

そんなこと、恨んでいる筈の兄さんがするはずがないのに。

「はい、あなたの相手はあなたのお兄さんです」
そんな呑気な声と共に現れた先程の少女。

「何言つて　　!」
「ここじゃあれだし場所変えましょうか」

状況に思考がついていけず、問いただすように怒鳴るも最後まで言い終わるより早く、彼女が再び指を鳴らした。突如周りの色が変わる。

「うそ、だろ……」

視界に飛び込んできたのは古びた工場のような景色。それだけなら普通の廃工場か何かだと思っただろう。だが、明らかにここは普通ではなかった。

辺りを塗り替えるように所々染まる紅
無数の死体。

血痕。さらに転がる

その場にいるだけで吐き気を催すような光景。だが、俺はここを知っている。いや、この光景の渦中にいた。

ここは俺の罪が染み付いた場所であり、俺の人生を180度帰る出来事が起こった場所。

驚愕に目を見開いていると、再びこの場所には相応しくない少女の呑気な声が響いた。

「ルールは簡単。どちらかが死ねばそれで終了。ユウキもここが現実じゃないからって手抜きしてやられてたら本当に死ぬわよ？」

いきなりの兄弟同士での殺し合い宣言。それに真っ先に反応したのは他の誰でもなく俺だった。

「待てよ！！そんなのできるはずねーだろッ！！」

「やらなきゃ死ぬだけよ」

悪びれもなくそう言う彼女にますます俺の怒りが膨れ上がる。

「お前、ここは俺の心の中だとか言ってたじゃねーかッ！！いい加減に」

「それがここでは本当に死ぬかもしれないのよ」

再び俺の言葉を遮った彼女の言葉に、俺の思考がフリーズした。そんな俺の心情を知ってか知らずか、彼女が畳みかけるように言う。

「催眠術って知ってる？人間は『腕が火傷している』っていう催眠をかけると本当に火膨れができたっていうあれと一緒に。つまりこ

「ここで起こったことは現実でも起こるってわけ」

啞然とした。彼女の言葉が本当であると過程すると、自分が無事に帰りたいのであれば夢のような存在とは言え、兄さんを斬らなければならぬ。それを拒めば確実に死ぬ。その究極の二択に俺はすぐに答えを出せなかった。

「あ、ちなみに伝説武器だけ、展開できるようにしといたから」

最後にそう言った瞬間、彼女は再び姿を消した。

後に残されたのは俺と兄さんの二人。苦しくも場所は兄さんが生きていた最後。

その事実が俺の鼓動を速め、呼吸を荒げていく。

今すぐにも逃げ出したい。

グルグル回る思考の中、ふいに沈黙を守っていたはずの兄さんが口を開いた。

「懐かしいな。ここで俺は死んだ。お前が命令を無視してロシア軍に捕まったせいだな」

力強く響く兄さんの声。だが、響くのは声では無く、兄さんの言葉の意味だった。

頭を金属バットで殴られたような衝撃と、激しい嘔吐感にみまわれる。こっちに来る前まで感じていたものとは比べものにならない濃いものだ。だが、もちろん気を失うことも吐くことも出来ない。

「お前が俺の足を引っ張ったんだよ」

「ごめん、なさい……」

「お前が自分の身を守れば」

「ごめんなさい……」

「お前さえいなければ……俺は死ななかったッ!!」

ただ謝ることしかできない俺に、突如兄さんは声を荒げ、殺気が膨れ上がる。それに呼応するかのように“影月”の輝きが増していく。それはまさに月のような、と表現しても過言ではないほど美しく、それに対して俺の目にはただ恐ろしく映った。

日が沈み、辺りが暗闇に包まれた頃、ニコラ・ベールはある人物に会うため、日本に訪れていた。

場所は北海道のある施設。表向きは工場とされているが、裏では“ある部隊”の駐屯基地として利用されている。

広大な敷地が広がるそこへ到着するとすぐさま門番に捕まり、招待状の提示を要求され、さらに様々な検査を受けさせられたが、それら全てを淡々と無表情に済ませていった。

検査が終わり、案内に誘導されてようやく目的の人物が待つ部屋へと到着する。

扉には『第一小隊長室』の文字が無機質に書かれている。

そこまできると、案内してくれた男性は一つ敬礼をしてその場を後にした。

残されたニコラは、何の気負いもなく目の前の扉をノックする。コンコンという音と共に、中から女性の「どうぞ」という言葉で促された。

これまた気負い無く扉を開ける。中は思ったよりも広く、ちょっとした会社の社長室のような空間が広がっていた。

扉から直線上に応接用のソファとテーブル、さらに奥には一つだけデスクが置いてある。そのイスにもたれかかっているのが今回の目的の人物だ。

「始めまして、ですかね？」

「戦場では何度かお見かけしましたが、会話するのは初めてです」

目の前の女性　もといい少女の挨拶を肯定する。

背はニコラよりも少し小さいくらいだろう。実年齢も一つ下らしい。キレイと言うより可愛らしいと表現したほうがしっくりする童顔に笑みを浮かべてこちらを見ている。

「では初めまして。私は日本軍特殊中隊第一小隊長の三島^{みしま}白羽^{はくわ}です。ようこそいらっしました、ニコラ・ベレーさん」

形式的な挨拶をまったくそう思わせないようなこの態度にニコラは素直に感心した。

日本軍特殊中隊、それは様々な術師で構成された部隊だ。その中でも彼女は唯一の伝説武器保持者であり、若くして小隊長という階級を与えられたのは、武器だけでなく彼女の實力もあつてのことだろう。

そんな彼女にここへ呼ばれたのはただ世間話をするためではない。

「で、あなたから見て先輩……華瀬悠希はどうでしたか？」

それにもニコルは淡々と言葉を紡ぎ出した。

「私には悠希さんがロシア軍大使を暗殺したようには思えません。加えて彼程の術師を始末するには国力から考えて惜しいかと」

そう、今回悠希を殺すように指示を出したのは目の前の人物　三島白羽である。

正確には悠希の動向を観察し、ロシア大使を暗殺した情報を掴み次第殺すように命令されていた。

しかし何故ドイツ軍であるニコラが日本軍の一軍人の命令を守っているのかと言うと、これには大した理由は無い。

ニコラとしては悠希と戦えばそれで良かったのだし、試合があんな形で終わったとしても、自分が負けたのは明白である。そのため悠希との約束は守るが、報告にも嘘はつかない。そもそも初めから悠希を殺すつもりなんて無いのだから。

そういうことをわかつていた上でニコラに頼んでいたのだろう。恐らく政府からの命令が来て、建前上の名目で必要があれば殺せといった風に頼んだといったところか。

ニコラの報告を微笑みながら聞き終えた白羽は、「そうですか」と言って何かを思案するように口を閉ざした。それからしばらく間を開け、再び口を開く。

「やはりあなたもそう思いますか。そもそも日本の剣の伝説武器を保持している人物が犯人と仮定するのは間違いですし、それにもし悠希さんが犯人だったとしても詰めが甘すぎます」

一気に言い切る白羽を表情一つ変えず見続けるニコラ。

やがて、白羽はとんでもない結論を言い放った。

「つまり、ロシアが日本を煽るための自作自演かと、私は推測しています」

それはいつかの一葉が言ったものと全く同じだった。無表情で聞く側に徹していたニコラはこれを聞いてもまったく動じない。少なくとも動じたようには見えない。

それから白羽が話す、ニコラが聞くといった風に時間が過ぎていった。

ニコラが「帰ります」と言って部屋を出て行った後、三島白羽は大きなため息をついた。

やはり華瀬悠希は白、どうしてもそういう結論に至ってしまう。我ながら彼を鼻屑にしすぎかとも思うが、彼がやったとはどうしても思えないのだ。

華瀬悠希はやるならロシアに単独で攻めに行くようなことも平気でこなす人なのだ。こんな小さいことをしてどうにかなったと思うなんてことは無いだろう。

もう一度大きなため息を吐き、机に置かれたケータイを手取る。電話帳からある人物の番号を呼び出し、そのまま通話ボタンを押すと、四回目のコールで繋がった。

『もしもし？』

「お久しぶりです隊長。お元気ですか？」

『やーね。今は隊長でも何でもなし、昨日電話したばかりでしょ』

アハハハ、と電話の向こうで笑っている落ち着いた声の主につられるように白羽も自然な笑みを浮かべた。

「そうですね。では一葉先輩、こちらの情報を伝えますね」

『はいはい。よろしくしろちゃん』

「しろちゃんはやめてくださいっ！！」

通話相手、波風一葉はおどけたようにそう促す。

一葉にいつも情報を回していた人物、それが三島白羽だった。

小隊長という階級のお陰である程度裏の事情にも詳しい彼女は、度々一葉にお願いされてはこうやって情報を流しているのだ。

勿論こうしたことは重大な罪に問われることになるのだが、白羽は一葉に多大な恩があり、それを抜きにしても一葉のことを慕っている。多少のリスクなど関係無い。

それにこの件は白羽自身も気になっていた。

「現在、悠希先輩を公にするつもりは無いみたいです。国力を学園都市スフィアに注ぎ込むようなことも今のところありません。多分彼の存在を消すのは日本としても望むところではないでしょうし、そもそも返り討ちになるのが目に見えてます」

『それじゃあ彼はここに追い詰められたんじゃないで、ここに誘導させられたってことかぁ。日本の政治家も無能ばかりの集まりじゃなかったわけね』

一葉のその言葉に苦笑しながらも概ね同意見だ。

政府もわざわざ悠希を捕まえようとしたんじゃないで、学園都市へ

と追い込んで手が着けられない、という大義名分が欲しかったわけだ。

悠希と正面から衝突すれば膨大な兵力が削がれ、そのままロシアに侵攻されたら終わり、ということは明らかだ。例え生半可なレア持ちを何人行かせても、無駄死になりかねない。

「こちらはそういうことで進展はありません。そちらはどうですか？」

『えつとね……』

何気ない確認のつもりだった。だが、一葉の言葉が詰まったことによつて何か悪いことが起きたのだと認識させられた。

『悠希が倒れたの……』

「……………え？」

その言葉を聞いた瞬間驚愕に体が凍った。

『あ、別に誰かにやられたわけじゃないの。ただ風邪か何かだと思うんだけど……』

そう付け加える一葉。だが、彼女の歯切れの悪さから本人はそう思っていないことは明白だ。

「そうですか、安心しました」

だが、口にはしない。これ以上この人に負担をかけたくない。

「では今日はこれで」

『うん、またね』

向こうが先に通話を切る。だが、白羽はしばらく呆然としてしまっていた。

（先輩に何かがあった……）

そう思うと思考がうまく働かない。

ツー、ツー。

ケータイから鳴るその音がしばらく部屋に響いていた。

episode 30 男の戦い

第6高校、第一アリーナ。

たくさんのお客さんが上がるそこは、観客による尋常じゃない程の熱気に包まれていた。

その舞台の中心で、黒崎ライラは目の前の対戦相手と睨みあっていた。

対戦相手は男。確か名前はロニー・ホーフス、前回の順位は28位だったはずだ。

流石と言うべきか、これぐらいのレベルになると体内から漏れ出す魔力で実力を悟られないよう、完全に魔力を抑制している。少なくともライラには感じられない。

初めて立つ高みから見る景色はなかなか悪くない物だった。今までは200位がせいぜいだったが、今いる順位は20位台。気のせいか、いつもより心臓の動きが早い。だが、同時に例えようのない高揚感が身を包んでいる。

「これより九回戦、黒崎ライラvsロニー・ホーフスの試合を開始します」

開始前のサイレンが響く。それと同時に俺たちは同時に武器を呼び出した。

「「ジェネレート……」」

ライラが呼び出した補助武装は彼の身長程の大きさを誇る巨大な剣だ。

一方対戦相手のロニー・ホーフスは、両手にトンファーを構えている。そこからは魔力では無く、強者の貫禄が流れ出していた。

「初めてください」

試合開始の合図と共にライラは飛び出す。相手は受けるつもりなのか、その場で構えているだけだ。

（おもしれえッ！！）

今いる場所はかつて無い高み。この場で負けようと記録的なことなのだが、ライラの頭には『負ける』という単語は浮かばなかった。

そのまま突っ込み、大剣を振り上げ、そのまま振り下ろす。

「チッ！！」

対戦相手は右手のトンファーでライラの剣を難なく受け流し、左に握った方でカウンターを決めに来る。

それを引き戻した大剣で受け止め、一旦距離を取る。

さすがに手強い。威力も身のこなしも自分とは比べものにならないぐらい洗練されている。その事実を見せつけられてもライラの思考は『敗北』の二文字を紡ぎ出さなかった。

再びの特攻。だが、今回は武器に魔力を流しながら。

【土属性添加：剣：纏 - 飛礫 -】

剣に土属性の魔法をかける。すると、何やら周りの土が剣へと集まりだした。
それに構わず再び振りかぶる。

「でえやああああ！！！」

雄叫びと共に振り下ろした剣は、先ほどと同じように受け流される。しかし、

「ッ！！危なッ！！！」

剣に纏わりついた土が、いなされたと同時に弾丸のようにホーフスのに殺到する。

呻きながらもなんとか土の弾丸を防ぎ、今度は向こうが距離を取る。だが、それに対してこちらも距離を詰めるように猛ダッシュ。

「おらああああ！！！」

再びライラは剣を振るう。それと同時に弾丸も押し寄せてくるといふ二段攻撃に、徐々に押され始めたホーフス。

だが、ライラも剣を振るいながら頭の中で弾丸を制御するということをしなくてはならないため、精神的面ではホーフスより消耗が激しいかもしれない。
しかしライラは引かない。

（ここまで来たら行けるところまで行ってやらあッ！！）

この場でそう誓い、全力で剣を振り回す。

押され始めたホーフスは徐々に、だが確実に土の弾丸が当たっている。
当たった痛みで怯んでいるところに大剣で斬りかかるが、掠っただけで避けられてしまう。

だが、そのことがライラの自信へと繋がった。

（行ける！！）

そう思った瞬間先ほどの距離を縮めるべく身体強化で脚力を最大限に強化。

瞬時に距離を詰め、留めとばかりに思いっ切り剣を振り下ろす。

勝った。

そう思ったが、ライラはホーフスの些細な変化を見逃さなかった。

笑っている。

いち早く脳が警笛を鳴らす。早く下がれと身体が叫んでいる。だが、動き始めた剣を急に止めることなどできるはずがない。

「ッー！」

突如横殴りの突風がライラの身体を吹き飛ばす。吹っ飛ばされたライラはそのままゴロゴロと派手な男をたてながら転がった。

「いつてええ……」

だが、そう思う暇もなく次の変化が現れる。

突如地面が盛り上がり、ライラへと殺到しだしたのだ。

ゴゴゴオ

瞬時に壁が一番薄いところを見つけ出し、一閃。

ギリギリで脱出に成功すると、後になつて背筋に寒気が走った。

あんな魔法を武器型にインストールしているんだから魔法技能もかなり高い術師なのだろう。まあ魔法技能が低いやつなんてここまで来るとないだろうが。

だが、これで迂闊には動けなくなった。

武器型は入れておける術式の容量が少ないため、あれだけ大きな魔法だと、他の魔法を沢山は入れておけないはずだ。

そう見切りをつけ、再び特攻をしかける。だが、生物の本能のためか、先程より速度が遅い。

そんな自分の足を叱咤しながら徐々に距離を詰めていく。

距離が0になった瞬間、ライラは再び剣撃と弾丸の嵐を巻き起こす。それをホーフスはトンファーで華麗に捌いていく。

斬線が弧を描き、脇腹目掛けて襲いかかるも右で弾かれ、同時に弾丸が降り注ぐが左で全て弾かれる。

先程とは形勢逆転。徐々にライラが押され始めた。とうとう集中力が限界に近づいてきたのだ。

もともと大剣とトンファーだ。大振りしかできない大剣と、小回りが効くトンファーでは手数が違いすぎる。それを埋めるための“纏

” だったのだが、どうやらバテるのはライラが先だったらしい。

「グハッ!!」

とうとうトンファーが鳩尾にヒットする。そのままライラは数メートルぶっ飛ばされ、地面を転がった。

一瞬気を失いかけたが、どうにか立ち上がることができた。口の中を切ったのか、血の味が舌を突く。

しかし、立ち上がったは良いが、今度は向こうに接近を許し、無防備な脇腹へモロに決まった。

再び吹っ飛ばされ、また立ち上がる。

それを何回か繰り返す内に、徐々に視界が霞始めた。

このまま倒れてもいいんじゃないのか？

心の中で誰かが囁く。勿論それが自分以外の誰でもないことなど分かり切っているのだが。

ここで負けても誰も文句言わねーよ。青くさい真似なんてすんなよ。

再び語りかけてくるもう一人の俺。殴られる度に意識が沈みかけ、もうこのまま倒れちまおうか、などと頭をよぎる。

だがそこである光景を思い出した。

ある男の周りで心配気に見守る紅葉たち。勿論その中には俺も含まれている。

それはまさしく悠希が倒れたときの光景だった。全員が心配気に悠

希を見つめる姿が、そのまま俺へ向けられる、そんなの絶対にごめんだ。こんなときに俺が倒れて心配かけちまったら最悪じゃねーか。誰も文句言わねーって？いるじゃねーかよ。誰でもない、この俺自身がッ！！

突如視界が開けたように目の前の光景が鮮明に映る。迫り来るホーフスのトンファーが酷くゆっくりに見える程だ。

それを少し体を逸らしてかわし、そのまま手に持った大剣を一回転しながら斬りつける。

自分の動きさえも酷く緩やかで、こんなので大丈夫なのかと心配になってしまふ。だが、それは無用な心配だったようだ。

ホーフスはそのまま崩れ落ちた。

「勝者、黒崎ライラ」

試合終了のブザーと共に、ライラはその場に座り込む。

「ははは……はははははっ！！！」

最初はその意味がわからなかった。だが、徐々に理解していくにつれ、嬉しさが沸き上がってくる。

「よっしゃああ、つて、いてええええ！！！！」

ガッツポーズを決めようと腕を動かすと全身に痛みが走った。

そういえば殴られまくったんだっけ。

今更ながらそう自覚し、このまま担架が来るのを待つことに決め、そのまま地面に寝転がる。

今日も空が青いな、チクシヨー。

こんな気分も悪くないな、そんなことを思いながら流れる雲を眺めていた。

episode 31 追いかけてくる過去

「構えろ、悠希ッ！！」

そう言い放った瞬間兄さんの姿が掻き消えた。それと同時に右から嫌な予感を感じる。

「ッ！！デュランダルッ！！」

瞬間展開。

一瞬という時間すらかけずに掌に武器を呼び出す。

手に治まるのはは透き通るような青みがかかった両刃の剣 氷剣
デュランダル。

美しい装飾が施されたその剣を構え、全神経を集中させる。

ガキイイン！！

ほぼ無意識に反応した腕は、見事に兄さんの刀の闇刀影月を受け止めた。その間、まったく兄さんの姿が見えなかった。

だが、別にそんなことが影月の能力ではない。かといって隠蔽ハイドの魔法でもない。あれに使っている魔法は身体強化だけだ。

『神速』

それは兄さんがかつて呼ばれた二つ名。人間の目では捕らえられない程の速さで敵を葬ってきた証。だがこんな物、この人にかかればどうってことはない。ただ速いだけが兄さんではないことを俺は知

っている。

それでもこの速さは厄介だ。

「はあああああ！！！」

【氷属性魔法：氷触】

魔力を込め、剣を地面に突き刺し、そのまま術式を発動。その瞬間、接触点からもの凄いスピードで氷の大地が広がっていく。

この魔法は領域へ働きかける魔法だ。もちろん地面と接触していれば何でも氷る。唯一の例外は俺だけ。

広がって行く氷の大地が兄さんを追い詰める。だが、術式が発動した直後、左手に新たな武器を呼び出す。

パキッ

兄さんへの距離が残り一メートルをきったあたりで、大地を覆っていた氷に亀裂が走る。いや、それにしては不自然な程綺麗に切れている。

だが、その現象が起きるより、俺が左手に武器を呼び出す方が早かった。

俺が呼び出したのは白銀のリボルバー式の銃。銃身には美しい十字架が描かれているその名は光銃ジャッジメント。

俺がジャッジメントを呼び出したのは、あの程度では終わらないと踏んでのことだった。逆に言えば次で仕留める、そう決意したから。

決まってくれよ。

【無系統魔法：光銃：光子誘導放出】
フォトンレーザー

この光銃ジャッジメントの無系統魔法は、光を収束し、放出しているように見えるがそれだけでは無く光自体を物質化させ、熱量を自由に操作し、さらに光の形状、速度を光速から完全停止まで変化できる。真っ直ぐにしか飛ばないデメリットがあるとはいえ、それでも余りあるほどのメリットを持ったこの武器だけの魔法。今設定してある速度は、実際の実弾とは比べものにならないどころか、光と同じ速さで飛んでいくように設定している。

それが兄さんへと目にも留まらぬ速さで被弾して、利き腕である右腕に穴を穿く。

はずだった。

既にそこには兄さんの姿が無かった。そのことに驚愕しながらも辺りを見回し、気配を探る。

ザクッ

「……………え、……………」

後ろから何かを突き刺したような音が耳に入る。振り向くが、そこには誰もいない。そして気づいた。気づいてしまった。

……………右腕が無かった。

「あ、あ……」

鮮血を上げる右腕を見た瞬間、頭の中が真っ白になる。さらに走る
激痛で顔が歪む。

「ああああアアアあああ！！！！！！！！」

痛覚を直に刺激されたような痛み、飛び散る血に頭がパニックに陥
る。

（落ち着け！！これは現実じゃない！！現実じゃないんだ！！！！）

自分に念じるようにそう言い聞かせた。だが、頭でわかっていても、
体は痛みにも身悶えている。

「……なんで急所を狙わなかった？今更罪悪感がこみ上げてきた、
なんて言うんじゃないだろうな？」

厳しい声が正面から聞こえてくる。痛みにも耐え、必死に顔を上げる
とやはり兄さんが居た。

「う……アサ、シン……」

返答になっていないどころか普通なら意味がわからない答えに、兄
さんはあからさまに顔をしかめる。だが、そこには少しの賞賛の色
があった。

「ほう、良くわかったな。わざわざ姿を消してまでカモフラージュ
したんだが」

闇刀影月の無系統魔法、それが“影からの暗殺者”^{アサシン}という魔法。この魔法は影がある場所から刀を具現化するという魔法。上手くイメージすれば複数の影から同時に刀で串刺しということも簡単だ。ただ、これには発動までにある条件が必要となる。

「い、つ……影を……」

その条件とは具現化させる場所、つまり影を踏むこと。これをしてなければ発動できない。だが、この動作をした素振りを見せなかった。改めて振り返る。今、俺の周りには影が無い。唯一あるのは俺の足下の影だけだ。……………足下？

「まさか……最初……？」

「ああ、その通りだ」

兄さんが動いたとき、それは最初に俺へ攻撃してきたときだ。つまりそのとき、既に俺は死亡宣告を受けていた。

腕を押さえて呆然としている俺に兄さんは嘲笑を顔に浮かべる。

「あの時もそんな格好だったな。お前はそうやって地を這いずりながら、俺が殺されるのをただ見ていた」

「ち、がう……」

止めてくれと心が叫ぶ。だが、口から発せられたのはそんな細かい声だった。

「お前は俺を見殺しにしたんだよな？」

「違う……」

「何が違う？わざわざ捕まりに行つて、俺を呼び出す餌になり、そ

して盾にされた。裏切ったようなもんじゃないか」

「……違うんだ」

止める。もう思い出したくない。止めてくれ。

誰にも話したことの無い奥の奥までほじくり返されたように、胃が擦り切れるような痛みが走る。

「知ってるぞ。今は人殺しで追われてるらしいな」

「なん、で……？」

その言葉に衝撃を受ける。だが、兄さんはそんな俺をも嘲笑うかのように不敵に微笑んだ。

「ここはお前の中だぞ？俺は作られた存在。お前の感情、経験、全部ここに流れてくるんだよ」

そう言って頭を指差す。

「無様だよなあ。英雄呼ばわりされといて次は犯罪者ときたもんだ。けどお前にはよっぽどお似合いな冠だな」

「止めてくれ……兄さん……」

もうそれ以上俺を責めないでくれ。

「何言ってる。事実だろ？お前は俺を殺した、つまりあの頃から味方殺しの犯罪者。何も変わって無い」

「止めてくれよ、もう……」

俺を否定しないで……。

心が壊れそうな程、言葉が胸に突き刺さる。

『あの頃から何も変わってない』、これは一番言われなくなかった言葉。今まで必死に強くなろうと努力して来た。もう誰かが死ぬのを見たくないから。

けどそれは偽善だ。俺はただ、八つ当たりしていただけなのかもしれない。

「この人殺し」

その瞬間、何かが壊れる音を、俺は聞いたような気がした。

運命の齒車が狂ったあの日、本来なら俺が死ぬ筈だった。

第6時世界大戦開始から約一年と半年後、当時中国に侵攻していたロシア軍が、何故か日本の領土である北海道に標的を変えた。

多少の戦力を残していたとはいえ、最強の軍事大国であるロシアに適うはずもなく、北海道は徐々に制圧されていった。

当時、俺たち兄弟も伝説武器保持者として中国へ赴いていたが、侵攻の知らせを聞いてすぐさま帰国した。しかし、帰国時の戦況は圧倒的に不利。他国もいつ自分の国が狙われるかわからなくなったこの状況では迂闊に兵力を動かすことができなかったのだろう。戦争終結の最後まで熱心に防衛に参加してくれたのはアメリカ、ドイツ、そしてあるうことが現在も残党が残っている中国だった。

北海道防衛戦、後にそう呼ばれたこの戦いは、四国が戦力を集結させたにも関わらず、ほんの少し優勢という結果にしかならなかった。

そして戦争終結からちょうど1ヶ月前。俺はある命令違反を犯した。あるうことが兄さんの命令を。

簡単に説明すると、仲間を目の前で殺されたことに激情した俺が一人で突っ走って捕まった、そういうものだ。

兄さんの命令は「撤退」の一つ。だが、俺はそれすらも聞き入れられない程頭に血が上っていた。

結局捕まった俺は、通信端末を奪われ、交渉の為の道具にされた。その通信をした男　　銀髪の伝説武器保持者の獰猛な笑みが今でも頭に張り付いて忘れられない。

その通信が終わった五分後に兄さんは現れた。それも一人で。兄さんは俺を助けるために部屋にいる兵士を片っ端から斬り殺していた。

それから兄さんの言ったとおり、俺は攪乱したロシア兵の盾にされ、それで怯んだ兄さんが銀髪の男に斬り殺された。その時、兄さんは何かを言ったのだが、聞き取ることができなかった。そして俺は生き残った。

いや生き残ったのではない、生かされたのだ。

兄さんが死んだ後、工場に居た兵士は全員俺には見向きもせず引き上げた。

そして俺は兄さんが血に濡れた光景を、ただ呆然と見ているしかできなかった。

狂った俺はそれからというものの、ただ無茶苦茶に敵兵士を殺して、殺して、殺すだけの日々。何かしてないと狂いそうで、自分が兄さんを殺したと思うと怖くて、自分を誤魔化すために力を振り回した。

そして戦争終結まで、一睡もせずに死体の山を築き上げていった。

最後の兄さんの言葉、それはどれだけの恨みを込めた言葉だったのだろう。それを思う度に怖くて眠れない。

「不合格。まあでも“複数保持者”としては合格ってところね」

その声が正面から聞こえてくる。だが、目の前が真っ暗で何も見えない。

彼女の言った複数保持者とは、伝説武器を2個以上保持しているものだ。

そんなことを自分自身の確認をとり、しばらくしてようやく自分の瞼が閉じていたことに気がついた。ゆっくりと目を開くと、そこには先ほどの兄さんの顔も血に濡れた廃工場も無く、何も無い空間とさっきの少女が俺を覗き込んでいるだけだった。

「
つっ~~~~!!」

ふいに体を動かそうとすると右腕に激痛が走る。だが、腕を見てもさつき切られたことなど無かったように繋がっていた。しかし、そこから伝わる痛みは本物だ。

「だから言っただじゃない。あそこであつたことは現実にも影響するって。戻ったら後遺症になつてるかもね」

未だに頭が重い。思い出したくもないことが次から次へと沸き上がってくる。

そんな心身の痛みに体がうずくまってしまふ。

「どうして、あんな……ことさせた……」

やっとの思いで紡ぎ出した言葉はそんな掠れるような声で発せられた。

だが、彼女は「何言ってるの？」とでも言いたげに首を傾げる。

「力が欲しいんでしょう？ただ手には入るとでも思った？力はその持ち主を選ぶんだからそんなことあるはずないでしょ？伝説武器と同じよ」

「そんなことじゃないッ！なんで兄さんと戦わせたか聞いてるんだッ……」

「だから？」

「なッ！？」

すました顔で当然とばかりに言う彼女に俺は驚愕を顔に浮かべる。

「けど最初に力を欲しいって言ったのはユウキよ？ユウキがそう言わなければあんなことさせなかったわよ」

「くッ……」

正論だ。言い返すところの無い程の正論だ。所詮俺は子供なのだ。いつもその時の感情が優先で、全て自分が巻き起こしたことなのにそれを否定したくて。故に正論だからこそ俺は次の言葉を続けられないでいた。

「……はー」

すると彼女は、何を思っただけ突然大きな溜め息を吐く。

「でも、そうね。ここまで来たんだから手ぶらで帰すのもあれだし、もうすぐ全部揃うし……」

全部揃う……？ いったい何が？

そんな言葉に呆ける俺を後目に彼女は思案するように腕を組み、首を捻る。これだけ見ると可愛いのだが、もう本性を知ってしまったのでそんな気も起きない。

一時の間を開け、考えが纏まったように腕を解いた。

「よし！ じゃあ一つだけ枷を外しましょう。適合したのに眠ってる伝説武器を起こしてあげる」

いきなりそんなことを言い出す彼女に、俺の思考が一瞬置いて行かれそうになった。

だがやがて、自我を取り戻した俺は慌てて疑問を投げかける。

「ちょっと待てー！ お前は何を知ってる！？ なんてそんなことができるんだ！？ そもそもお前は何者だッ！？」

枷を外す？ 伝説武器を起こす？ 何を考えているのか理解できない。

さっきまで人の過去をほじくるようなことをさせておいて、『手ぶらで帰すのもあれだし』って……。

思い出すだけでも胃がすり切れそうになり、右腕の痛みもひどくな

りだす。

だが、肝心の彼女は「ふあ〜」と大きな欠伸をして眠そうに背伸びをしだした。

「うるさいわねー、質問は一回ずつにしてよ。それに私のことはそのうちわかるから気にしない」

そう言っただけは背を向ける。この何もない空間のどこに行くつもりかはわからないが、別に適当にぶらつくわけでも無いらしい。

……………いやいやいや！！

「ちょっと待てよ！！まだ話は終わってないだろッ！！」

「もう終わり。ユウキに干渉しすぎて眠たいのよ」

そう言っただけで一度欠伸をしながら歩いていく彼女を追おうとしたとき。

「ッ！！」

再び地面が消える感覚。足を踏み外した俺は、当然彼女の下へかけることもできずに穴に落ちていく。

「あ、そうそう！私の名前はユリ！覚えといてっ！」

ふと、そんな声が耳に入った。

ユリ……、やはり聞いたことが無い名前だ。そもそもこんな所にいるんだからいつどうやって会ったのかすらわからないんだ。

そして俺は再び暗闇の中へ落ちていった。

e p i s o d e 3 2 不 合 格 (後 書 き)

感想お待ちします!!

「ほんと馬鹿、ねっ」

「いつてえッ！……！」

第6高校保健室。

あれからライラは担架でここまで運ばれ、それぞれ試合を終えた紅葉、ニコラ、その応援をしていた桜、綾芽、和彦たちがそれを聞きつけ急いで駆けつけてきたところだ。

ベッドに横になっているライラの脇腹を少し叩いただけでこのリアクション。それを面白がってバシバシ叩きまくる紅葉を見ながら、和彦たちはこれから絶対に怪我はしまいと心に誓ったのだった。

「まったく、今度こんなひどい怪我したらただじゃおかないわよ？」

「き、肝に銘じます……」

ライラの怪我の具合は右腕と顔面に軽い打撲、肋骨にひびが数カ所といったところらしい。これぐらいの怪我なら体に魔力を流し続けて回復力を促進させてやれば一週間で治るだろう。しかし、それでは問題がある。

「それでライラさん、トーナメントはどうするんですか？その体じや運営側から棄権するように言われたんじゃない……」

この場の全員が抱いていた疑問を代弁するように綾芽がおずおずと尋ねる。するとライラは拗ねたようにそっぽを向く。

「…………いやだ。出る」

「あのねえ、姉さんからも言われたんでしょ？大人しくしてなさい」
「いやだっ。絶対出るっ」

こ、子供かッ。

いや、実際に高校一年生は充分子供なのだが、やはり年齢と言動がいささかあっていない。……………まあライラだし、別にいいのだろう。

実は紅葉たちがここに来たとき、一葉が何やらライラに説教をしていたのだ。と言ってもライラが出たいとゴネるのを必死に一葉が宥めていただけなのだが。

その後、仕事があると帰った一葉は、あろうことか妹の紅葉に説得を任せたのだ。無責任にも程がある。

だが、このままライラを試合に出させるわけも行かず、こうやって宥めてはゴネられている。

（姉さん、この借りは大きいよ。ふふふふ……）

大変めんどくさいことを押し付けてきた姉に内心でどのような仕返しをしようか勝手に悩み始めたころ、紅葉、ライラ、それと保健室の片隅でピクリとも動かないニコラのケータイの着信音が鳴り始めた。

おそらく大会運営のメールだろう。三人は同時にケータイを取り出し、送られてきたメールを確認する。

予想通り、メールの内容は次の試合についてだった。

開始時刻：15時30分

場所：第1高校、第1アリーナ

対戦相手：レイ・ケイフォード

「えっ……？」

簡素な文だった。しかし、それから与えられた驚愕は少なくなかった。

紅葉の反応を訝しく思った和彦が紅葉のケータイ画面を覗く。

「レイ……？……え、まさか学年一位っ！？」

一瞬理解できていなかったのか、自分で呟いたその言葉で我に返る和彦。しかし、その顔には驚愕の色が滲み出ていた。

レイ・ケイフォード。

出身はアメリカ。

一年前に第4高校へ転入。

去年の学年別トーナメント全優勝。

さらに極めつけは伝説武器保持者であること。

彼に関する情報はこれくらいのも物だ。しかし、彼がこの学園都市の高校一年生の中で最強であることは間違いなく事実である。二、三年生と合わせてもトップクラスの實力を誇っているほどだ。だが、彼が優等生かというと、決してそうではない。

「なんというか……戦闘狂ですよ、あの人……」

綾芽の的確すぎる発言に皆一様に苦笑いを浮かべる。

レイ・ケイフォード、彼は少し……いやかなり好戦的な人物なので

ある。

まあ、トーナメント後のサバイバルバトルで片っ端から片づけていくという馬鹿みたいなことをやり遂げた人物なので、嫌でも学園都市全域に彼の噂が行き届いている。

実際被害にあっている紅葉としては笑い事で済ませられないのだが、まあここで空気を壊したりという愚行を行うつもりも無かった。

「で、ライラとニコラさんは？」

会話に一区切りつけ、話題を二人に向ける。ニコラはいきなり話をふられたにも関わらず、相変わらず無表情を貫き通しているが、一方ライラの方かというと、こちらは苦笑いを浮かべていた。

「……………どうしたんですか？」

そんなライラの態度に訝しく思った桜が首を傾げて尋ねる。その可愛らしさを見て若干気圧されたライラはやや躊躇いながらも口を開いた。

「次の相手な、え、っと……………」

「何よ。らしくないわね」

ここまで歯切れが悪いのはライラにしては珍しい。催促する紅葉に観念したようにライラは白旗を振った。

「……………学年二位」

ボソっ、と呟いた一言だったが、紅葉たちが聞き逃すことはなかった。

そしてこの場に居るライラ以外の全員の考えが見事にシンクロした。

「棄権しなさい」

「棄権した方がいいんじゃない……」

「棄権すべきだよ」

「棄権してください」

「棄権した方がいいです」

「うおっ！？！？」

上から順に紅葉、桜、和彦、ニコラ、綾芽。完全に同調した5人の集中砲火を受け、いきなりだったライラは素っ頓狂な声を上げた。だが、そんなことは関係ない。

「学年二位って、去年のサバイバルの時、一番一位と交戦時間が長かったんでしょ？つまり実際の彼女の實力は一位に次ぐってことなの。そんな状態じゃ話にならないわ」

「んなもん、やってみなきゃ」

「やらなくてもわかりきってます」

紅葉のわかりやすい説明に反発したライラだったが、綾芽の容赦ない一言でバツサリ切り捨てられる。なんだか最近の彼女は遠慮がなくなっただけで、言いたいことを素直に言うようになったと言っただけで、とにかくさりとて言葉の中に棘を含んでいたりする。

そんな綾芽の断言に少しムツときたライラだったが、まあ普通に考えたらそうだな、と無理矢理納得することにした。

「だが出るもんは出るっ！これだけは譲らねーぞ！」

「ライラ……お願いだから棄権して。これ以上怪我が悪化するようなことになれば、後々後遺症が残ったりすることもあるんだよ？」

赤子を諭す親のように優しく囁きかける和彦。だが今反抗期なように、ライラは和彦の言葉にそっぽを向いてしまった。困ったように俯く和彦を見かねた紅葉は大きな溜め息を吐いた。

「……わかったわよ。出たいなら出なさい」
「……へ？」

いきなりの紅葉の言葉に間抜けな声を上げて振り返るライラ。表情もアホみたいに口を開けたまま呆けている。

「だから出ていいて言ったの。ただし、少しでもまずいと思ったら棄権するのよ？」

「あ、ああ！！」

紅葉の注意に力強く頷く。それを見ていた全員も「まあしょうがないか」と言った面持ちながらも顔には笑顔を浮かべている。

「よっしゃああああ！！燃えてきたぜえええええ！！」

「保健室では静かにしなさいっ！」

ライラの雄叫びにも似た歓喜の声を割と本気で頭を殴って黙らせる。だが、そんな自分の表情が僅かに微笑んでいることに紅葉は気がついていていた。

e p i s o d e 33 苦勞人（後書き）

よかったです感想も書いていただけると嬉しいです。

episode 34 笑顔の罵倒

時刻は午後二時。

保健室から次の対戦場所である第一高校へ向かうため、時空間転移^ゲ装置^トのところで全員と別れた紅葉は一人で歩いていた。

なぜ全員と別れたのかというと、単純にライラー一人だと棄権する見切りもつけずに大怪我を負う可能性もあるため、紅葉が和彦、桜、綾芽に「見張つてなさい」と言いつけておいたのだ。

また、ニコラが自分の試合場所へと向かったのは言うまでもない。

そんなわけで久し振りに一人でいることに少しの寂しさを感じながら思考に意識を没入させていた。

（レイ・ケイフォード、か……）

正直彼には良い印象を持っていない。

負けた者の僻みに聞こえるかもしれないが、自分の力を自分の欲求のために振り回す彼に激しい嫌悪感があるのだ。

振り回すと言っても私生活でも暴力的ということは無。無いのだが、トーナメントで対戦相手を完膚なきまでに叩きのめすその姿勢が気に食わない。

別に手加減しろとは言わない。だが相手をサンドバックか何かだと勘違いしていると思わせる何かが彼にはあるのだ。

そしてその矛先が自分へ向かうかと思った瞬間、背筋に寒気が走った。

（な、なに震えてるのよ、私はっ！！）

弱気になりかけた心を自覚し、反射的に首を振る。
そんな自分自身を叱咤するように紅葉は足を早めた。

「着いた……」

着いてしまった。

第11高校と同じような愛すべき特大のアリーナを見ながらつい、
本当について心の中で忌々しく思ってしまう。それに気づいた紅葉は
再び慌てて首を振った。

これから嫌なやつに会って、戦わなければならないと思うと、憂鬱
を通り越して頭が痛くなる。

いつそそれを理由に棄権しようかとも思ったが、応援してくれてい
る人に申し訳なさすぎる。そんなことしようものなら切腹ものだ。
別に誰かがそんなことを言うなんてことはないのだろうが、自分自
身に納得がいかない。

行き場のないこの気持ちを吐き出すように溜め息を吐く。

「えーいつ！！女は度胸っ！！」

落ち込むテンションを一喝を入れるように頬をピシヤリと叩く。
自分で思ったより強く叩いてしまったようで、少し頬がヒリヒリす
るが、逆にこっちの方が気合が入ると言うものだ。

そのまま色々な因縁を込めて紅葉は再び歩を進めていくのだった。

何故こうなった？

黒崎ライラは自問しながら首を傾げていた。

場所は第3高校の第一アリーナの控え室。そこで自分の試合時間まで待っているところだ。別にそれだけなら問題無い。問題は現在の状況だ。

現在、控え室のベンチに座っているライラの目前で和彦と綾芽が口論中。

もう一度言おう。何故こうなった？

時を遡ること約五分钟前。

「やっぱりライラさんを出場させるのは反対ですっ!!」

控え室に到着した頃、いきなり綾芽がそんなことを言い出した。詰め寄ってくる綾芽に「やっぱり」きたか、と多少げんなりし、どうあしらおうか考える。

正直、試合直前で誰かが反対し出すのは予測できていた。というのも、あの場はノリみたいな感じで賛成していたというのが大きい。少し時間を置いて考えれば、ライラの行動が間違っているということとは明らかなことなのだから。

だが、それでも綾芽のこの剣幕には多少たじろいってしまうというものだろう。事実、綾芽はライラの身をのけぞらせる程の至近距離まで詰め寄ってきているのだ。

「あ、綾芽さん?ここまできてそれはないんじゃない……」

「そんなこと関係ありませんッ!!」

ですよねー……。

微かな期待を込めたライラの抗議を、やっぱりと言うべきか即座に斬り伏せる綾芽。

どうしたものかと悩んでいると、突如間に割って入る人物が。

「綾芽さん、少し落ち着こうよ。本人の希望なんだし、止めてもらいは聞かないだろうし」

割って入った人物
された。

新原和彦のこの一言で、火蓋が切って落と

ということ、現在二人はもう手の着けられない程にヒートアップしていた。

和彦がここまで熱くなるとは予想でき無かったため、もう何が何やら。

置いて行かれた桜もどうしていいかわからずオロオロしている始末。

こんなときに紅葉が来たらなー、などと希望的観測を心の中で願ながら、ライラは目の前の現実から逃避することに。

「だいたいライラさんが学年二位に勝てる筈無いんですっ！！ポッコボコにされて這いつくばるぐらいなら保健室で寝ていた方がよっぽどいいですよっ！！」

「それは言い過ぎだよ綾芽さんっ！！いくらライラがポッコボコにされることがわかりきっているても、本人の前で言っただけで良いことと悪いことがあるっ！！」

おい和彦、お前の方が何気にダメージでかいぞ。

え、ちょっと待って。俺ってそんなに弱く見えるの？ボッコボコにされるのが目に見える程弱っちいの？

現実逃避したつもりが、自分に対する悪口だけはバッチリ聞こえてしまう。なんだか無性に泣きたくなってきた。

『試合15分前です。選手は場内へ入場してください』

そんな中、控え室に選手入場のアナウンスが響いた。

まだ何かごねている（どちらかと言うとごねているのはライラの方だが）綾芽の頭に手を置き、はにかむように笑みを作った。

「心配しなくてもさ、怪我せずに……は無理だろうからほどほどにしとくって」

「な？」と微笑みながら宥めると、どうやら綾芽もわかってくれたみたいで笑顔を浮かべ、そして、

「触らないでくださいっ。私を撫でていい男性はお父さんと悠希さんだけですっ」

……………あー、俺の心がガラガラと…………。

まるで汚いものがついたとでも言いたげに頭を払う綾芽を見ながら、何かが自分中で壊れていく音を聞いたような気がする。

また笑顔なのが辛い。笑顔の罵倒、俺の中で拳銃よりも強い攻撃方法として記録された。

「あ、その、えっと…………」

桜が何か励ますべきかと悩みながらも、何を言ったらいいかわからないような表情で苦笑いを浮かべる。
「というかこいつもそう思っているのでは無いだろうか？」

自分の周りの人間関係に若干の理不尽を感じながら、ライラはこう呟いた。

「……行ってくる」

「「「行つてらっしゃいっ！」「」「」

三人に見送られ、控え室の扉を開けた。

episode 35 同調する二人

アリーナの競技場へ上がった紅葉の耳に入ってきたのはアリーナ全体を揺るがす歓声だった。

多少それが耳障りに思っ反面、微かな胸の高鳴りを感じる。緊張しているのか、足がふるえている。

どうやら対戦相手はまだ来ていないようだ。目の前に広がる光景にそれらしい人物は写っていない。

それを確認し、少しほつとする。そんな自分に気づいた紅葉は先ほどしたように気合いを入れるため、頬を叩く。

(うー……やっぱり帰りたい……)

だが、いつもは強気でいる紅葉だが、彼女もか弱い女の子なのだ。弱気になることもある。

ただ、周りにそんなことを思わせない言動を見せているので、それを表に出すことができないでいるのだ。

そんなことを思い、溜め息を吐くと同時に、できればこのまま来ないで欲しいなーなどと願っていると、悲しいかな、そんな希望は抱いた瞬間に砕けてしまった。

「すみませーんっ。俺の試合ってここですかー？」

そんな緊張感の欠片もない声がアリーナに響いた。

紅葉から見て正面の入り口、そこには金髪の少年が立っていた。

そんな少年の態度に困ったような表情をする審判だったが、取りあえずと言うように言葉を投げかけた。

「えっと、名前は？」

「俺？第4高校一年のレイ・ケイフォードだけど？」

そんな力を抜いたような態度で名乗った少年 レイ・ケイフォードに、審判の方がたじろいでしまう。

というか目上にタメ口って……。

それからしばらく審判と話をしだしたレイに、会場全体が啞然とした雰囲気。

どこまで図太い人間なのだろう彼は。やることが派手というか何と
いうか……。

それからしばらくして、話を終えたようで、何故かレイはこちらへ向かってくる。少し離れたところで止まり、あるうことが紅葉を観察するようにジーツと見始めた。

彼の瞳の色は金色。右目には黒い眼帯を着けており、どこか凜々しい顔立ちをしていて、見つめられるこっちが気恥ずかしい。

「な、何よっ」

そんな自分を悟られたくなくて精一杯の虚勢を張るも、向こうはまったく聞こえないとばかりに反応すらなかった。

やがて、何かがひっかかっているような面もちになったレイは、唐

突に口を開いた。

「どこかであつたっけ？」

ぶちっ

「あははー、やだなー。去年対戦したじゃない」
「うーん、そうだっけ？俺弱い奴は覚えてないんだよね」

ぶちぶちっ

「ははは、じゃあ私が弱いつてこと？」
「多分な」

……………決めた。

こいつは絶対半殺しにしてやる。

さっきまでの弱気はどこえやら。どす黒いオーラを纏った紅葉は
今かと開始の合図を待った。

黒崎ライラは競技場中央で一人ぼーっと突っ立っていた。

「来ない……」

溜め息のために吐き出したこの言葉もこれで何回目だろうか。と言うのも、対戦相手が未だに姿を見せないのである。

まあ、待っていると言っても五分かそこいらの時間しか経っていないのだが、いかんせんアナウンスが鳴ってからずっとこんなところにいると時間が長く感じるというものだろう。

もう少しで試合五分前。これを過ぎると不戦敗ということで自動的にライラの勝利……なのだが。

「……まだか」

時間が経つにつれてライラが増していく。

折角綾芽たちを説得したのに。というかこんなところで不戦勝なんて格好悪すぎる。

まだか、まだなのか……。

そんな焦りを収めるように、ライラは目を瞑った。

「すいませ〜んっ！……！」

その声を聞いた瞬間、ぱつと顔を上げ、目をかつ開く。
ライラの正面、控え室から走ってくる少女の姿を確認し、内心安堵の溜め息を吐いた。

駆け寄ってきた少女はここまで走ってきたのか、息を切らしながら、ゆっくり口を開いた。

「すみま、せん……。その……迷って、しまいまして……ふう」

深呼吸を始めた彼女へ、啞然とした視線が向けられる。
この子って、もしかして……。

その先の単語を飲み込み、改めて少女を見る。

髪を肩ぐらいまで伸ばした茶髪、大きな瞳、何より目を引くのは二つの膨らみ。

（で、でかい……）

男の性か、どうしてもそちらに目が行ってしまうし、まうほどの大きさだった。

写真でしか見たこと無いが、ほぼ間違い無いだろう。

「えっと、あんたが学年二位の春日野遥さん？」

「ふえっ？ は、はいっ……！」

間抜けな声を出してしまったことが恥ずかしかったのだろうか、遥

は顔を赤らめて俯いてしまった。

そんな彼女の態度にどうしたものかと頭を掻くライラだったが、遥が思い出したように顔を上げたおかげでその心配もなくなった。

「そ、その、悠希さん大丈夫なんですか……？」
「へっ？」

はて、今悠希と言っただろうか？

「ごめん、もう一回言ってくれる？」
「悠希さんは大丈夫なんですか？……です」

うん、俺の耳がおかしくなったわけでも無いらしい。

じゃあ次の問題だ。どうしてこの子は悠希のことを知ってる？

そんなライラの考えを読みとったのか、遥は口を開いた。

「えつとですね。初日に悠希さんに道を尋ねられて、それから少しお喋りなんかを………」

ポツ、という効果音がついてきそうな勢いで赤面した彼女に、もの凄く嫌な予感を感じた。

あのヤロー、行く先々でモテやがってツ！！半殺しにしてやるツ。

十中八九ポツコボコにされるのがオチだとわかっていながらも心の中で誓うライラだった。

また、同じ時に紅葉も同じような決意をしたことを本人たちは知らない。

そこで、いつまで経っても質問に応えないのもどうかと思ったライラだったが、本当のことを言うべきか迷う。

まあ別に隠しても仕方無いことだし、いいか。

「……今はまだ寝てるよ。あいつは眠り姫か、ってな」
「そう、ですか……」

それを聞いた瞬間、遙の顔に影が差す。

やっぱりここは嘘についてでも無事だと言った方が良かったんじゃないだろうか？

再び頭を掻きながら罪悪感がこみ上げてくる。

そんな空気を和らげるために、ライラは大袈裟なほどに明るい声で言い放った。

「大丈夫だってっ！きっとトーナメントがめんどくさくて寝てるだけなんだよっ！起きたらなんか奢らせねーとなっ！」

「ふふふ、そうですね」

そのかいあって、場の雰囲気が少しだけ和んだ気がする。まあこれから戦うわけだから場違いと言えば場違いなのだが。

その後、悠希が寝ている病室（保健室）を教えたところで試合開始前のサイレンが鳴った。

「これより第十試合、黒崎ライラvs春日野遙の試合を始める」

観客の声が引き始める。僅かに緊張しながらもライラと遙は同時にこう呟いた。

「「ジエネレート」」

ライラの手に現れたのは大剣、対する遥の武器はブレスレット魔法特価型の補助武装だ。

それを確認したライラは相手をジッと観察しながら開始の合図を待った。

「始めッ」

本来ならば試合の開始を告げるその言葉と同時に、事は起こった。

episode 36 始まりの福音

ドガアアアッ！！

試合開始の合図と同時に轟音がアリーナに響く。反射的に音源へと振り向くと、紅葉から見て後ろ、つまり校舎の方角から煙が立ち上っていた。

しかし、観客たちはそれに驚愕を受けるでもなく、ただ何が起こったのか理解してないようにざわめき始める。

何か嫌な事が起こった。

自分の直感が警笛を鳴らす。このままだと非常にまずい。

そう思ったと同時にアリーナのアナウンスが鳴った。

『全校生徒に通達ッ！！現在何者かが同時多発的に学園都市内で破壊活動を行使中ッ！！教師陣は事態の収集に、生徒は指定の避難所に移動しなさいッ！！繰り返します』

アリーナにいる人間の中で、この放送を瞬時に理解できた者はどれくらいいただろうか。

『尚、これは訓練ではないッ』

最後にそう言い放って放送が途切れた。

やがて、その言葉の意味を理解していくにつれ、呆然は驚愕へ、驚愕は恐怖へと変わっていく。

誰が口火を切ったのだろう、いや、ひょっとしたら全員だったのかもしれない。会場内から悲鳴が上がり、観客がパニックを起こし出した。

我先にと避難所へ逃げようとし出す生徒たち。紅葉の心はその光景のお陰で恐怖に満ち溢れていた。

こんなときにユウがいれば……。

未だに目を覚まさない幼なじみの顔を浮かべながら、あるはずの無い願いが頭を過ぎった。

待て。

ユウは今何処にいる？保険室だろうか？それも今は意識が無い。

そんな時に襲われたらどうなる？

そう思い至った瞬間、頭の中が真っ白になる。思考はフリーズし、体が勝手に震えだした。

今のユウが襲われる、それは即ち 死。

「ユウッ!」

その単語が浮かび上がる前には、もう紅葉は走り出していた。頭の中には既に自分が死ぬことへの恐怖が抜け落ちている。ただ、悠希が殺されることだけはなんとしても防がなければならぬ。

足に力を込め、アリーナを出ようと控え室に走っていく途中、後ろから腕を掴まれた。

反射的に補助武装を呼び出し振り向く。するとそこには学年一位、レイ・ケイフォードの姿があった。

「なに？今急いでるんだけど」

少し苛立たしげなそう言い放つが、レイは気にした素振りも見せず、寧ろ飄々としながら口を開いた。

「あんたどこ行くの？避難所行くわけじゃないんだろ？」
「……………」

図星をつかれて口ごもってしまう。だが、何も言っていないにも関わらず、向こうはそれを肯定と受け取ったらしく、うんうん頷くと同時に不敵な笑みを浮かべた。

「ふ〜ん……。面白そうだから俺もついてく」
「はっ!？」

思わぬ提案に間抜けな声を出してしまった紅葉だが、そんなことから気にならない程彼の言葉は衝撃的だった。

「え、なんでっ!？ていうかどうしてっ!？」
「『なんで』と『どうして』って意味同じじゃね？まあいいけど」

指摘されて初めて気がついた。どうやらよっぽど自分は動揺しているらしいことに気づいていたたまれない気持ちになった。だが、そんな紅葉の態度など無視してレイは続ける。

「別に。ただこのまま逃げるのもあれだし、エネルギー有り余ってるし、暴れ回れる理由が欲しいんだよね」

こ、こいつ……。

どうやらレイ・ケイフォードという人物は自分が思った以上に戦闘狂らしい。というか狂ってると言っても間違いいではない気がする。飄々とした態度を崩さない彼の顔をもう一度見て、大きな溜め息を吐いた。

「……まあ、こっちとしてはあなたに来てもらえると凄く助かるんだけど……」

「よしっ。じゃあ決まりな」

紅葉がそう言うと、まるでスキップでも仕出しそうな雰囲気纏ってレイが走っていく。

その背中を多少憂鬱になりながら追いかけていくのだった。

「なんだってんだよッ!!」

黒崎ライラは目の前で起こった光景を未だに信じられずにいた。ライラの全方位を埋め尽くすように煙が立ち上り、所々から火災が生じているのか、僅かな赤色を灯している。

アリーナ、それも観客席が爆破された。

魔法の発動による魔力の流れは感じられなかった。とすると実際に爆薬を使ったのだろう。問題は場所だ。

観客席、そこには衝撃減少の結界が張られていない。もともと試合のために使われる結界なために、観客席までその範囲を広げる必要は無いのだ。だが、今回はそれが裏目に出た。

爆破に巻き込まれたものは、衝撃減少の効果が無いまま、爆炎に吹き飛ばされ、ここからでは確認できないが重傷、最悪死亡している可能性が高い。

だが、いくらライラでもその言葉の本当の意味で理解することなどできていない。

いくら対人同士の模擬戦で優秀な成績を取った者でも、所詮は一般人。“死”という言葉を実感的に捉えられることなど、生まれてから一度も“死”と関わったことの無いライラには無理な話だ。

被害の様子を見ると、爆破されたのは観客席だけ。となると控え室にいる和彦たちは無事か。

そのことに僅かながらに安堵しかけるが、周りの光景がそうはさせてくれない。

一旦控え室に戻って和彦たちと合流して生存者を探したほうがいい。

そう思ったライラは武器を構えたまま全速力で駆け出そうとする。だが、それよりも状況が動く方が早かった。

突如、観客席を覆っていた爆煙の中から何かが飛び出した。本来ならそれはアリーナの結界に阻まれて弾き返される。

はずだった。

飛び出した“何か”は、結界が作動する地点を悠々と通過し、競技場内へと降り立った。その数、約20。

降り立ったのは全て男たちだった。別に何か統率された服を着ているわけでも無く、それだけみるならば一般人に見えなくもない。

だがここは何処だ？

学園都市スヒアは最低限の大人しかない。今日はトーナメントで一般人が入ることを許可されているとはいえ、それも生徒の親族、もしくは各国の官僚が見に来ているというぐらいのものだ。

では何故目の前のこいつらは補助武装を展開したままこちらへ殺気を放っているのか。

頭の中では“逃げる”という単語が高速で流れていく。明らかにこいつらはヤバイ。

しかし、ここでライラが逃げればまだ現実を理解できていない遥が襲われるのは明白。腹を括るしかない。

別に全員倒す必要は無い。こいつらが中に入ってきた時点で衝撃減少の結界は何らかの手段によって解除されていると考えた方がいいだろう。

ならば攻撃を受けないようにしなければならない。一発でもくらえば死にかねないのだから。

それでも時間を稼がなければならない。そうすれば事態を把握した和彦たちが救援を呼んできてくれるはずだ。

仲間を信じ、迷いを振り払うかのように、ライラは大剣をゆっくり構えた。

紅葉がアリーナを出た頃、懷にしまっておいたケータイが唐突に鳴り始めた。

走りながら開いたケータイのディスプレイに写し出されていたのは『波風桜』の文字。

隣を走るレイになんとなく悪い気もしたが、今は非常時。向こうで何かあったのかもしれないし、出ないわけにはいかない。そして苦しくもその予想が的中する。

「もしもし?」

『お、お姉ちゃん!! 大変だよ!! 試合が始まったらドカアアンって、もうドカアアンって!!』

「落ち着いて桜っ!! 全然意味分らない」

聞こえてきたのは愛する妹の狼狽しきった声。なんとか落ち着かせようとするが、全く効果が無い。

『もしもし波風さん? 和彦だけど』

突如ケータイから聞こえてくる声が変わった。この中性的な声音、間違いなく和彦だ。

「和彦くん? 何があったの?」

『……ライラの試合開始と同時に観客席が爆破された』

「なッ
!!」

少しの間を置いて発せられた和彦の返答に絶句する。

爆破された？それも衝撃減少の結界の範囲外を？
頭に嫌な想像が過ぎる。

『僕たちは控え室に居たから何ともなかったんだけど、まだライラが帰ってこないんだ……。モニターも映らなくなったし、何かあったのかも……。』

足が止まる。そこは丁度ゲートの手前だった。

隣ではレイが怪訝な顔でこちらを見ている。だが、今の彼女にはそれを気にしている余裕が無かった。

彼女は今、究極の選択を迫られている。悠希を助けに向かうか、ライラの加勢に入るか。この二つが脳内でぐるぐる回り、思考を阻害する。

（ユウはまだ意識が……でもライラの方も……）

思わず唇を噛み締める。口内に血の味が充満するが、彼女の意識には入らない。

「わかった……」

ただ一言そう返し、通話を切る。それと同時に電話帳からある人物の番号を呼び出した。

『もしもし？』

「姉さん、お願いがあるの」

電話越しから聞こえてきたのは一葉の声。そして紅葉は決断をした
答えを口に出す。

「ユウをお願い」

紅葉の選択、それはライラへの加勢だった。一葉ならば悠希の居る
場所を知っている。ならば、一葉に悠希のことを頼んで自分がライ
ラの所へ向かえばいい。

「頼める？」

確認のための問い。だが、返ってきたのは抑えたような笑い声だっ
た。

「な、何よっ!？」

『ふふふ、ごめんごめん。あんまり真剣に言うもんだから何かと思
えば……』

再び笑い出す姉を怒るでもなく、紅葉はただ困惑した。

『大丈夫よ。最初から向かうつもりだったんだから。もうすぐ着く
から安心して』

返ってきたのは拍子抜けするような、しかしもっとも嬉しい答えだ
った。

考えていなかった。姉が悠希の下へ向かうなんてこれっぽっちも考
えていなかったのだ。

一葉だって悠希のことを弟のように思っているのだから当然の行動。
それをわかっていなかった自分は余程周りが見えていなかったのだ

ろっ。

心の中で謝罪を述べ、ライラの件は水に流すことに決め、最後にこ
う付け加える。

「……ありがとう」

『ふふふ、どういたしまして』

照れ臭くなってそのまま通話を切り、隣に立つレイへと向き直る。

「予定変更よ。第三高校に向かうわ」

「なんかあったのか？」

首を傾げるレイへ答えず、紅葉はゲートを指差した。

「話に行きながらしましょう」

「ん、りょーかい」

意外と切り替えは早い方なのか、それ以上は聞かずにゲートに入る
レイ。

「転移、第三高校」

紅葉がそう言うと同時に、二人は光に包まれた。

「なんだってんだよてめえらッ!!」

迫り来る刀使いの一撃を受け止めながら、ライラは毒吐いた。

「ッ!!」

突如視界の端に何かが映る。反射的に後ろへ飛ぶと、真横から火の矢が飛んできた。思わず舌打ちしてしまう。

この男たちの個々の技量はかなり高いものだ。しかも統率された連携でこちらの動きを制限してくるため、このままでは後五分保つかすら怪しい。

遙はというと、今はライラの約十メートル後ろで状況の整理が追い付かず、混乱しているため加勢は期待しない方がいい。

再び刀使いの特攻してくるのが見え、ライラは身構えた。

ガキイン!!

金属同士がぶつかり合う特有の澄んだ音を上げながら、鐔迫り合いを繰り広げる。

だが、そんなライラの脇を一人の男が抜けていった。

(こいつは罔ッ!?)

気づいたときにはもう遅かった。

追いかけようとするも、刀使いの後ろにいる術師たちに牽制され、動くことができない。その男たちの顔には嘲笑が張り付いていた。

「逃げるッ!!」

反射的に叫ぶライラの怒声も虚しく、男は後ろにいる遥の下へ駆けていく。普段の 学年二位の遥ならかわすこともできるだろう。だが、あんな精神状態で魔法が発動できるとは到底思えない。

やばいやばいやばい!!

頭の中では警笛が鳴り響いている。そんなライラの思いとは裏腹に、男はどんどん遥へと接近していく。しかし、遥の方は近付いてくる男に怯えきつており、逃げ出すことすら頭に無い様子だ。

男の握った斧槍が鈍く光り、遥の胴体を切り裂くかと思うと、ライラの覚悟は決まった。

意を決し、捨て身の覚悟で助けに向かおうと思った矢先に変化が起こった。

「ガハッ!?!」

後ろから奇声上がる。何が起こったのか確認出来ずに困惑するライラだったが、次に発せられた声はとても聞き慣れた物だった。

「ライラ!! 加勢に来たよっ!!」

近寄ってくる足跡は三人分。それは間違いなく和彦、綾芽、桜の物だ。

だとすると、さっきの奇声は三人の内の誰かが放った魔法が男の意

識を刈り取った際に発せられた声か。

遙が無事なことで、三人が加勢に加わったことに心から安堵し、目の前の男に集中する。

男たちも和彦たちに警戒しつつ、まずライラから倒すつもりのもので、先程よりも鋭い殺気を放ち続けている。

正直言えば逃げ出したい。だが、後ろには和彦がいる。彼らが来たという事は救援を呼んでくれたと考えていい。それが励みになり、同時に勇気へと繋がる。

ならば、なんとかしてでも時間を稼ぐしかない。

ここにいる戦力ではこいつらには勝てないだろう。だから援軍が来るまで耐えきってやる。

「あんたらさ、どういう理由でここを狙ったのか知らねーけど」

唐突に放たれたライラの言葉に男たちは睨みつけるような視線を送ってくる。

けどそんなもん知るか。

深く息を吸い、空気を吐き出すと共に言葉も吐き出す。

「……ここは俺たちの第二のホームだッ！！土足で荒らしとしてタダで済むと思うなよッ！！」

今の彼にできる精一杯の虚勢。だが、込められた思いは本物だ。

明日を掴み取るために。

みんなで笑い会ったために。

そんなありつたけの思いと魔力を大剣に叩き込み、構える男たちへと突っ込んでいった。

episode 37 少女の決断、少年の勇気（後書き）

諸事情により、次回は少し更新が遅れるかもしれません。
すみません……。

episode 38 学年一位(前書き)

遅れてすみません。

ゲートを使って、第三高校へと移動した紅葉たちは、第一アリーナへと向かうべく走っていた。

身体強化の魔法で上昇した運動神経により、格段に普段のスピードより速くなっているはずなのだが、それでもアリーナまでへの道が長いと感じてしまう。

焦っているな。

自分でもそう思うがどうしようもない。

隣で追走するレイもそんな紅葉の考えを読み取ったのか、黙ったまま走り続けている。

（少し、ユウに似てるかも……）

少しそう思った。

別に顔が似ているとかそういう訳ではない。なんというか、どこことなく放つ雰囲気似ている。

そこで、盗み見るように見ていたことに気づいた紅葉は、そつと視線を逸らした。

「 なっ!?!? 」

そのときだ。レイが紅葉の肩から首に片腕を回して膝を支えて抱きかかえるという、いわゆるお姫様だっこというものをしてきたのだ。

いきなりだったことと、恥ずかしさの余りに気が動転していると、突如レイが飛び上がった。

ズドオオオン！！

……………へ？

元居た場所が唐突に爆発した。間抜けな表情で呆然としてみると、近くの木に着地したレイがこちらを窺うように見下ろしてきた。

「怪我不いか？」

レイははっきり言つて美男子と呼ぶべき分類だ。そんな彼にこんな至近距離で囁かれたせいかな、ほんのり顔が熱い。

「早く降りてくれ。重いし、戦えない」

カチン。

「失礼ね！！重くないわよっ！！」

「そうか？多分体重は」

「言わないでっ……！！！！！！」

紅葉の必死の抗議も、思わぬ反撃で口をつぐむ羽目になった。

私のトキメキを返せっ！！

先程とは別の意味で赤くなった顔のままレイの腕から降りて気配を探る。

「……………１７人、ねえ……………」

気配はすぐに掴まった。だが、予想したよりも明らかに数が多い。敵はかなり大規模な勢力を持っていると考えた方がいいだろう。下手をすれば国単位の軍事力を有しているのかもしれない。

思っていたよりも自分たちが置かれている立場が芳しくないことを確認させられ、思わず舌打ちをした。

「どうする？この数じゃ作戦立てて動かないと」
「よ、っと」

紅葉が言い終える前に、あろうことかレイは木から飛び降りた。

「ちょ、ちよっと!!」
「来るな」

慌てて紅葉も続こうとすると、レイが言葉だけで制す。背中を向けていて表情はわからないが、その力強い声だけははつきり辺り響き渡っていた。

「こいつらは……」

レイの体から魔力が漏れ出す。とてつもなく濃い魔力に大気が呼応するかのように彼の周りを渦巻き始めた。

「俺の獲物だツ!!」

言い終えるが早いか、レイは走り出していた。しかし、その手に武器は無い。

無茶なッ！！

内心でそう叫んだ紅葉は自らの補助武装を呼び出そうと、右手を開く。

が、それは次の光景を見た瞬間には杞憂だと悟った。いや、悟られなかった。

「え……？」

呆然とする紅葉。

なぜなら視界に映っている筈のレイの姿が掻き消えたのだ。慌てて辺りを見回すも、彼の姿はどこにも映らない。

「グハッ!？」

唐突に男の鈍い声が挙がる。反射的に視線そちらに向けると、一人の男が呻き声を挙げながら倒れていく姿が目に入った。だが、やはりそこにもレイの姿は無い。

何故？

頭に疑問符を浮かべるも、答えなど初めから出るはずもない。

そう思った瞬間には再び別の男の呻き声が響いてきた。相変わらずその場には他の人影すら映らない。

だが、それと同時に一つだけわかったことがある。

良く目を凝らすと、倒れた男の近くに、小さいがタイヤのスリップ痕のようなものがあった。

つまり、何かがあそこで急停車を行ったということ。その何かとはやはり、

「あいつしかいないわよね……」

先程まで隣に居たレイの顔が頭に浮かぶ。この所業を彼がやったとするならば、彼は顔に獰猛な獣のような笑みを貼り付けていることだろう。

実際、どこからともなくレイの歓喜の声が響いてきたのだから。

「ハッハア！！ジェネレートオオ！！」

レイの雄叫びと共にどこからともなく辺りを光が覆った。だが、それも一瞬。すぐに治まった光の中心と思われる場所に彼は立っていた。

先程まで見えなかった彼の姿は、今ではあまりに目に留まる。目立つと言った方がいいだろうか。

何も無かったはずの手には巨大な それこそ彼の身長と同じぐらいの大きさではないのかと思われる大剣があった。それを片手で悠然と担ぎ、まるで軽いとも言いたげな目で敵を見据えるレイ。

「クレイモア……」

赤黒い刀身を光らせるその禍々しさに、思わず紅葉はそう呟く。

レイ・ケイフォードが保持する伝説武器、それが“クレイモア”と呼ばれる大剣。赤黒く染まったその剣は、見たものを吸い込んでしまうような深い色をしていた。

レイがこの学園都市の高等部一年の中で最強であることは言うまでもない。

だが、周りの生徒の間では『武器が良いから成り上がっただけ』と陰口を叩かれることもある。

しかし、それは明らかな間違いだ。

伝説武器の選別基準は、“力があること”が最低条件と言っても過言ではない。

世間一般で知られている保持者への譲渡方法が違うとはいえ、これは変わることはないのだ。

現に、先程素手で二人倒したところなのだ。その間、紅葉には全く見えなかった。ひよっとすると彼は武器を使わずとも学年一位になれるのではないだろうか。

何が言いたいのかというと、この男たちでは武器を持ったレイには役不足だと言うことだ。

「うおらああああ!!」

雄叫びを挙げながら振り上げる大剣から膨大な魔力が発せられる。

その量、質に紅葉の身体が竦む。

そんな彼女のことなど気にも止めず、レイは徐に大剣を地面に振り下ろす。

その瞬間、込められた膨大な魔力が地面に流れ込む。と、同時に地面が揺れ始めた。

【土属性魔法：土塊流丸】

それは奇しくも和彦が悠希に対して使ったのと同じ魔法。だが、問題はその規模だ。

和彦の場合、対象から半径五メートルの範囲の土が捲れるように悠希へ押し寄せた。しかし、レイの放った魔法はそれを軽く凌駕していた。

「う、そ……」

驚愕に目を見開く。

紅葉が見たのはちょっとした山だった。いや、それぐらいの土の塊だった。それが押し寄せてくるのだ。

男たちから息を飲む音が聞こえる。恐らくこの中で誰もこんな事態が起こるとは夢にも思わなかっただろう。

だが、これは現実なのだ。レイ・ケイフォードという人間がいたからこんなことになったのだ。

土塊は徐々に男たちの逃げ場を塞ぐように押し寄せる。

男たちは最後の抵抗とばかりに土塊に攻撃を仕掛ける。が、やはりそんなものではびくともしない。

そして男たちに覆い被さるように押し寄せ、そのまま轟音と共に押し潰した。

未だに響き続ける轟音が男たちの断末魔の声のように感じ、紅葉は身震いしたのだった。

episode 38 学年一位(後書き)

よろしければ感想もよろしくお願いします。

しばらくして轟音が治まると、レイは大剣を担いでこちらに向かってきた。その顔に罪悪感を感じられない。

人を殺したことは無いが、それでもこんな風に飄々とした態度をとるレイに、紅葉は微かな戦慄を覚えた。

だが顔には浮かべない。

そんなことを思うのは自分が子供だからだ。

レイはただこの都市を守るためのことをやっただけなのだから。

無理矢理自分を納得させ、近寄ってくるレイに声をかけた。

「お疲れ様。まさか本当に一人でやっちゃうとはね」

「そうか？多分あんたでもできるんじゃないか？」

何を言っているのだろっ、コイツは……。

キョトンとしながらそう言うレイに紅葉は呆れて溜め息を吐く。

「それにしても……」

「ん？」

そう区切りをつけ、問い返すように首を傾げるレイに対して応えるでもなく、周りを見回す。

それにつられた彼も、周りに広がる光景を見て「ああ」と納得顔を浮かべた。

「……こじどうしよう」

改めて周りの光景を見ると、なんというか凄いことになっていた。コンクリートは捲れ、木は薙ぎ倒され、辺りは土で塗り固められている。

あれだけ大きな魔法を使ったのだ。周りに被害が及ばない方が可笑しい。

幸い、校舎とは少し距離があるため校舎そのものに被害は無いと思うのだが、この近辺全ての修繕費は馬鹿にならない額だろう。

そんなことを考えていると、今更のように冷や汗が出てきた。

後で請求書とか届かないよね？

そんな紅葉の心情を知ってか知らずか、レイは「大丈夫だ」と答えた。

「あいつらをこのまま放つといたらもつと被害でてただろうし、どのみち正当防衛だ」

めんどくさそうにそう告げるレイに、「それもそうか」と納得する。少し時間を食ったが、早くライラの下へ向かうためにアーリーナの方角へ向き直り、足を進めようとした。

パキッ

そんなときだ。

不意に後ろから何かがひび割れるような音が鳴った。

訝しく思って振り向くが、そこにはレイが作り上げた土山しか無い。

パキパキッ

再び音が聞こえる。

今度ははつきりとした音だ。

ここにきてようやくわかった。

音源はこの土山なのだと。

ボコッ

最後にそう聞こえた瞬間、何かが土山から飛び出した。

「あん？」

レイが怪訝そうな顔で見守る。それはそうだろう。紅葉もあそこから誰かが出てくるなど思いもよらなかったのだから。

飛び出してきた人物はそのまま土山に着地し、確認するように辺りを見回す。

こちらに気がついた男は、一瞬ニヤリと口元を歪めた。

「いやー、まさかこんな所でレア持ちに出くわすとはね。予想外だったよ」

男はいきなりフレンドリーな声音でそんなことを言い出し、あろうことが拍手までもしだした。

そんな男を不快そうな目で睨みつけるレイは唐突に口を開いた。

「あんたもレア持ちだろ？武器はその槍か」

事もなさげにそう言うレイに対して紅葉は驚愕に目を見開く。
再び男を見る。白に近い黄色の髪、体系は細めの長身だが、不思議と痩せているとは思えない。顔には飄々とした笑みを浮かべ、レイの言うとおり、男の手には銀色の槍が握られていた。
男はより一層笑みを深める。

「よくわかったね。そうさ、これが僕の伝説武器“神槍ゲイ・ボールグ”」

まるで親しい人間とでも話しているように飄々としている男に、隣で不機嫌オーラを放ちまくるレイ。だが、男は気にした風でもなく、寧ろ楽しそうに言葉を続ける。

「いやー、それにしても若いのに凄いね。よかったらうちに来ない？それなりの地位は保証するよ？」

何故か勧誘をし出した男に、紅葉は意表を突かれたように惚ける。しかし、レイは違ったようで、鼻を鳴らして目を鋭くした。

「はっ。ロシアの軍人さんが何言ってたんだよ」
「え？」

ロシア？

「レイ……今なんて……？」
「こいつらはロシアの軍人、だ」

繰り返すレイに動揺の響きは無い。

「ウソで」

「こんなん嘘ついてどうなるんだ？」

言葉を遮り断言する。

その瞬間、記憶の底から恐怖が沸き起こってきた。

足が震え、歯がガタガタ鳴り、頭の中が恐怖という感情で埋め尽くされる。

「おい！どうした！？」

真横で聞こえる筈のレイの声がやけに遠く感じる。

このとき思った、

ああ、まだ五年前のことが怖いのだ、と。

レイ・ケイフォードは困惑していた。

普段の彼を知っている人間ならばこんな光景に出会ったと、目を見開き、「あ、夢か」などと言ってその場を後にするだろう。だが実際に今の彼は困惑していた。

理由は彼の隣にあった。

何故かいきなり震え初め、顔を真っ青ににして怯えきっている人物、波風紅葉がまさしくそれだ。

別に彼女のことを知っていた訳ではない（実際にはレイが覚えてないだけなのだが）。それでもこの状況にはさすがのレイでも動揺してしまう。そして一つの疑問が頭を過ぎる。

彼女は何に怯えているのか、と。

そこまで考えると、何か嫌な気配を感じた。勘に任せ、紅葉を庇うように右手に持つ“クレイモア”を構える。

と、同時に先ほどからウザイと思っていた男が目の前に現れた。薙払う槍の軌道に合わせ、大剣で受け止める。

「僕がいるのに余所見してちゃだめじゃないか？」

うざったらしい表情でうざったらしい事を言い出すこいつにつくづく腹が立つ。

眼前に迫る男の顔はこの状況でも笑みを崩すことは無く、寧ろ先ほどより笑みが深くなっている気がする。それがまた気に食わない。

学校では問題を起こしたことのないレイだが、別に気が長い訳ではないのだ。というより短気と言っている。

周りの連中の陰口なんかでもイラついたりするし、教師に対してもム力ついたりする。それでも問題を起こさないのは。

考えている間に相手の攻撃が激しさを増し始めた。槍という武器の特性上、近接戦では薙払い、または突きしかできない筈なのだが、それでも男の槍捌きは卓越したものだった。

久しぶりに満足がいく程の相手。

レイの中にくすぶる欲求が湧き上がる。

この男で日頃の鬱憤を晴らしたい。

しかし、それはできない。

レイの背後では紅葉が未だに怯えて動けないでいる。彼女を庇いながらでは全力を出せない。

彼女は何に怖がっている？

再び心の中で問う。

俺が人を殺したからか？

いや、その時は少し動揺していただけの筈だ。
ではあの男と知り合いなのか？

いや、そうでは無いだろう。そもそもそんな反応は無かった。
ならば一体……………。

自問自答。

しかし、考えても答えは出ない。ただ振るわれ続ける槍を受け止め、弾き、再び受け止めるを繰り返す。

心は強敵との交錯で歓喜の声を上げるが、状況が状況だけにそんな余裕も無い。

「おいッ！！いい加減起きろッ！！」

イライラが溜まりだしたレイは後ろにいる紅葉へと怒鳴りつける。

しかし、ビクツ、と体を震わせた動きだけが伝わってくるだけで、相変わらず他に反応が無い。

時間と共に増していく焦り。それを自覚しながら目の前の男を睨みつける。

だが、肝心のレイは冷や汗が背中に流し、表情にも険しさが滲み出しているのが自分でもわかる。

平和ボケしていた。

身体を走る魔力も、大剣を振るう腕も、何もかもが鈍っている。いや、実際には変わらないのかもしれない。しかし、長いこと実戦

戦場に足を踏み入れていないために動きにキレがない。

実のところ学校の実戦ゴッコなどで満足していたのかもしれない。そう思わせるほど今の自分の動きを苛立たしく思った。

幸いなのは土山に呑まれた男たちが他には出てこないということろか。

死んだか、それでも機会を図っているのかだが、どちらにせよ今の状況で加勢に入られるとレイだけでは紅葉を守りきれる保証は無い。

（せめてコイツがどこかへ行けば……）

舌打ちをしながらその考えを否定する。実際に紅葉が動こうとしないのだから希望的観測に過ぎない。

憎々しげに男を睨みつける。だが、目の前の男は余計に笑みを深めるだけだ。

その瞳にはレイと同じ、獲物を見定めたような強い眼光を宿していた。

episode 40 信じられない光景

「ハア……ハア………くそつたれがッ」

己を叱咤するように、ライラは大剣を杖代わりにして毒吐いた。

あれからどれだけ時間が経っただろうか。先程から男たちを同時に相手しているおかげで、体力も魔力も底をつきかけている。

不意に頬を伝う血に気がついた。それと同時に思い出したように身体が痛みを訴えだした。

翌々考えてみればこの人数差では怪我をしない方が可笑しい。というより未だに大きな怪我を負っていないことの方が奇跡であろう。

周りに意識を傾ける。

近くでは桜が剣使いの男と1対1で渡り合っている。いや、姉譲りの刀技を持つてもやはり苦戦中のようなだ。

和彦と綾芽は後方支援に撤している。危なくなったら敵の注意をひいてくれるお陰で何度助かったことか。

だが、遥はというと、やはりまだ立ち直っていないようで、和彦たちの後ろで震えている。

そのためライラは一人で殆どの敵と戦っているという状況に陥っていた。だが、それももう保つか怪しい。

（まだか、まだ来ないのかッ）

未だに学園からの救援は来ない。学園都市全域でこの男たちが暴れ

ているのであれば到着が遅れるのは当たり前である。事実そうなのであろう。

だが、それとともに身体を這う痛みによって焦燥感が積もるばかりだ。

援軍が来ない以上、今のライラには時間を稼ぐしか出来ないのだが、もう余力も殆ど残っていない状況では援軍を祈るしかない。

奥歯を噛み締めていると、目の前の男が動いた。

手に持つ斧^{ハルバート}槍を振りかぶり、こちらへ殺意を向けながら迫ってくる。それを大剣で払い、切り返して一閃。

だが、大剣は男の脇を掠めただけで、致命傷とまではいかなかった。ただ、男の血が大剣に付着して、鈍く光っている。

これは夢なのだろうか？

未だに自分が殺し合いの真っ只中に居ることが理解できない。だが、大剣を染める赤黒い液体も、全身から湧き上がる痛みも、掠ったとはいえ自分が切った感触も全てが現実だと訴えかける。それがまた不気味で、今日で何度目かの疑問を浮かべてしまう。

このまま目を瞑れば元の平穏な日常に戻るのではないか？

起きたらこんな夢も忘れて、学校で悠希とバカやって、紅葉に怒られて、みんなで笑って。

そんな幻想に捕らわれ、先程までの決意が揺らぐ。

そんな精神状態のせいかな、ライラは脇をすり抜けていく男に注意が回らなかった。

「和彦！！綾芽さん！！」

叫ぶも虚しく、男はどんどん和彦たちに肉迫してくる。

前衛であるライラより、後衛である和彦たちの方を先に片付けた方がいいと判断したのだろう。そんな推測を頭が冷静に打ち出してくる。

事実、後衛の和彦たちでは接近戦は不向きだ。接近されたが最後、武器が体に食い込むことは目に見えてくる。

そんな光景が目に見え、身体の中から血の気が失せるような感覚に見まわれた。

これではさっきの遥の時と同じではないか。

変な幻想を抱いた拳げ句、注意が散漫になり、仲間に危険が及んでいる。

何が“タダで済むと思うな”だ。アホらしいにも程がある。

自分はこんなにも愚かで脆弱なのに、何が仲間を守るだ。自分が仲間に危険を招いているというのに。

「アホか俺は！！」

叫ぶ前にはもう動いていた。

身体を反転。全速力で男を追いかける。

膨れ上がった殺意と魔力を背中感じて尚、足は止まろうとしなかった。

「ライラ先輩、後ろッ！！」

近くで桜が注意を促してくる。しかし、ライラはそれも聞かずにひたすら足だけを動かした。そのお陰で直ぐに背中に激痛が走った。

だが、苦悶の叫びもあげず、前に吹っ飛ばされながら走り続ける。そんなライラの姿に男たちは動揺した。それが背中に伝わってきたが、それでも必死に走り続けた。

眼前では和彦たちが斧槍使いの男に魔法を仕掛けているが、するりとかわされるか弾かれていて、時間稼ぎにもなっていない。

それを追いかけながら、再び背中に焼け付くような痛みが走った。歯を食いしばり、前のめりに倒れかけたがなんとか持ちこたえ、脚に力を入れる。

「くはッ!？」

そんなときだ。

急に何発もの魔弾が背中に浴びせかかってきた。

視界が一瞬白く染まったが、なんとか意識を繋ぎとめ、歯を食いしばる。

しかし、それと同時に足がもつれ、地面に突っ伏した。

「くっ……………!!」

咄嗟に起き上がろうとしたが、背中に強烈な痛みが走り、再び地面に倒れ込む。痛みの原因を見つけようと背中に目をやると気を失いそうになった。

皮膚はただれ、焦げたような匂いを放ちながら背中全体を覆うように出来た火傷があった。

一体何発貰ったのだろうか。もはやそれすらもわからない。しかもご丁寧に炎属性の魔法ばかりだったらしい。

だが、そんなことを思った瞬間には視線が和彦たちへと向けられていた。

「に、げろ……」

叫んだつもりが切れ切れな弱々しい言葉が漏れた。
しかし、そんなことは気にならなかった。

「ら、ライラあああ!!」

「キヤアアアア!!」

代わりに和彦の声が轟く。綾芽さんは叫びながら蒼白になった顔を手で覆っている。

そんな二人に斧槍の男はどんどん接近し、とうとう斧槍の間合いに入ってしまった。

「くっ!!」

その瞬間、反射的に和彦は魔法障壁を張った。咄嗟の行動とはいえ、この学園都市でもトップクラスの实力を誇っている和彦のそれは強力だ。だが、

「かはッ!？」

斧槍使いが振るった斧槍と魔法障壁がぶつかった瞬間、和彦は後ろへ吹っ飛ばされた。

ふ、防ぎきれなかった!？あの和彦が!？

驚愕に目を見開くライラ。しかし、それは綾芽もだった。

斧槍使いが次は綾芽へと目標を変えた。

「や、めろ……！」

掠れた声を出した瞬間、背中が痛んだ。痛くて痛くてたまらない。だが、それよりも何もできない自分の心が痛んだ。

しかし無情にも男は斧槍を振り上げる。

やめろッ！！

驚愕が抜けきらない綾芽は、男が振り上げる斧槍に怯えて動くこともできないでいる。まず間違はなく避けられない。

「やめろおおおおお！！」

傷の痛みも関係無しにライラは叫んだ。叫ばずにはいらなかった。そんなライラの思いを嘲笑うかのように斧槍が鈍く光った。

自分は無力だ。

でかい口叩いても所詮は仲間一人守れないクズだ。

自分自身に絶望した。

弱い自分を憎悪した。

目から溢れる涙と刻一刻と過ぎる時間の中で、ライラは信じられないものを見た。

ガキイイイイン！！

金属同士の済んだ音がアリーナに響く。それと同時に優しげな男の
声が耳に届いた。

「大丈夫か、綾芽さん？」

眠っているはずの黒髪黒目の少年
一丁の白銀の銃で受け止めていた。

華瀬悠希が、左腕に持った

e p i s o d e 4 1 殺す人間（前書き）

遅れました。
すみません。

episode 41 殺す人間

どれくらい経っただろうか。いや、実際には大して時間が過ぎたわけではないのだが。

レイ・ケイフォードはそろそろ限界に達していた。

（ああ！！ム力つくッ！！）

……主にイライラ的な意味で。

眼前で槍の伝説武器を振り回す男の攻撃を全て受け止め、その場から動けないために録な反撃すらできないというハンデは、思いのほかレイの精神をガリガリ削っていつてるのである。

（くそが、くそが、くそがッ！！）

……主にイライラ的な意味で。

後ろでは未だに何かに怯えるように青ざめている波風紅葉の姿が。彼女を庇うためにレイは本気を出せないでいる。ただ、そろそろ限界である。そんな彼の脳内はというと、

（いつそこの辺り吹き飛ばすか？）

と、いう具合に物騒なことを考えていたりする。その際は紅葉までも巻き沿いを食うかもしれないが、さっきからなめられっぱなしでいるためにどうしてもストレスが溜まっていつて

しまうのだ。それぐらい許してほしいという風に考えてしまう。

「ははは……！どうしたんだい？そんなんじゃないよ？いつまで経っても倒せないよ？」

高笑いを上げ、陶醉したような目で哀れむようにこちらを見てくる。だが、決断にはそれで充分だった。

（決めたぞっ！！後1分待つて進展無いなら吹き飛ばすっ！！）

槍使いのそんな発言で、レイの中で何かが切れた。そんなこんなで、理不尽にも紅葉の命は一分間のタイムリミット付きになってしまったのである。

だが、幸いにもすぐに状況が変わった。

「かはッ！？」

突如、呻き声を挙げて槍使いは右方向へと吹っ飛ばされた。レイが何もしていないにも関わらず。

いきなりのもので間の抜けた表情になったが、直ぐに思考を切り替えて気配を探る。

だが、レイが感じるのとは二人分の気配。紅葉と槍使いだけしかなかった。

（長距離からの狙撃？いや、そんな魔力は感じられなかったぞ）

魔法を使ったときに、術師ならば自然とその魔力の波動を感じることが出来る。それがレイのようにやり手の術師が感じられなかったのだ。例えば長距離からの狙撃でも見逃すはずがないのに。

であるならば、物理攻撃によるものだと考えるのが妥当なのだが、

それでも気配が無いのは可笑しい。

(……ん？待てよ)

気配を感じられない？

魔力も感じられない？

俺はこんな芸当ができるやつを一人知っている。

「……トート？」

「なんでしよう？」

声は近くから聞こえてきた。具体的に言うとなレイの真後ろ約二メートル。

振り返るとそこには短めのプラチナブロンドの髪に、金色の瞳、背丈は小さく、整った顔立ちに無表情を貼り付けた少女　ニコラ・ベーレが、伝説武器“デスサイズ”を携えて立っていた。

彼女とは伝説武器保持者同士ということでは多少は面識がある。あるのだが、問題はそこではない。

「……なんであんたがここにいの？」

率直な疑問だった。

だが、何故かニコラは首を傾げ(といってもほんの少しだが)た。なんで知らないのかと言うように。

「今月に第11高校へと転入しました」

「は？」

抑揚の無い声でとんでもないことを言ってきた。思わず間の抜けた

声を出してしまう。

「なんで？」

「悠希さんが居るからです」

「は？悠希？」

疑問を口にする、またも間を置くこと無く返してきた。だが、『悠希』だと？

「なんであのやろうがいんだよ」

別に高校へ通うこと自体は可笑しいことではない。伝説武器保持者といえど高校生だ。だが、それが悠希　華瀬悠希だと勝手が違う。

伝説武器保持者の中で『華瀬悠希』という名前を知らない者はいない。というか世界的に見ても有名だ。

第六次世界大戦で日本を救った英雄、それが『華瀬悠希』という名前前で思い浮かぶイメージである。多少脚色されているとは言え、あながち間違いでもない。あの戦争で一番戦火をあげたのはアイツなのだから。

さらに極め付けは“複数保持者”ということだろうか。しかも保持している武器の数が多すぎる。どこかの国では『華瀬悠希』という人間を“火薬庫”なんて呼んでるみたいだが。

そんな世界的に有名な男だ。本人が報道されることを極端に嫌がっていたためにバレル確率は低いとはいえ、バレル場合は大騒ぎになる。

それなのにこの学園都市に転入とはどういうことだ？

考えに耽っていると、ニコラにしては珍しく、躊躇うようにして口を開いた。

「悠希さんは今日本に追われています」

「……………は？」

タップリ3秒間硬直したあと、そんなアホなーみたいな顔でニコラを見る。だが、彼女も相変わらずの無表情でこちらを見ていた。

どう考えてもコイツが嘘ついてるわけないよな。

「……………まじか」

「来ます」

そこで緊張が走る。

ニコラが言った通り、槍使いが起き上がったのだ。

「トート、そいつ頼む」

「わかりました」

レイは後ろで青褪めている紅葉をニコラへ任せ、槍使いへと向き直る。

「……………ああ、そういえばなんでここに来たんだ？」

ふと、そんな疑問が思い浮かび、後ろを振り向くことなく尋ねる。

「悠希さんの指示です」

「で、アイツは？」

「アリーナへ向かいました」

それだけ聞くとレイは再び目の前の男へと意識を向ける。

「意外と長い間出てこなかったな。もしかして待っていてくれたわけ？」

「まあ、そんなところだよ」

飄々とした態度を崩すわけでもなく、男は笑みを浮かべながら応える。

普段ならそんな態度でいるやつにはムカついていたのだが、今は意識の片隅に留まるだけで冷静さを失うことがなかった。というより意識の大半をあることが占めているために入る余地がなかったという方が正しいか。

（悠希、今日は殺してやるぞ）

そんな獰猛な笑みを浮かべ、どう殺そうかと考えていたお陰でも目の前の男のことなどどうでもよくなっていた。

そんなレイの態度が不満だったのか、男は再び声をかけてくる。

「もう一度聞くよ」

男の声が低くなったことに気づき、レイは思考の海から浮上した。構わず男は続ける。

「僕たちにつかないか？」

笑みを浮かべることなく大真面目な顔でそう言う男に対して、レイは冷笑を浮かべる。

「答えはN oだ」

「残念だよ」

突如男の殺気と魔力が膨れ上がる。それを肌で感じながらレイは笑みを深めた。

「そう言えば君、名前は？」

いきなりそんなことを聞いてきた。“クレイモア”を担ぎ直し、堂々と言い放つ。

「レイ・ケイフォード。お前を殺す人間の名だ」
「覚えておくよ。僕が殺した少年の名だ」

両者は冷笑を浮かべ、そして足に力を加えた。

episode 42 惨状に参上

遡ること10分前。

俺こと華瀬悠希は不思議な安らぎを覚えながら目を覚ました。

気が付くと花のような香りが鼻に広がり、視界にはゆさゆさ揺れる

え？

目の前に飛び込んできたのは、驚くことに長い女性の髪だった。

「悠希！？」

「うわっ！！」

いきなり至近距離に驚愕に目を見開いた顔見知りの女性の顔が飛び込んできた。

「……一葉？」

それはまさしく波風一葉だった。どうやら俺は今一葉におぶつてもらっているらしい。俺が起きたことに気づいて振り返ったからこんなに至近距離に一葉の顔があるようだ。
だが一つ疑問がある。

…………… 一体何があればこんな状況になるのだろう。

そんな俺の疑問に気づいたのだろう。一葉は先回りして答えた。

「悠希、あんた丸一日寝っぱなしだったのよ！？ニコラちゃんと試合してるときにいきなり倒れて心配したんだから！！」

「丸……一日？うそだろ？」

“ニコラちゃん”なんだな、と突っ込む余裕も無いほど、一葉のその言葉は信じられなかった。

というかあの精神世界（？）でそんなに時間が経ったか？いや、感覚ではせいぜい半日程度しか経っていないはずだ。

つまり、どうやら俺の感覚にズレが生じているらしい。やはりあれはただの夢だったのだろうか。

とりあえずそう結論づけ、内心でホッとしながら一葉の話に耳を傾ける。

「で、今学園都市が襲撃されてるの」

「いや待て！何が『で』だ！話をはしよりすぎだろ！」

いきなり話が飛んだことに、反射的に突っ込んでしまう。

俺が寝てたから学園都市が襲撃された！？意味がわからん。

「説明めんどくさいから後で話すよ。今は第三高校に向かってるわ」

「はあ、向かう理由は？」

「桜から電話がきたの。観客席が爆破されたみたい」

「おいおい、そりやまずいだろ」

確か観客席は衝撃減少の結界の範囲外だったな。最悪死人が出てる可能性がある。

眉を寄せ、あからさまに顔をしかめる。こんな学生ばかりの都市で、

そんなことが起こって適切な判断ができる奴がどれだけいることか。恐らく都市全域がパニックに陥っているだろう。

「で、俺は何をすればいい？」

当然こんな状況下で俺が動かないなんて論外だ。別に自惚れているわけではないが、俺程の力がある人間が呑気に寝ていれば一体何人の人間が死ぬことか。

幸い、ここには優秀な指揮官殿がいる。一葉の指揮ならば俺も安心して従えるだろう。

だが、やはり俺の体を案じてくれているのだろうか。一葉は少し間を置き、耐えるように口を開いた。

「……第三アリーナに到着後、そこにいる生き残りを保護。それが終わったら都市内にいる敵勢力の殲滅。警告無しで殺していいわ」

「了解であります、波風第一小隊長」

「健闘を祈るよ、華瀬悠希副隊長」

軽口を挟みながら二人で笑いあう。そこで俺は先程からこちらの会話を盗み聞きしている『彼女』に声をかけた。

「聞いている通りだ。いい加減、姿隠すのやめろよ、ニコル」

「わかりました」

声は真横から聞こえた。と、同時にプラチナブロンドの無表情な少女が現れた。途端、一葉がビクツと肩を震わせたが、そこはやはり一葉と言うべきか、まるで「驚いてませんよー」とでも言うようにすまし顔を浮かべた。

「一葉、“索敵”してないのか？」
「あ、忘れてた」

おいおい勘弁してくれよ。襲われたらどうすんだ。
はあ、とため息を吐く。そこで重要なことに気づいた。

……………いつまでこのままなのだろうか。

未だに一葉におぶって貰っているという凄く恥ずかしいことがまだ
継続中だった。

「そろそろおろしてくんない？ すごい恥ずかしい」
「あらあら、そうだったわね」

一葉の背中から下り、再び走り出す。しかし、このときによつやく
気がついた。

右腕の感覚がないことに。

第三高校のアリーナに着いたところ、俺たちの耳に金属同士がぶつか

りあつような音が届いた。

だれかが殺りあってる？学生か？

学生ならば助けに行かなければならないだろう。相手も素人ではないのだから。現に、トーナメントで聞くどの音よりも、音同士の感覚が狭いのだ。つまり相手の攻撃が速い。

しかし、それはこちらとて同じ。アリーナの中からも轟音が飛び交っている。

一葉に目を向けると、俺の意図がわかったのか、素早く指示を出す。

「悠希は私と一緒にアリーナ、ニコラちゃんは向こうをお願い」

「あいよ」

「了解です」

指示を聞いたら即行動。ニコラは学校方面へ向かい、俺たちはアリーナの中へと急いだ。

アリーナへと到着したとき、俺は血の気が失せた。

一目で重傷だとわかるライラの背中への火傷、壁まで吹っ飛ばされた和彦、必死に刀を振るう桜、斧槍を振り上げた男が眼前へと迫った遥と綾芽さん。

その光景を見た瞬間、頭は真っ白になり、気が付いたら左手に“ジャッジメント”を握っていた。

一瞬で二人を庇うように立ちふさがり、斧槍を銀色の銃で受け止めた。

「大丈夫か、二人とも？」

言いながら男を蹴り飛ばす。

振り返るとこの場にいる俺と一葉以外の人間全員が驚愕に目を見開いていた。

「ゆう……き？」

そんな中、一番早く立ち直った和彦が信じられないとばかりに口を開いた。まるで亡霊でも見ているようなその表情に苦笑させられる。

改めて状況を確認する。

敵は約20人、ライラが重傷、和彦と桜は軽傷、遥と綾芽さんは無傷、か。

確認しながら俺の中でふつつと怒りが沸き起こる。この怒りを込め、俺は言い放つ。

「お前ら全員　　原形残ると思うなよ」

いつもよりずっと低い声と同時に抑えていた殺気と魔力を解き放つ。アリーナを飲み込む程の膨大な魔力に男たちは震え上がった。

だが、今更後悔してももう遅い。お前たちが幕を上げたのだ。途中放棄など許されない。

「一葉」

「はいはい」

俺の意図を察した一葉はため息を吐きながら右手を翳した。

「ちょっと寝ててね」

「お姉ちゃんッ！！それ」

これから何が起こるのかいち早く察知し、斬り合っていた男と距離を取った桜だったが、言い終えることは無かった。

そこで桜たちの意識は途絶えた。

episode 43 歪んだ気遣い

一葉が手を翳すと同時に、桜たちは気を失った。それを横目で確認し、改めて男たちへと向き直る。

全体的に見ると魔法特化型が多いようだ。見たところ全員魔術師らしい。

「一葉、何人残せばいい？」

「一人で十分よ」

「了解」

飄々とした声音とは裏腹に、会話の内容は恐ろしいものだった。聞き終えるが、俺は動くでもなく、ただ銃口を向け、

「お前、運が良かったな」

向けた先に居る男にそう声をかけた。魔術師らしい杖を持ったその少し若めの男は、俺の言った言葉の意味が解らないとばかりに啞然とした。

だが、それと同時に血生臭い殺し合いの火蓋が落とされた。

俺は魔力を“ジャツジメント”へと流し込み、目の前に居る男たち全員に引き金を引いた。

ズガガガガガ

！！

銃声の音が木霊する。

すぐさま男たちの周りに異変が起こる。

男たちを取り囲むように、無数の水球が現れたのだ。

これはニコルとの試合で使ったのと同じ魔法。しかし、俺が今握っているのは伝説武器、つまり術式弾を使う必要もない。

生成された水球の数は50。大人一人より余裕で大きいその水の塊が20人の男たちを取り囲む光景はなかなか面白い物だった。だが、いつまでも鑑賞しているつもりなんて俺には毛頭無い。

「
やれ」

無慈悲な俺の宣言と共に水球が男たちへと襲いかかる。各々逃げまどったり、水球へ攻撃したりするが無駄なことだ。

全員が水球へと飲み込まれるまで大して時間はかからなかった。

「そのまま殺したりしねーよ。こいつらにお前らみたいな汚い肉片を見せられるか」

そう怒りを込めた視線で吐き捨てる。

俺がわざわざ水球で男たちを捕らえた理由、それはアリーナに血や肉を散乱させないため。

もの凄く歪んだ理由ではあるが、桜たちを気づかったゆえの考えだ。

だが、そこで俺はあることに気が付いた。

「あれ？さっきのやつってどれだ？」

「……………もうなんでもいいわよ」

はあ、とため息を吐く一葉。その顔には呆れた表情を浮かべていた。なぜ呆れられたのかわからないが、取り敢えず任務を遂行することに。

再び男たちへと目を向ける。水球内にいるため、呼吸もできずにもがいているさまがなかなか滑稽だった。

「よし、お前に変更な」

そして再び違う男へと銃口を向ける。

それと同時に手に持つ銃を別の武器へと入れ替えた。

「こい、こがらす“小鳥”」

呼ぶと同時に左手へと光が収束する。光が消え、俺の手に収まっていたのは小ぶりの剣、短剣だった。

伝説武器“こがらす小鳥”。俺が持つ伝説武器の一つ。それを逆手に持ち、俺は水球を睨みつける。

「死ね」

吐き捨てる。

と同時に終わった。

水球の中で、男たちがバラバラの肉塊に変わるという形で。

だが、その中で一人、先程俺が指名した男だけが驚愕に目を見開いていた。

「……………いつ見ても“小鳥”は『速い』わね。全く見えなかったわ」

と、後ろから一葉がよってきた。その賞賛に苦笑せざるをえない。

「見えなくても、『読めてた』だろ？」

「ん、まあね」

こともなさげにそう言う一葉に再び苦笑させられる。そして俺は、生き残った男に目を向け、水球から解放してやった。

地面に落ち、激しくむせかえる男。だが、そんなことなど気にも止めず、俺たちは男の下へと近づいていく。

それに気づいたのだらう。男は俺たちを睨みつけ、転がっている杖型の補助武装を拾おうとする。が、その前に、俺は男の喉元に“小鳥”を突きつけていた。

「止めとけ。お前らごとき下っ端がいくらかかってきても俺は殺せねーよ。それよりも命が欲しくねーか？」

低い声でそう囁きかけると、男は怯えきった目で何度も頷いた。それを確認し、俺は二、三步ほど後ろへ下がった。

「安心しろよ。俺の質問に答えてくれりゃ多分命まではとらないからさ」

「た、多分って　　ひッ!!」

何か言いかけたので睨みつけて黙らせる。何度も頷く男に、俺は質問を投げかけた。

「第一の質問だ。お前らの勢力は？」

「さ、3大隊が乗り込んできている」

俺の質問に対して即答。コイツに忠誠心というものはあるのだろうか。

その現況が俺とは言え、哀れとしか言いようがないな。

しかし、大隊が3つねえ。そりゃ結構な数が来てんだな。

「そのうちレア持ちは何人だ？」

「中隊長以上は全員……」

その言葉を聞いた瞬間、俺は盛大に舌打ちをついた。正直、この状況は非常にまずい。

（中隊長以上全員だと？なんでそんなに人員を導入する必要がある？そもそもなぜそんなにレア持ちがいやがる？）

伝説武器保持者が何人もいれば、他の生徒では対処しきれない。例え教師であっても難しいだろう。どうやら事態は思ったより芳しくないらしい。俺は更に質問を続けた。

「次だ。お前らの目的はなんだ？」

「わ、わからない」

その瞬間、鮮血が舞った。と、同時に男の後ろでドサリと何かが落ちた音が響く。

「あ、あああああああああッ!!!!!!!!!!!!!!」

しかし、それを確認することなく、男は苦悶の叫び声を上げた。

男の後ろに落ちた物それは

先程まで付いていた男の腕だった。

そんな男など気にもせず、俺は言葉が続けた。

「何とぼけてやがる。お前には嘘を吐く権限なんて無いんだよ。なんか勘違いしてねーか？今殺されてないのは俺の気まぐれなんだぞ？」

再び喉元に、さっきまで無かったはずの血で濡らされた“小鳥”を突きつける。だが、それでも男は歯をガタガタ震わせ、怯えきった目で首を振る。

「ほ、本当だッ！！本当に知らないんだ！！」

右腕を抑え、必死に訴える。その瞳は嘘を言っているようには見えない。

（どういうことだ？下っ端は知らない？一体なんのために？くそッ、もう一人ぐらい捕まえときゃよかった）

一葉を見る。だが、やはり彼女も首を振った。一葉が言っただ、やはりコイツは何も知らないのか。

「じゃあ最後だ。お前らの所属してる組織はなんだ？さすがにこれは解るだろ？」

「そ、それは……」

ここで男は少し渋った。だが、俺が少し短剣を近付けると、慌てて叫んだ。

「ろ、ロシアだッ！！ロシア軍の術師旅団に所属しているッ！！」

ロシア軍？術師旅団？

思い浮かんだのは最悪の過去。

そして、あの男。

「……おい」

「な、なんだ？」

「“ガラドボルグ”はどこにいる？」

episode 44 言い訳

「し、知らない！本当だッ！俺たち下っ端は隊長クラスの行動なんて聞かされてないんだ！！」

「……そうか」

答えはNOだった。

いや、わかってはいた。だが、少しの期待はあったのだ。だから少なからずがっかりはした。

ただそれだけだ。

「じゃ、じゃあっ！」

途端に男の顔に生気が戻った。そんなコイツを俺は冷めた目で見て、そして、

「用無しだ。もう死ね」

絶望の淵に叩き落とした。というより蹴り飛ばした。蹴り飛ばした先には、件の人だった物が浮かんでいる水球。そこに突っ込んだ男は驚愕に目を見開く。まるで「なぜ？」とでも言うように。俺はそんな光景を見て嘲笑を浮かべる。

「なぜ？」って顔してんな。バカだろあんた。ここであんたを逃がして、他のやつらが集まってきたらどうする？情報が伝わったら

どうする？それ以前にあんたがロシア軍だって時点でアウトだ」

そう言い放ち、俺は“小鳥”を掲げる。

「まあ、情報くれた礼に一つ教えてやるよ。この“小鳥”の無系統魔法、名前は――」

言い終える前に、男は肉塊へと変わった。

「――けんせん 剣閃。自分自身の身体能力を上げる魔法だ。普通の身体強化の比じゃないぜ？今、俺があんたを斬ったんだ。見えなかつたろ？」

【無系統魔法：剣閃】

自分自身にこの魔法をかけ、身体能力を大幅に増幅する魔法だ。俺が言った通り、普通の身体強化とはわけが違う。最強の自己強化魔法と言っていいだろう。

刀に付着した血を払い、俺はふう、と息を吐く。

「悠希、死んじやつたら説明しても意味無いわよ」

後ろからまた呆れたようなため息と共に一葉が呟いた。ごもつとものです。

俺は苦笑しながら辺り見回す。

肉塊や血が詰まった水球の数々は圧巻の一言に尽きた。

……… なんとまあ、我ながらグロテスクなことをやったもんだ。

ここは死体の展覧会かなんかですか？

「……おえ」

「自分でやつといてそれは無いんじゃない!？」

的確すぎるツツコミ。いや、まあその通りであります。

取り敢えず魔法で土を掘り起こし、その中に埋めておいた。こうすれば桜たちがけれを見ることはない。隣では一葉が苦い顔をしているが、気にしない。

一安心して未だに気を失っている桜たちに目を向ける。

「一葉、もう起こしていいぞ」

「はいはい」

そう言いながら再び手を翳す。すると、数秒後にはそれぞれムクリと起き出した。そして、真っ先に起き上がった桜が怒声を張る。

「お姉ちゃん!! 精神干渉使ったでしょ!! なんで眠らせたりしたの!？」

「う、ごめんごめん」

そのあまりの剣幕に、あの一葉が後ずさる。繰り返すが『あの』一葉が、だ。

そこで自分が怒られることに理不尽を感じたのだらう。その一葉がキツ、と睨みつけてきたため、俺はそつと目を逸らした。

「あとで覚えてなさいよ」という気配も感じたが、気のせいだらう。

きつと気のせいだ。

数分後、全員が起き出した。

そして全員が全員、俺がいることに気が付くなり、死んだ人間を見るような目になるため、居心地が悪い。

「ライラ、大丈夫か？」

俺はライラの傍まで行き、屈んで問いかける。ライラは青い顔をしながらも掠れ掠れに声を発した。

「ゆ、うき……あとで、殴ら……せろ……」

「ごめんだな。そんなの」

軽口を交わし合いながらも、ライラの状態を確認する。

まず傷が酷すぎる。今すぐ行かなければ死ぬ、というわけではなさそうだが、病院に連れて行った方が良さそうだ。

「ねえ、悠希。あの人たちはどうしたの？」

そこで和彦が綾芽さんに肩を借りながら歩いてきた。ライラよりは軽傷とはいえ、足にダメージがあるようだ。

あの人たち、というのはあの男たちのことだろう。取り敢えず考えていた言い訳を実行することに。

「あー、帰ったぞ？なんか急ぎの用があるとかで」

「いやいやいや！さすがにその言い訳は無理があるよー！」

なん……だと……？

見破られたことに多少ショックを受けつつも、どうにか次の言い訳を考える。

考え……る。

……。

何も思いつかない。

最後の手段とばかりに一葉へと目で助けを乞う。
だが、無情にも視線を逸らされた。

（あれはさっきのやつのは返しだなッ！？）

くっ、だが俺は怯まない。

どうにかしてこの場を逃げ切って　　。

「ゆ、悠希さん」

「ん？どうした？」

思考から浮上し、綾芽さんを見る。だが、顔色が悪い。

「どうした？どこか怪我したのか？」

「い、いえ、そうじゃなくて……」

妙に歯切れが悪い綾芽さんに訝しく思っていると、彼女はゆっくりと俺の背後を指差した。

「あれ……」

「ん？」

指が向いている方向、つまり俺の真後ろへと振り返る。と、同時に固まった。

俺の背後に合った物、それはまさしく人間の腕だった。

「……あ」

そういえばさっき、尋問（拷問）したときに男がとぼけた（実際には本当だった）ので反射的に腕を切り飛ばしたんだっけ。いやー失敗失敗。

……いや、違っただろッ！！何が『失敗失敗』だッ！！あれはま
ずいだろッ！！

ダラダラと冷や汗が流れ出す。頭の中ではどうやって誤魔化すかを
必死に考えるが、時間は待つてはくれない。

落ち着け、俺。まだなんとかなる。なんとかなるぞ。

「あ、あれは抱き枕だ！誰かが忘れていったんだよ！」

「いや、それも無理があるからね！？というか誤魔化す気あるの！
？」

再び和彦の的確すぎるツッコミ。さらに周りからの疑いの視線が突き刺さる。

ここで口が上手いやつは誤魔化せたりするのだろう。

だが、生憎と俺にそんな特殊技能は無いっ！！だからこうしてどうすればいいかを思考中なわけで、さっきから何か音が聞こえてくるわけで、どんどん近づいて

え？

「うおッ!？」

いきなり俺の頭上から大剣が降ってきた。耳元に空気を削く音が響き、全身からドツと嫌な汗が流れた。

だが、なによりもその根源に驚愕する。

赤黒い刀身、その巨体、見覚えのあるこの大剣は、

「く、クレイモア!？」

何故だろう、凄く嫌な予感がする。

そんなときの俺の勘は良く当たるわけだが、今回ばかりは外れてくれるといいなあ、なんて希望を抱いてしまう。もちろんそんなことはおこらなかったが。

「ゆ〜うきく〜ん」

そんな気色悪い言葉にドスを混ぜた声が正面から降り注ぐ。

「や、やあレイ」

笑みを浮かべながらそう応える俺。口元がひきつっていることは言うまでもない。

それもこれも、俺の前に眼帯少年が立っているためだ。

彼は今日もこう言うだろう。

「俺に殺されるよ」

と。

episode 45 奇襲？

「よお、悠希。今日こそ俺に殺されるよ」

そう言つて目の前の金髪眼帯少年、レイ・ケイフォードは“クレイモア”を振り上げる。

反射的に身を逸らし、素早く後ろに飛ぶ。その瞬間、大剣が振り下ろされ、先程まで俺が居た地面が豪快に抉れた。もし避けなかったら などという嫌な想像をしてしまい、俺は思わず身震いした。

いやいや、あれはマジで殺す気だっただろツ。

ダラダラと流れ出す冷や汗を拭う。それからは考えるより叫んでいた。

「な、なんでお前がこんなとこにいるんだよっ!？」

ツツコムところが違うと思うが、取り敢えず俺の口からはそんなことが発せられた。いや、訴えられたと言つていいだろう。

そんな俺の様子をレイは鼻で笑い飛ばす。

「ハッ！俺は一年前からここに通つてんだよ。なんでテメーがここにいるかなんてのはこの際どうでもいい。テメーは黙って俺に斬られてろツ!！」

「む、無茶言うなバカッ!!」

再び斬り込むレイを、今度は短剣で受け止めた。しかし、

(お、重ッ!?)

受け止めた瞬間、俺の足は地面へとめり込んだ。

釘打ちに例えるならば俺は釘だな。で、“クレイモア”がトンカチでレイが持ち手か。

呑気に考えてはいるものの、全身から吹き出す冷や汗は止まることを知らない。

ていうかコイツ、まだ“あのこと”怒ってんのか？

どんだけ執念深いんだよ……。

ため息を吐き、レイの鳩尾へと蹴りを繰り出す。が、それを左手で受け止められた。

やばい。

そう思って身構える。しかし、レイは何をするでも無く、俺の足を掴んだまま怪訝そうに眉を寄せた。

「おい、悠希。テメー、右腕どうした？」

唐突にそんなことを言い出したのだ。

一瞬、言われた内容を理解できず、キョトンとした俺だったが、すぐに思考を再開させた。

(……………まあ、流石にコイツにはバレるか)

ため息を吐き、「まあ、仕方が無いよな」と結論づけることに。もしかしたら誰かにバレるかもとは思っていた。恐らく一葉は既に気付いているだろう。だからと言って、この場にレイが来るとはまったく予想していなかったために動揺してしまっていたようだ。

しかし、やはりレイ程の魔術師、それに付き合いは長くはないが知り合いでもある。そんな彼にバレない方がおかしいもので、この結末は必然と言える。

幸い、この至近距離であるため、レイも声を抑えていたので周りの人間に気付いた様子は無い。

「ちょっと訳ありだな。今は右腕がピクリとも動いてくれないんだ」

自嘲気味にそう言うと、レイはいつそう怪訝な顔つきになり、渋々とでも言うように俺の足を放した。

この行動には少し驚いたため、レイの顔を窺うが、当の本人はくると背を向け、表情は見えない。

その行動が益々不可解に思えたのだが、そこで俺は閃いた。

「照れてるのか？」

「死にたいか？」

かと思えば、今度はいきなり憤怒の形相で“クレイモア”を突きつけてきたのだ。

取り敢えず左手だけピシッと上げ、降参の意志を示すとうやく許してくれたわけだが。

……照れ屋なやつめ。

そうこうして、やっとの思いでレイから解放された俺は、再びライラのもとへ
というわけでは無く、未だに怯えている遥のもとへと向かった。

改めて見ると美人だな。

あのときは半分意識が朦朧としていたからわからなかったが、今見るとそう思う。

いかんいかん、何考えてんだ俺は。

そんな煩惱を頭の外へと追いやり、少し腰を屈めて遥と目線を合わせる。

一瞬ビクツと身体を震わせたが、俺を見るなりその涙を溜めた瞳を見開き、掠れた声を出した。

「ゆうき……さん？」

うおっ！？この上目遣いは反則だろ！？

その余りの小動物的な上目遣いで若干気圧される俺だったが、気持ちを切り替えて微笑みかける。

「遥、久しぶり……かな？どうかしたのか？」

できるだけ優しい声でそう囁きかける。すると、少し間を置いて遥は頷いた。

「私、怖いんです……。殺されるかも、って思うと、足が……」

座り込み、震える足を抱く遥。スカートの中から覗かせた足がブルブルと震えていた。

俺も隣に座り、俯く遥の頭に手を置く。驚いたのか、顔を上げ、潤んだ瞳でこちらを見返してくる。そんな彼女を安心させるように俺は二カツと笑った。

「そりゃ人間だからな。死ぬのは誰でも怖いぞ？ 遥が怖がるのを誰も責めやしない。けどな」

そこまで言い終え、一拍置いてから俺は真剣な顔を作った。

「そこで震えてたって何も始まんないだろ？ いや、始まんないどころか終わるかもしれない。もしかしたら大事な人が殺されるかもしれない。遥はそれでいいのか？」

それを聞き、すぐさま遥は首を横に振った。俺はそれを確認し、再び微笑みかける。

「怖いのはみんな一緒だ。俺だって死ぬのは怖い。でも俺らが動かないとみんなが死ぬ。戦ってるやつらはみんなそれが嫌だからがんばってる。きついようだけど、これが今の俺たちの現実だ」

そう言っただけで俺は遥の頭を撫でる。柔らかい髪をゆっくり撫でると、ラベンダーのような爽やかな香りが漂ってきた。

少しドキリとしたが、平常心を保ち、俺は最後の言葉を発する。

「だからな、俺はお前『も』守ってやるよ」

「ゆづき、さん……」

「それからは自分で考えな。さっきも言ったけど、どんな決断をしても誰も文句言わないよ」

言い終え、頭から手を放して俺は立ち上がる。

先程までの震えは止まっていた。変わりに遥は若干頬を紅く染めていたが、何故かはわからなかった。しかし、心配はいらないだろう。彼女の瞳には光が灯っていたのだから。

後は彼女の問題だ。これ以上俺が言うことは無い。

俺は再びライラのもとへと向かった。

「……この女たらし」

「何言つてやがる……」

ライラのもとへ駆け寄るや否や、いきなりそんなことを言われた。

ほんと、何言つてんだコイツ？

訝しげに顔をしかめるが、何故かあからさまに呆れた表情をされ、さらにはため息まで吐かれた。

……………何故か無性に腹が立つ。

「お前ってほんとに…………いや、もういいや…………」

「なんなんだよ、さっきから」

何故俺が呆れられなきゃならんのだ？

「ダメだコイツ」みたいな目で見られ、どうにも居心地が悪い。なぜそうなるのかわからないが、怪我人に八つ当たりしても仕方がないのでスルー！。

……………いや、やっぱり治ったら殴ろう。

そう決意しながら、俺は周りを見回す。

（あれ？）

が、そこまできてようやく気が付いた。

「紅葉はどうした？」

彼女の姿が見当たらないのだ。ライラに尋ねるが首を振る。もちろん横に。

そこで、いつものメンバー以外の、これまた意外な人物が応えた。

「アイツなら“トート”とこっちに向かってるだろ」

応えたのはレイだった。

“トート”？

あー、ニコルを行かせた音の正体はコイツだったのか。なら余計なお世話だったな。

だが、何故紅葉まで？しかも遅れて。

訝しく思ったが、当の本人は飄々とした態度をしている。

「なんでお前が知ってんだよ」

「成り行きでここまでできてただけだ。途中でレア持ちに出くわした
がな」

「は？で、どうした？」

俺が保々条件反射的に結末を聞こうとすると、レイは急に不機嫌そうに顔を歪め、苦々しそうに口を開いた。

「……逃げられた」

「……………ぷっ」

「殺されたいらしいなッ!？」

俺が思わず吹き出すと、憤怒の形相で迫ってきた。

逃がした？あのレイが？あの戦闘狂が？

珍しいこともあるもんだ。

絶好の弄りネタを見つけたために、俺はつい調子に乗ってしまった。

「なんなんですかあなたは？殺す、殺されろって。物騒にも程がありますよ。……ぷっ」

「よし、齒あ食いしばれ！首を落としてやるッ！！」

「いや、すみません。ほんと勘弁してください」

待て待てッ！目がマジだからな、コイツ。

本当にやりかねないので、ここは素直に謝って宥めることに。

「で、なんでお前だけ先に来てんだ？」

「あの女、なんか錯乱して普通じゃなかったからな。“トート”に任せて置いてきた」

「おい、何してやがる」

普通じゃなかった？

あの紅葉が？

確かにたまに感情で揺らぐことがある。だが、それも冷静さを欠く程でもない。

では、余程のことがあったのだろうか。それとも、

“あの時”のことを思い出したのか？

そうだとすれば頷ける。だが、そうであるならば心配だ。紅葉にとつても、“あの時”のことは忘れ去りたいトラウマなのだから。

本当ならば今すぐ駆けつけたい。だが、いつ敵に襲われるかわからないこの状況で、俺が下手に動くわけにはいかない。

兄さんのときのように。

歯を食いしばり、紅葉のことはニコルが付いているため、大丈夫だろうと結論づける。

俺はそれが正しいと思い込んでしまっていたのだ。

取り敢えずは、ライラを安全な所へ運ぶためにおぶろつとする。が、止めた。

(……………いや、待てよ)

俺の頭の中にあることが思い浮かんだ。

「一葉、ここの結界の名称は？」

「？ “制限結界”の“衝撃制限”よ？」

“制限結界”それは効果範囲に入っているものに、何らかの制限を

与える結界の名称である。

例えば“衝撃制限”。

これはある一定以上の衝撃を制限され、それ以上の衝撃は一定の値まで緩和されるというもの。

このアリーナの場合、競技場を囲むようにこの“制限結界”が張られている。その内容はこの“衝撃制限”だということだ。

他にも色々な制限内容があるが、それは置いておくとうしよう。

それを確認した瞬間、俺はニヤリと笑った。

「よし、みんな聞いてくれ！」

声を張り上げて、全員に聞こえるようにする。

案の定、全員がこちらを向いたことを確認して、俺はこともなさに言い放った。

「俺、もう一回結界張るわ」

それは、この場の全員が啞然とするには十分すぎる言葉だった。

episode 46 普通ではない

「もう一回結界張るわ」

俺のその一言で、一同啞然。まあ普通はそうなるよな。

そんな中でも、一番最初に正気に戻ったのだろう、和彦が慌てて異議を唱えた。

「ちょ、ちょっと待って！！そんなこと高校生にできるわけないじゃないか！！」

和彦の言うことはもつともだ。

結界というのは本来、術師が複数いなければ発動することすらできない。

普通の術師が一人で結界を張るには、簡単な結界で、範囲が狭く、しかも継続時間が短ければそうはならないのだが、“制限結界”はその範疇に入らない。このアリーナの範囲全体に結界を張るとなれば、膨大な魔力が必要となるのだ。

「このアリーナ全体に結界を張るには何十人も術師が必要だ、つて言いたいんだろ？そんなこと解ってるさ。一からやるなんて流石に俺でも骨が折れる」

続けられたこの言葉で、一葉とレイが納得顔になった。が、他の連中は頭に疑問符を浮かべている。

まあ普通ならばこれで理解できるはずがないので、俺は説明に入ることにした。

「お前ら、ここの結界が消えてる、って思っていないか？」

「え？だって衝撃が緩和されなかったよ？それに観客席からもこっちに入ってきてたし……………」

俺の質問に答えたのは桜だった。しかし、俺は首を振り、否定する。

「厳密に言えば結界自体は消えてない。“制限結界”ってのはそんなにやわじゃないからな。消えたのは制限だけなんだ」

俺の言っている意味がわからないとばかりに首を傾げる桜たち。

「例えば壁があるだろ？壁が結界でペンキが制限だ。“制限結界”は壁にペンキを塗りたくった状態。けど、今はそのペンキが剥がれてると思えばいい」

「つまり、結界だけが残って制限だけが無くなっちゃった、ってことですか？」

「そうだ」

良くできましたと言うように綾芽さんの頭を撫でる。何故か桜と遥の方から不穏な気配を感じたがスルーだ。

頬を染め、気持ちよさそうに目を細める綾芽さんを脇目に、さらに話を続けた。

「今は何らかの理由で制限が外れてる。この術式は地下の電力を利用してるみたいだから、俺がその制限を上書きすれば結界が効力を発揮するはずだ」

「そ、それでも魔力はどうするんですか？例え制限を付けるだけでも膨大な魔力が必要じゃ……………」

そこで遥が話に加わった。さすがにこれは博識としか言いようがない。

そうだ、例え制限を付けるだけとは言え、無茶苦茶な魔力が必要になることに変わりはない。

電力を利用しているために持続させる必要が無いとしても、ここにいる全員の魔力でも足りないだろう、と思っているのだろう。

魔力が尽きている状態で襲われたりしたらどうなるかも。

だが、それでも俺は微笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。俺は“普通”じゃないからな」

そう言つて“小鳥”を戻し、再び“ジャッジメント”を呼び出す。

眩い光が収束し、俺の左手に白銀のリボルバーが現れた。それを見た和彦が驚愕に目を見開く。

「それ、まさか伝説武器！？あの見えない武器だけじゃなかったの！？」

「…………ああ。黙つてて悪かったな。また今度説明する」

他のみんなもそれぞれ驚きを露わにしていた。そんななかでも知っていた組、つまりは一葉とレイは動じなかったが。

俺はアリーナの中心へと移動し、一度深呼吸をして精神を統一する。

「それじゃあ始める」

言うと同時に俺は東西南北へ向けて引き金を引いた。
いきなりのもので驚いたであろう綾芽さんが悲鳴を上げたが、今だ
けは構ってられない。

東西南北四力所の壁に銃弾が着弾したと同時に、俺は自らの地面に
も穴を穿かせた。

「アクセス。制限の上書きを開始する」

そう呟いた瞬間、銃弾と銃弾の間に魔力が繋がる。と、同時に俺の
頭の中に膨大な情報が流れ込んできた。
それら全てに意識を割り、必要な項目をピックアップ。制限を設定
する。

「効果範囲内の全ての衝撃を無効」

「外部からの干渉を無効」

「内部から外部への干渉を有効」

「学生、教師以外の出入りを禁止」

呟きながら制限の受理を確認していく。膨大なデータのやりとりが
成されていくなかで、俺は意識の全てを注ぎ込んでいく。

「す、す……」

誰かがそう呟いた。しかし、それは聞こえただけで、意識に残るこ
とは無かった。

「火災発生の自動消化」

「地面からの干渉を無効」

「人害な気体の流入を無効」
「結界範囲をアリーナ全体に拡張」

途切れることのない情報を、目で確認するのではなく、意識だけで確認する。

精神が擦り切れそうになる程の作業を淡々とこなしていく中で、「やっぱり俺は化物なんだ」と再確認させられた瞬間だった。

膨大な魔力が必要とされる制限付加。にも関わらず、俺の体内から魔力が減っているという実感はあまりにも少ない。

それは意識を傾けていないからそう感じるわけではない。
俺の魔力に対して、減っていく魔力は微々たる物なのだ。

常人では考えられない程の魔力、精神力。

異端である伝説武器保持者の中での異端である“複数保持者”。
日本では英雄扱いされた大量殺人者。

『化物』Ⅱ『英雄』

ときどき自分が人間であるのかどうかすら解らなくなる。

異例の中の異例。

異端の中の異端。

俺は、自分自身が解らない。

何故、生まれてきたのが解らない。

何故、こんなにも力があるのが解らない。

他の人が聞いたたら嫌みだと言われるだろう。
だが、解らないのだ。

そして、怖い。

解らないから怖い。

自分が何者なのかわからないから怖い。

何のために生まれてきたのか解らないから怖い。

力が有りすぎるから怖い。

何故、こんなにも恐れなければならぬのだろうか。
普通であればどれほど良かったことか。

力が無ければ、兄さんが死ぬことは無かった。

力が無ければ、こんなにも苦しまずにすんだ。

力が無ければ。

そう思ったとき、紅葉の笑顔が脳内に浮かび上がる。

力が無ければ……………紅葉は生きていなかった。

そこまで考えて、ようやく作業が終わったことに気が付いた。
思考の海から浮上し、先程までの考えを頭の外に追いやる。

「……………き」

何かが聞こえた。だが、辺りは真っ暗で何も見えない。

「……………き」

そこでようやく気が付いた。自分が瞼を閉じていたことに。
前もこんなことがあったな、などと思いながら、いつの間にか閉じていた瞳を開き、意識を外側に向ける。が、

「ゆづきッ…！」

「へ？」

バシイイン！

目を開けた瞬間、何かが俺の頬をひっぱたいた。
ジンジンと痛む頬に左手を添える。若干熱を帯びたそれは、現況への怒りを訴えるように脈打っていた。

もう一度視線を戻そう。

目の前には一葉。

その顔には「あ」とでも言いた気な表情。
さらに振り切った右手。

状況確認終了。

「何すんだ、一葉！？」

「う、ごめんごめん。呼んでも返事しないからまた気を失ったのか
と思って……」

詰め寄る俺に、心底申し訳無さそうにする一葉。その顔には僅かばかりの安堵の様子があつた。

そう思うと、逆にこっちが申し訳なくなってきた。

また心配かけてしまったという罪悪感に苛まれ、俺は視線を逸らした。

「いや……俺も、その……悪かった。ちょっと考え事をしてな」

俺がそう言つと、一葉は驚いたように目を見張り、そして満面の笑みを向けてきた。

くそ、反則だろ。

ジンジンと痛む頬。だが、顔が熱いのは別の理由だと自覚すると、無性に恥ずかしくなった。

episode 47 ジョーカー

「よし。じゃあ指示出すぞ……って、なんだよその目は」

「なんでもないよ？ただ、お姉ちゃんとイチャついてたから、ね？」

一葉に叩かれた頬をさすりながら、俺はこの場にいる全員に呼びかけたのだが、妙な雰囲気にも首を傾げる。

この場の全員を代表して。桜が笑みを浮かべながら（目は笑ってない）毒吐く。その反応がいまいち良く解らずに首を傾げる俺。そんな俺の態度に呆れたようなため息を吐き、全員気を引き締める。それを確認し、俺は気にせず言葉を紡いだ。

「今、結界の制限を付け加えた。結界領域はこのアリーナの観客席までの全て。今起きてる火災も、既に消化完了だ」

そう言っただけで周りを見るように促す。俺の合図で皆一斉に辺りを見回すが、直ぐに驚愕の表情を浮かべた。

先程まで燃え盛っていた火が消えたのだ。煙はまだ残っていて様子を伺うことはできないが、それも換気されているようでもうすぐ晴れるだろう。

しかし、ここからが問題だ。

「で、だ。この中で治癒系統の魔法が使える人は居るか？」

問いかけ、再び辺りを見回すが、正直期待はしていない。

治癒系統の魔法は生まれ持った才能に偏る魔法だ。人の傷を癒やしたりするのだから、それなりの知識も必要となる。つまり、治癒系統の魔法を使える者は少ない。術師全体の中でも半分はいないだろう。

そんな背景があるのだ。そう都合よく。

「は、はいっ！」

「へ？」

予想外の反応に俺はつい間抜けな声を出してしまった。それもそうだ。

無いだろうと思っていた矢先に声が発せられたのだ。それも二人分。驚かない方が可笑しい。

慌てて声の主を確認しようとするが、その二人　綾芽と遙が手を挙げていたので直ぐにわかった。

「……え、使えるの？」

「はいっ！！」

確認のために聞いたのだが、二人は元気良く頷く。その反応に俺自身が目を見張ってしまった。

予想外に二人もの治癒系統の魔法を使える人物が都合良く見つかったため、俺は心の中でガッツポーズ。

しかし、気取られないように細心の注意を払いながら表情を維持し続けた。

「で、どうするの？私も使えることは知ってるでしょ？」

「あ、ああ」

そんな中、いきなりかけられた一葉の言葉に、若干詰まりながら相づちをうつ。瞳が訝しげに見つめられた気がしたが、この際無視だ。

「じゃあ、三人には怪我人の治療を頼みたい」

「「わかりました！」」

二人同時にそう答えてきたので、「頼んだよ」と微笑む。その瞬間、二人が頬を赤らめた気がしたが、それもスルーだ。

そんな俺の態度にため息を吐く理事長様もいたが、これもスルー。

和彦とライラへと駆け寄った三人を後目に、俺は気持ちを入れ替え、今度は他のメンツへと顔を向ける。

「次だ。ライラと和彦は怪我を治してもらえ。桜とレイはここで待機。以上！」

「ちょっと待て悠希い！！」

短く有無を言わさぬ口調。

これで解散だとばかりに手を叩き、身を翻す俺だったが、怒鳴り声と共にレイが詰め寄ってきた。

自身の行動を止められたことにより、若干の不機嫌面を浮かべた俺だが、そんなことお構いなく……というか俺よりも不機嫌な形相を浮かべて抗議してくる。

「なんで俺が待機なんだ？お前もどっか行こうとしてたくせに。それ以前になんで俺がお前の言うことを聞かなきゃいけないんだよ！」
浴びせかけられる非難の声に、俺は若干うんざりしてきた。

まあ、こいつが反発することは目に見えていたので驚くことはない。
なぜならレイ・ケイフォードを一言で表すと『戦闘狂』。

戦うことが自らの存在意義などと思っている（実際どうかは知らないが）奴なのだから。
それに俺はどうやら嫌われているらしい。さっきもいきなり奇襲されたし。

その原因は知っている。というか俺が現況のような物だ。
しかし、知っているからと言って、レイの態度に共感できるというわけでもない。第一あれはアイツにも非がある。

そんなこんなで未だに出くわす度に切りかかるレイ。今でさえ俺に
対抗心をメラメラと燃やしているコイツを、一つだけ鎮める方法がある。

だが、今ここで“それ”を使うには些か躊躇われる。それに“それ”
はコイツが俺を狙う理由にも関わってくるのだ。

一度きりの切り札。こんな所で使うのは勿体無いような気がする。

しかし、背に腹は抱えられない。

渋々ながら俺はジョーカーを切ることにした。

「……約束」

ビクッ！

俺がボソツと呟くと、あからさまにレイが反応した。

「“あの時”の約束、まさか忘れてないよな？」

「テメえッ！！あれは明らかに反則だろうがッ！！なんで俺がテメーを殺そうとするのかわかってんのか！？」

俺のその一言に過剰と呼べる程反応するレイ。周りにいるみんなはそんなレイの姿を不思議そうに見つめている。だが、本人はまったく気が付いていない。

明らかにキレたレイに、逆に俺は飄々とした態度で不適に微笑む。

「はっはっは！何を言ってた？あれは俺らがお互いの合意の上で成り立った約束じゃないかね？ん？」

「悠希いいいいッ！！」

齒軋りが聞こえそうな程齒を食いしぼる光景を見て、「扱いやすいやつ」と心の中で爆笑。

しかし、そんなことなど表情には出さず、仕舞いには肩を竦めてため息を吐く。

「はあ。せつかくあの約束をチャラにしてやろうと思ったのになあ………」

「……なに？」

かかった。

ピクリと反応したレイを見て、俺はニヤリと口元を吊り上げそうになった。

まだだ。まだ笑うな。

そんな茶番劇を心の中で繰り広げながら、俺はわざとらしく再びため息を吐いた。

「あの約束 “カレンとの1日デート” を実行させなくなかったら俺の言うことを聞け、レイ！ はっはっは！」

高々と笑う俺に対して、どんな約束なのかと耳を傾けていた連中は揃ってずっこけた。と、同時に非難の眼差しを向けてくる。

特に、桜、遙、綾芽さん方向からは黒いオーラを感じる有り様だ。冷や汗が止まらない。

そんな中でも、投げかけられた本人であるレイの瞳が明らかに動揺していることを確認した。わかりやすいやつめ。

カレン。本名カレン・ケイフォード。

名前からも解る通り、レイの実の姉だ。

以前、俺が参加していたアメリカと合同の魔獣掃討任務のとき、たまたまレイとカレンも参加していた。それが丁度一年前、つまり

一葉たちの前から姿を眩まして約一年後のことだ。

そんな中、同年代の人間が圧倒的に少ない宿舍で、始めに声をかけてきたのだカレン・ケイフォードだった。

いや、びっくりしたね。いきなり肩を叩かれて振り向いたら絶世の美女が微笑んでたんだもの。

髪はレイと同じ絹系のような金髪。顔立ちは整っており、雪のような白い肌。穏やかな目には美しい金色の瞳が輝いている。何よりその完璧なプロポーションは、グラビアモデルも裸足で逃げ出す程だ。始め見たときには不覚にもどきりとしてしまったことをよく覚えてる。そのままいけば完全に見とれていたことだろう。

レイがいなければ。

カレンの後ろには不機嫌オーラを垂れ流しまくるレイがいたのだ。そんなことなど気にせずカレンが俺に話しかけるものだから、レイは俺に敵対心を持ち出した。

魔獣掃討任務の前夜。そのときに俺はレイに『話がある』と呼ばれたのだが、その話の内容とは、

『これ以上姉さんに近付くな』

と、いうものだった。
そのときの真剣さが余りにも面白かったため、俺は一つ賭け持ち出した。

『明日の任務で魔獣を多く殺した方が勝ち。もちろん俺が負けたら二度とカレンには近づかない。その変わり……そうだな』

俺が勝ったらカレンと1日デートさせてもらおうか。

別に本気で言ったわけではなかったのだが、その言葉でぶちぎれたレイがその条件をのんだ。しかし、結果は現状の通り俺が勝って、今までその権利を残しておいた。つまり貸しがある。

「どうする、レイ？別に俺はどちらでもいいんだぜ？カレンとデートしてもよし。お前が俺の言うことを聞いてもよし。さあ。どちらがいいか言ってみろ」

「くっ……!!」

なぜだろう。何か開いてはいけない扉を開きかけている気がするのだが気のせいかな？

高笑いを上げながら俺はレイをいじめ　もとい答えを促す。

「……わか、った」

「え？なんて？」

別に聞こえている。この問いはわざとだ。

「わかったッ！」

「何がわかったんだ？」

「くっ！」

下唇を噛み締めるレイに対して、俺は笑いを堪えるのに必死だ。

「お前の、言うことに……従っ……」

「……ぶっ」

その言葉を言い終えた瞬間、崩れ落ちるように膝をついたレイを見て、俺は声を抑えることを諦め、左手だけで腹を抱えて笑い始める。うなだれるレイを、俺以外の全員が同情の眼差しを向けていたことが、さらに俺の笑いを増長させることとなってしまった。

episode 48 よく解らない感情

ひとしきり笑った後、震える腹と口を押さえ込みながら、俺は口を開いた。

「そういうことだ。結界は張ったが、何かあったときはレイを馬車馬のようにこき使っていいからな」

「おい、悠希ッー!!」

「約束は？」

「ぐっ……!!」

「こき使ついい」という点で詰め寄ってきたレイだったが、約束のことを持ち出した瞬間には口を噤んだ。

「いやはや、本当に面白い。」

手を握りしめながら震えているレイを見て、口元がつり上がるのがわかる。

今まで散々追い回してきてくれちゃった少年が唇を噛みながら俺の言うことを聞く。こんな面白い光景がどこにあるのか。

既に喉の辺りまで笑いがでかかっているが、いつまでも笑っていては話が進まないので我慢することにして俺は言葉を紡いだ。

「じゃあ、ちょっと紅葉たち探してくる」

そう言って身を翻し、さつさと紅葉たちを連れ帰ることにした。

レイが来てから大分時間が経っている。いくらなんでもそろそろ近くまで来ている頃だろう。

しかし、もし万が一何かあったときのために探すつもりではある。そしてその後はこの事件に終止符を打つ。つまり、敵勢力を根絶やしにするつもりだ。

全身に魔力を流し、予定を頭の中で確認しながら俺は風のようにアリーナの出口を駆け抜けた。

「言っちゃいましたね……」

綾芽のこの言葉は、この場の全員の思いを代弁していた。

さっき来たかと思えば、またすぐにどこかへ行ってしまった悠希。まるで嵐が通り過ぎたように感じ、なぜだか脱力してしまう。

現在は遥と一葉がそれぞれ和彦とライラに一人で付いている。自分を含めたこの三人の中で、自分の治癒魔法の技術が劣っていることは明らかなので、ここで出しゃばったりしない。そこまで自分は子

供じゃないと自覚している。

治癒の魔法はその名の通り傷を癒やす魔法。怪我の程度にもよるが、だいたいの怪我はすぐに治すことができる。ライラの傷も、少し時間がかかるだろうが、治らないわけではない。

しかし、それも万能ではない。腕が両断されていれぱくつつけるなんてできないし、もちろん生やしたりすることもできない。

設備が整った病院に行けば、現代医学ならば腕をくつつけることも簡単だ。

だが、今現在の状況を考えれば病院に運ぶなどという悠長なことを言っていられない。

なぜならば、悠希の言ったことが本当であれば、悠希が張り直した（性格には制限を付け加えた）この結界の中が一番安全だからだ。

それならばここに籠城するしかない。だが、問題はある。

「さて、じゃあ俺は人命救助でもしてくるか……」

明らかに気怠そうな声を言いながら学年一位、レイ・ケイフオードは歩き出した。

人命救助をなんだと思っているのだろうか。

そう、問題とはこのアリーナで観戦していた何人もの観客。それをレイ一人で運ばなくてはならないのだ。

さらに、運ばれてきた観客を綾芽たち三人で治療しなければならぬ。これは容易なことではないのだ。

治癒系統の魔法を使える人間がこの場に三人もいることが奇跡のようなもののだが、如何せん観客を救助する人間が一人だけと言うのはあまりにも少なすぎる。

救助が遅れたばかりに多くの人が死んでしまうというのが、綾芽には堪らなく怖いのだ。

『綾芽さん？』

「ッ！？」

そんなとき、いきなり脳内に声が響きわたった。

聞き覚えのある声。それが念話によるものだ気づいたのは、声の主が解ったときだった。

『ゆづき……さん？』

『おお！よかった。念話知らなかったらどうしようかと……』

声の主は、先程アリーナから出たはずの華瀬悠希だった。脳内に響く彼の声に、安堵の色が窺えたため、何故か解らないが笑ってしまった。

だが、いきなり笑い出した綾芽に、周りのみんなは訝しげな視線を向けてきたことに気づき、慌てて表情を戻した。

『ど、どうしたんですか？それと、いくら私でも念話ぐらいなら知ってます！』

『そ、そうか、すまん』

何故だか、後から自分がバカにされたような気がしてきたため、つい語調が強くなってしまった。

いつもと違って強気な綾芽に多少驚いた様子だったが、気を取り直した悠希の次の言葉を待つ。

『綾芽さん、大丈夫か？』

『え？』

だが、聞こえてきたのはまったく意味のわからない問いだった。わけがわからず首を傾げる。

『いや、なんだかいつもと違う気がしたから』

あー。

これでようやく解った。悠希は自分を心配してくれていたのだ。普段はボーっとしているように見えて、案外周りをよく見ている。

そう思うと、心が満たされていくような不思議な感覚が胸に広がってきた。

（あれ……？）

未体験の感覚に、思わず首を捻った。

心配されて嬉しいのだろうか？いや、誰にだって心配されるのは嬉しい。では、この感覚は？

もしかして。もしかして

『綾芽さん？どうかした？』

『い、いえ！なんでもないです！』

心配気な声が頭に響くことによって、再び綾芽は現実に戻された。

最初はただの好奇心で近付いただけだった。

第11高校一年の中で最強である紅葉を倒した転校生。その名前が日本で有名な英雄『華瀬悠希』と同名同名であること。

別に、悠希が英雄と同一人物だなどと思っているわけではない。自分の英雄のイメージと、悠希とはかけ離れているからだ。だから、最初は好奇心と、僅かに自分を強くしてくれるかもしれないという可能性信じての行動だった。

結果は、予想以上だった。

悠希のお陰で、学年順位はかなり上位の方まで行けた。それに彼自身の力は底知れない物だと感じた。

単純に凄いと思った。

彼はどれだけ自分を磨き続けたのか解らないほど洗練されている。

華瀬悠希は凄い。

ただ、今はそれとは別の感情が心に入り浸っている。

いつから？

そんなものは解らない。

ただ、そこにあるということだけは自分にも解った。

これは、この感情は、きっと

『綾芽さん？本当に大丈夫か？』

そこまで思考は中断させられた。またも悠希の声で、だ。だが、言葉の意味とは別に、今の綾芽には気になることがあった。

『悠希さん？今更ですけどなんで私だけ“さん”付けなんですか？春日野さんだって呼び捨てなのに……』

実際に頬を膨らまし、拗ねたような表情を作った。不機嫌オーラを含みながら、やんわりと問いただす。しかし、言葉に込められた怒りはしっかり悠希へと伝わったようだ。慌てた言い訳が聞こえてくる。

『べ、別に遥の友達が社交的なやつだったから、下の名前で呼ぶようにって決められたんだよ、うん。だから、これは不可抗力なんだな？』

『悠希さん。言い訳はそれでお願いしますか？』

『……釈明の余地もございません』

浮気がバレた夫のような言い訳に、綾芽の気分は少し和らいだ。これを狙っていたのだとしたらこの男の子は相当女の子の扱いに慣れているな。

まあ、そんなわけないだろうけど。

心の中でそう結論付け、意識を会話へと集中させていく。

『……許して欲しいですか？』

『は、はい！』

『では条件があります！』

高らかにそう宣言し、綾芽はその条件を頭の中で言い放つ。

『……私のことも名前で呼んでください』

『へ？』

『名前で呼んでください！』

まるで何を言われたか解らないような声が返ってきた。自分でも恥ずかしかったので、反射的に復唱した。

『えっ……と、今そんなこと言ってる場合じゃ

』

『春日野さんは良くて、私はダメなんですか？やっぱり悠希さんは私のこと嫌いなんだ……』

『え、いや！そんなことはないぞ！？』

『じゃあいいじゃないですか！！』

悠希の狼狽しきった顔が目につく。でも、何故だか今は感情的になっただけだ。

やっぱり私、変だ。

自分でも無茶苦茶なことを言っている自覚はある。しかし、今は考えるより口に出してしまうのだ。自分の意志に反して言葉を紡いでしまう。

いや、もしかしてこの言葉自体が綾芽自身の心を映しているのかもしれない。

『はあ、わかったよ』

やがて、諦めたような悠希の声が返ってきた。

ドキリと心が揺れる。

こんなときだと言っのに自分の名前が呼ばれることを心待ちにしている自分がいる。

そして、呼ばれた。

『じゃあ、“綾芽”』

呼ばれた瞬間、心の中に何かがストンと落ちた。そして、なんだか良く解らない感情が沸き上がってくる。

ただ、それが何か解らなくても、この気持ちが自分にとって心地良い物だと言っことは解った。

『はいっ！悠希さん』

知らず知らずのうちに声が弾んでしまう。抑えようにも抑えられない。

いきなり機嫌が良くなったことを訝しく思ったのか、悠希の心配気な声が届く。

それがまた嬉しくて、けど心配させないように『大丈夫です』だけ

応えておいた。

『それじゃあ、また後で』

『はいっ
』

最後にそう応え、繋がっていた糸が切れるような感覚と共に、悠希の声が聞こえなくなった。

名残惜しいと思う。だが、仕方がないがない。今は非常時なのだ。しかし、それ以前に自分の胸に溢れるこの感情のお陰か、少し寂しいと思うだけで済んでいることもまた事実。

先程まで浮かんでいた“怖い”という感情さえも塗りつぶしてしまった別の感情を抱きながら、ふと、視界の端にレイの姿を捉えた。観客席を充滿する煙の中に飛び込んだレイを見て、自分もがんばらなくてはという思いが浮かび上がる。

がんばれば悠希に褒めてもらえるかもしれない。

俄然やる気がでてきた綾芽は、これから起こることなど露ほども知らずに、ただ無邪気な笑顔を振りまくだけだった。

綾芽との念話を切つてすぐ、俺は異変を感じとった。

(……………なんだ?)

まるで誰かに見られているような。しかし、何もないような。そんな曖昧な感覚が俺の身体を這いずり回る。

俺自信、自分でも勘はいい方だと思う。並大抵の術師ならば気付かないはずがない。そう自負している。

ただ、前にもこんなことがあった気がするのだが、それは一体いつだったか……。

(まあ、仕掛けてこられても今は構ってる暇が無いんだけどな)

もし敵であるならば、寧ろ好都合とばかりに足に入れた力を更に強める。

走る。駆ける。そして飛ぶ。

木に飛び乗り、さらに飛ぶ。

地上から離れ、空中に飛び上がって紅葉とニコルを探す。

先程から繰り返している作業を何度も何度も行う。こうした方が広範囲を見回せるからだ。

しかし、未だに紅葉たちの姿は見当たらない。

例え、どれだけスピードを上げても見逃すはずがないのだが。

（まさか、何かあったのか？ いや、ニコルが付いてるんだ。そんなはずがない）

半ば自分に言い聞かせるように内心で呟く。

そういえば、

（なんで俺、こんなにニコルを信用してるんだ？）

別にニコルが弱いとか、そういう意味で思ったわけではない。

ただ、人を信じていること自体が自分にとって不思議なように感じた。

レイだってそうだ。

あいつの実力関係なしに、綾芽たちのことを任せるなんてしてしまっている。

レイならばきっと大丈夫だ、と。

そこまで思い浮かんだとき、急にバカバカしくなって俺は思わず吹き出してしまった。

（ははは！俺が人を信じる……か）

自分の中で何かが冷めていくのを感じながら、自嘲気味に笑う。

俺にそんな権利なんてないのに。殺人者には冷たい視線がお似合いだ。

別にロシア人大使を殺したと認めるわけではない。しかし、それ以前に俺は自分の手を汚しすぎた。

どこかの映画にこんなセリフがある。

『一人殺せば犯罪者だが、百万人殺せば英雄だ』

まさに的を射ている。自分に当てはまりすぎて笑えてくる。

犯罪者も英雄も変わらない。要は何人殺したか、だ。

そして俺は大勢の人間を葬り、結果として英雄として祭り上げられた。

愚かな『道化^{クラウン}』だな、俺は。所詮は子供だ。

今こうして追われているのが実にお似合いだ。

けど、だからと言ってわざわざ捕まる気にもなれない。

俺にはまだやらなきゃならないことがある。醜くのたうち回ろうとも、必ずやり遂げなければならないこと。

それなのに今更人を信じる？

俺は一体何を考えているんだ？

解らない。やっぱり自分が解らない。

気が付くと、目の前には城のような建造物が広がっていた。
キョロキョロ辺りを見回すと、どうやら学校に行き着いてしまったらしい。

それにも気づかなかった自分にため息を吐き、もう一度見回ろうと振り返る直前、何かが視界に映った。

「なんだ……これ？」

目に映ったのは惨状と呼ぶに相応しいものだった。

木々はなぎ倒され、葉が散乱し、水溜まりのようなものが出来ていると思えば、氷の大地が広がっているところも、煙が上がっているところもあり、コンクリートの地面が所々抉れていた。

決して自然現象などではない。これは魔法の爪痕だ。

ここで何かが起こった。それだけは解る。

だが、これだけの被害となると、どちらも相当の手練れなのだろう。身体に緊張が走る。今、この瞬間にも何者かが茂みに潜んでこちらを窺っているかもしれない。

相手の方は兎も角、この都市の人間でこれだけのことができるやつがいるとすれば

思い浮かんだのは最悪の光景。しかし、それは苦しくも視界に捉えた人物を見て確実な物へと遂げた。

見覚えのあるプラチナブロンドが木の近くに転がっていた。

「ニコルッ!!」

薙ぎ倒された木の傍に出来た血溜まりの中心に、うつ伏せで倒れたニコルの姿があった。

直ぐに駆け寄り、その場で抱きかかえる。すると、その衝撃で気づいたのか、ニコルが目を開けた。その瞳に宿る光が、いつもより霞んでいるように見えるのは気のせいではあるまい。

「ゆ、うき……さん」

「いい!喋るなッ!」

いつもの抑揚の無い声が、弱々しく吐き出された瞬間、俺は制止の声を挙げる。

傷がひどすぎるッ。

ニコルの華奢な身体を、左肩から右の脇にかけてが赤黒い血で染まっている。それを見た瞬間、血の気が失せるような感覚に襲われ、目が眩んだがなんとかなんとか持ちこたえた。

左手に握られた“デスサイズ”も、具現化し続けるのが難しそうだ。

「すぐにアリーナに運ぶから、しつかり」

「待って、ください」

辛そうに、だがどこか強い声で、ニコルは俺に制止の声をかける。焦燥感に苛まれたが、しかし、そこである異変に気が付いた。

紅葉がいない。

確か紅葉はニコルと一緒に居たはずだ。では、何故この場にいない？
膨れ上がる嫌な予感。

「紅葉さんが、攫われました……」

「なッ!？」

そこまで思ったとき、ニコルがその最悪の言葉を口にした。

嘘、だろ……。

突如、思考がフリーズする。頭の中が真っ白になり、呼吸が荒くなり始めた。

（紅葉が攫われた？そんな、だってニコルが付いてたんだぞ？それなのに何故？これじゃまるで）

「敵、は保持者が三名。内一人が……剣の……」

剣？

その一単語を聞いた瞬間、ニコルの声がどこか遠くのものに感じられた。

心の中から枷が外れたように感情が沸き起こる。しかし、それは先刻の綾芽とは真逆の感情。

（ロシア、魔術師、伝説武器、攫う、保持者 剣）

それはトラウマと言う名の過去。

それは因縁と言う名の鎖。

それは俺の心を戒める存在。

銀髪の男。

その伝説武器の名は

「ガラド、ボルグ……」

奴が来ている。

この都市に来ている。

兄さんを殺し、俺の人生を狂わせた張本人。

それが今、この近くにいる。

紅葉を攫っている。

一体　　。

「　　一体何回、俺の人生を狂わせるつもりだ……あいつは!」

こみ上げてくるのは怒りと恐怖。

天に向かって吠える俺は、まるで一匹の獣。

左手をきつく握り締める。

だがその瞬間、遠くの方で何かが割れるような音が耳に届いた。

一見ガラスが割れたような音かとも思えるそれを、しかし俺は一瞬で何か理解した。

「結界が破られたッ!？」

アリーナの結界が破られた。それを肌で感じたのだ。それも制限を外すとかでは無く、正面からぶち破るように。

やはり奴が来ている。

歯を食いしばりながら、アリーナの方を睨みつけていると、ニコルがクイと俺の袖を引っ張り、

「行つて、くだ……さい……」

ただ一言、震える声でそう言った。

「なッ!？そんなこと

」

「私は、しばらく大丈夫……です。それよりも、向こうを……」

震える声。だが、瞳には絶対に揺らがないという意が込められた。

この少女は、自分がこんな傷を負っていると言うのに、一葉たちを助けに行けと言っているのだ。

恐らく、向こうの方が生き残る確率が少ないから。

「……わかった」

そこまで考えた上で、俺は唇を噛みながら頷いた。
ジワリと口内に血の味が広がっていく。

せめて安全な場所にと、校舎の中に運び、俺の制服で傷を覆う。左腕だけしか使えないが、別段気にもならなかった。

「すぐ戻ってくる。絶対それまで死ぬな。何かあったら念話飛ばせ」
必要事項だけ早口で言い聞かせる。最後にこくりと頷くニコルを確認し、俺は身を翻した。

「……絶対死ぬなよッ!」

最後にもう一度そう言い、俺は全力で地面を蹴った。

絶対に、死なせてたまるかッ!!

ただひたすら、その思いがいつもより足を速く進ませた。

episode 50 違和感

少し時間は遡る。

レイ・ケイフォードは得体のしれない違和感を感じていた。

アリーナの競技場内、そこには現在ライラ、和彦、一葉、桜、遙、綾芽の六名しかいない。その全員も、呆けたような顔をして、悠希が出て行った方向を見ているにも関わらず、誰かに見られているような、無いような、そんな気がするのだ。その感覚自体もあるようで無いような不思議なもの。

(……なんだ？観客が目を覚ましたのか？)

一瞬そう思ったが、それにしても見られているという実感が無さ過ぎたため、場所すら特定できない。それに何故見ているだけなんだ？じっとしていないでこちらに来ればいい。いや、普通この状況ならば仲間に加えてもらおうと寄ってくるはずだ。だが、それも無い。

敵？いや、それにしても殺気が無さすぎるし、何よりこの例えよつの無い違和感はなんだ？

殺気が無い。気配が無い。だが見られているような感じがする。モヤモヤするレイの心情とは裏腹に、未だにこの感覚が消え失せることがない。

イライラする。かかってきたければ来ればいいのに。

だんだん溜まってきたストレスもあり、この視線の主を敵だと判断した。

決断したときの行動は迅速に。姉さんから教えられたことだ。そんな思惑もあり、レイは直ぐに行動へと移すことにした。

「さて、俺は人命救助でもしてくるか」

そんな言い訳がましいことを言いながら、めんどくさそうな声音とは裏腹に何故か自分が内心で焦っていることに気付く。

不可解。

この感情をその一言で済ませ、さりとてこの焦りが何なのかも解らないまま、レイは身体強化を駆使して観客席まで跳んだ。観客席を未だに覆う煙に、まるで飲み込まれるように。

視界に入るのは煙で霞んだ観客席の景色。悠希の結界の効力も合つて火事は収まっているらしく、赤い光源は見当たらない。

しかし、そんな光景を見て尚も募りゆく不安と焦燥。自分の中の勘が何かおかしいと警笛を鳴らしていることが自分にとっては不可解に過ぎない。

一体何が引つ掛かると言うのだ。おかしい所なんてどこにも……。

とうとう自分の頭がおかしくなつたかと思ひ始めるレイ。ため息を吐きながら周りの状況を確認することに。

と言つても視界に映るのは倒れている何人もの人、人、人。それ以外は視界を埋め尽くすような煙以外にこれと言つて変わった所は

は？

おい、今何だつて？

自分に問いかけるが、もちろん返答が返ってくるわけでもない。変わりに今の言葉を頭の中で思い返すのだが、何かがひっかかる。今度は解り安いほど頭の中にそれが残り続ける。

再び辺りを見回すことで、ようやくその正体に気が付いた。

ちよつと待て！

なんで何も“変わった所”が無いんだ！？

確か『観客席が爆破された』はずじゃなかったのか！？

違和感が不安へと擦り変わる。徐々に増していくこの不安感は、生まれてから一度も体験したことが無いような濃さで、それでいて身体の中をのたうち回つて、レイの中の本能を呼び覚ます程凶暴な感情。

改めて辺りを見回す。今度は変わったことでは無く、“変わってないこと”を探すために。

考え方を変えることによって、視界が開けたような、そんな錯覚に陥る。そのため、『異常』はすぐに見つかった。

（怪我人がいない！？なんで爆破されたのに負傷者が一人もいないんだ！？）

どこを見ても倒れている観客全員に外傷が全くないのだ。服にすら異常が見当たらない。

おかしすぎる。倒れている観客は全て、火傷どころか擦り傷一つとして付いていないことなど、爆破された上ではあり得ない。

さらにレイの感覚では多少息苦しいとはいえ、火事のような酸素不足となるような深刻な程、空気中の酸素量が減っている様子も無いように感じる。

『何も無い』と言うことがレイへ更なる不安感を募らせる。それでもようやく変化している所を見つけた。

しかし、この場合それが良いことであるとは限らないのだが。

観客席の一番前。競技場との間に区切られた柵。そこが黒く煤けていたのだ。

何かが燃えた、そんなことは解りきっている。

問題は、何故“そこだけ”燃えているのかということだ。そして更に、いたるところに細長い金属の筒のようなものが落ちている。それがレイにある予感を過ぎらせた。

まさか、まさかまさかまさかッ！！

爆破されたはずの観客席、黒く煤けた柵、転がる金属筒状の何か。

何より、意識がある人間が誰一人としていない。

気付けば最初からおかしかった。

爆破されたと言ってもこれだけの観客だ。無傷の人間がいなくとも、歩ける人間がいはいは無い。少なくとも、爆破された程度で何人も観客が集まるこの観客席、しかもここに居るのは魔術師がほとんど。それが全員気を失っているなんてある得るはずがない。にもかかわらず、誰も競技場に降りようとはしなかった。いや、競技場に降りずとも助けを呼ぶ叫び声ぐらいあってもよかったはずだ。

あり得ないことの連続。

これほどあり得ないことはない。

“最初から何かが違った”

ようやくレイの中でくすぶっていた違和感が確信へと変わる。それは腹立たしくも、人間ならば誰でもする行為。

嵌められた！！

瞬時にそう悟った。

自分たちが見事に敵の手の平で踊らされていたことに。
今まで気づかなかった自分が愚かしい。

最初から仕組まれていたのだ。

ようやく理解したレイ。だが直後、急激な眠気が襲いかかった。

ふと、視界の端に転がる金属の筒が目に入る。

それは恐らく二種類にあるのだろう。だが、今となつては後の祭。

「ちっ……くそつたれ……」

魔力を流し、必死に意識を手繰り寄そうとするも少し遅かった。

舌打ちと悪態を吐きながらも、徐々に意識が持つて行かれるこの感覚が苛立たしい。

そんな中で突如、何かが割れるような音が耳をつんざく。だが、果たしてその正体に気がついていただろうか。いや、今となつては解つていてもどうなることではないのだが。

漂う煙の中でレイは静かに微睡みの中へと堕ちていった。

episode 51 現れた仇（前書き）

明けましておめでとうございます！！

なんだかんだあって投稿して3ヶ月になりました。

最初はなんとなくで投稿したこの作品がこまでくるとは思いませ
んでした（笑）

今年の抱負として

投稿スピードを落とさないことと、皆様に満足して頂けるようによ
り良い小説にしていきたいと思います。

最後になりましたが、今日まで『犯罪者は英雄？』をご覧頂き本当
にありがとうございます！

どうか今年もよろしくおねがいしますm（ ）（ ）mペコリ

episode 51 現れた仇

風が頬を吹き抜け、アスファルトを踏みつける感覚だけが伝わってくる。

過ぎ去る景色。まるで新幹線にでも乗ったようなこの光景に、しかし俺は感慨に浸ることは出来なかった。

駆ける。ただ駆ける。

安全圏である結界の中でも、結界が破壊された今の状況では壊れたプレハブ小屋も同然。侵入されることは目に見えている。

みんなが危ない。

だがしかし、皆の身を案じる一方で、どうしようもない憎悪が湧き上がってくるのもまた事実。

重傷に追いやられたニコルに聞いた話で蘇った使命のような感情。

唇を噛み締めながら、前へ進み続ける足へ更なる力を込める。

俺がアリーナに付いたとき、一葉、レイ、ライラ、和彦、桜、綾芽、遙が血の海に浮かんでいたら　　そんな考えがよぎるが、即座に頭を振った。

何考えてんだ俺はッ！！そうならないために走れ！！走り続け

ろ！！

強がる想いとは裏腹に、徐々に嫌な方へ嫌な方へと考えが行ってしまふ。全て自分のせいなんだと。

あのととき俺が残っていればッ！

自分で紅葉たちを探そうとしなければ、今こんな状況にならずに済んだ。

“奴”が来ている時点で、“奴”が現れる可能性がある時点でこうなることは予想できたはず。なのに俺はそこまで考えが回らなかった。さらにニコルが言うにはあと二人も保持者がいる。ならば

（レイと一葉だけじゃ無茶だッ！！）

既にアリーナまであと少し。

頼む。頼むから間に合ってくれよッ！

大勢の人間を葬って尚、仲間の安否を心配している自分自身の身勝手さが嫌になりながらも、ただひたすら足を止めずに走りつづけた。

パライインー！！

黒崎ライラの治療を終えた直後、ガラスが割れたような音が耳をつんざく。

この場に居る学生たちはこの音の正体を瞬時に理解できただろうか。だが、それを確認する余裕は波風一葉にも無かった。

「結界が……壊され？」

無意識のうちに呟いた言葉が自分自身でも瞬時に信じられない。いや、信じたくないのかもしれない。

そんな一葉の心情とは裏腹に、未だに舞っている煙の中からいくつもの影が飛び出した。

それを見て我に返り、周りを気にながら身構える。

続々と競技場内へと飛び降りてくる影に、思わず舌打ちを吐いた。数はおよそ四十といったところか。先程アリーナで桜たちを襲っていた男たちと同じで、その服装に規則性は無い。だが、それも放たれる殺気のお陰でこの男たちが敵だということを間違えようもないのだが。

その中でも突出した圧力を放つ男が三人。恐らくリーダー格なのだろう。その内の一人が驚いたような声をあげた。

「おや？おやおや？これはこれは“ガイスト・クイーン”、波風一葉ではありませんか。こんなところへどうなさいました？」

「……ここは私の学園都市よ。私がここに居ることの何が可笑しいのかしら、ミスター“ブリューナク”」

丁寧な口調で心底驚いたような顔をする“ブリューナク”と呼ばれた男。だが、一葉が苦笑混じりに言っていると嬉しそうな笑みを浮かべた。

「覚えて頂けて光栄です。ですが、ここは自己紹介をさせていただきますしよう。私は、伝説武器“ブリューナク”保持者のセルゲイ・グラジエフです。で、こちらが」

「伝説武器“ゲイ・ボルグ”保持者のアレク・ヴィリギンスキーです。はじめまして、クイーン」

セルゲイと名乗った男の声を遮って軽くお辞儀するアレクと名乗った男。先程レイと一戦を交えた男がこのアレクなのだが、そんなこと、このときの一葉には知る由もない。

人懐っこそうな笑みを浮かべるセルゲイ。張り付けたような微笑を浮かべるアレク。そして

「そして、その目つきが悪い方は伝説武器“ガラドボルグ”保持者のイリヤ・ザハロフです」

（コイツが……ッ！！）

イリヤ・ザハロフ。

この名前は初耳だが、その伝説武器の名は良く知っている。

短めの銀髪に、炎を浮かべたような真紅の瞳で背は高めで年は20ぐらいだろうか。鋭い目つきでこちらを睨み続けるせいか、肺を圧迫されているような錯覚に陥る。

だが、そんなことよりも、

（コイツが、コイツが雅人をッ！！）

悠希の兄であり、一葉の戦友でもある華瀬雅人を殺した張本人が今、目の前にいる。

今すぐにでも突っ込みたい衝動に駆られるが、冷静さを掻いた状態ではこの男に勝てないことは目に見えている。更に傍に二人の保持者と何人もの術師が控えているのだ。伝説武器を持たない彼女にとつて最早勝ち目などない。

それが解らないほど一葉もバカではない。なんとかここは抑えて後ろにいる桜たちを逃がす方法を考えなくては

「おいセルゲイ、アレーク。てめえら仲良しごっこするためにここに来たのか？なら俺はこの場の全員斬り殺すけど文句無いよな？」

ゾクッ！

とてつもない殺気を孕んだ声音でイリヤがそう言い放った。自分の考えを読まれたのどうかは解らないが、背筋に悪寒が走り抜け、額を嫌な汗が伝う。

だが、そんなイリヤの言葉を眉一つ動かさずにセルゲイは首を横に振った。

「イリヤ、それは命令違反ですよ？私たちはただ“あれ”を見つけにきただけだということをお忘れなく」

「ケッ！いたぶろつが、殺そうがどっちも変わらねーだろーが！」

「それでも、ですよ。私たちは“あの方”の命令には逆らえない。それともここで命令に逆らいますか？」

「ちっ……」

怒鳴りつけるように声音のイリヤとは反対に、セルゲイは極めて冷静な声でそれを宥める。

会話の所々によく解らないところがあったが、どうやら彼らは学園都市にいる人間を傷つけることはできて、殺すことはできないらしい。

だが、それよりも

（“あれ”を見つげにきた？ “あれ” っていったい……それにこの三人を抑えつけて従わせる“あの方” って……）

解らないことはたくさんある。だが、それでも一葉のやることは変わらない。

「……ジェネレート」

呟くと同時に右手に光が集まり出す。それが臨界点に達するとその光が弾け、一振りの刀が現れた。

「おや？」

一葉の呟きに気が付いたセルゲイがそんな声をあげた。だがその瞬間、その場で一閃。

通常であればこの距離では斬撃に魔力を乗せて放つのだが、一葉の刀からは何の変化も現れない。

ただの素振りの練習ように見えるこの動作。しかし、ここは一種の戦場。そんなことをするはずがない。

バタ

唐突にセルゲイの後ろにいた部下らしき男が音を立てて倒れた。それを皮切りに続々と三人の周りの人間が倒れていく。

一人、二人、四人、八人。

とうとう三人だけになってしまったその光景を見て、後ろにいる桜たちが驚愕に目を見開いている。

そんなことは一葉に解るはずもないのだが、ただこの想いだけがずっと胸にひしめいている。

「……いたぶるって言ったっけ？」

守らなくてはいけない。

大切な妹とその友達たちを。

「やれるものならやってみなさい」

数年ぶりに自身から放たれる殺気を纏いながら、かつて“ガイスト・クイーン”と呼ばれた彼女は戦いを決意するのだった。

episode 51 現れた仇（後書き）

最近更新できてなくて皆様にご迷惑をおかけしてしまってます。
すみません。

なんだか指が進まなくて、、
スランプみたいです。
ために新しいのを書いてみたのですが、これもまた続きが書けなくなりかけてます。

犯罪者は英雄？をご覧頂いているみなさま。
なるべく早く次話を挙げたいと思いますが、それまで暖かく見守ってください。
本当にすみません。

episode 52 認めたくない(前書き)

本当に遅れてしまつてすみませんorz

正月のあの抱負はなんだつたんだつて話ですねorz

これから少し遅れ気味になるかとは思いますが
みなさん、どうぞ暖かい目で見てやってください(汗

episode 52 認めたくない

“ガイスト・クイーン”波風一葉。
今尚呼ばれ続けている彼女の通り名だ。

今世紀確認された唯一の“精神系統術師”。
一葉は、そのこの地球上に1人しかない“精神系統魔法が使える術師である。それがこの学園都市の理事長として君臨する一つの理由だろう。

ただ、精神系統術師と言っても、“念話”程度を使えたからと言ってそう呼ばれるわけではない。

『他人の心を操り、支配する能力者』

その類い希な能力を先天的に発現させた彼女は、当初世界規模で危険視された。

その能力を絶対に悪用させてはいけないから。

人の心を操るという彼女の
彼女だけの魔法は危険すぎるから。

それでも彼女の性格のお陰か、そのような危険な行いをすることはなかった。

だから、学園都市の理事長になった。いや、させられた。

精神が不安定な少年少女をケアするために。
そして監視の意味も含めて。

ドイツ語で精神を表す『ガイスト』に、女王を意味する『クイーン』
。

繋げて“精神を司る女王”ガイスト・クイーン。

その殺気が、目の前の男たちへと襲いかかった。

「へー……これが“干涉系”か」

周りに倒れた部下たちのことなど見向きもせず、アレークと名乗った男は宙を見ながら感慨深げに呟いた。
いや、より正確に言くと宙に浮かんでいる“系”にだが。

そう、彼ら三人の周りには何億本もの極細の糸が張り巡らされているのだ。

【精神系統魔法：干渉系】

一葉が先程そこに転がっている人物たちに使った魔法だ。

糸一本一本が一葉の魔力で作り出され、触れた人間の精神に干渉することができる。

だが、それ以前にこれほどの数の糸を自由自在に操れるのは流石としかいいようがない。

因みに、悠希が来た際桜たちに一葉使った魔法もこれだ。

「ふむ……思っていたよりも凄いものですね」

セルゲイもまた、張り巡らされた糸の数々を見ながら感嘆の声をあげる。

その、まるで博物館にでも来たような感想を各々呟いているが、何も一葉が仕掛けていなかったわけではない。

糸を向かわせていたが“弾き返された”のだ。

魔法を使った気配は無かった。にも関わらず一葉の“干渉系”は彼らに届かない。

これは、まさしく

（悠希や雅人と同じじゃないッ！！）

一葉の勘が正しければ、彼らは魔法を使っていない。

自身から漏れ出る魔力を“干渉糸”にぶつけて弾き返しているのだ。
圧倒的な魔力保有量。

自らが以前に体験したことが頭の中でビジョンとして流れる。

初めて出会ったときの悠希と雅人と同じ。

それが余りにも悔しくて、信じたくなくて、一葉は思わず唇を噛み締めた。

認めたくない。

こいつらが悠希と雅人と同じだなんて認めたくはない。

ただ単純に伝説武器保有者として認めたくないわけではない。

こんな人の命をどうとも思っていないようなやつらが悠希と雅人に酷似しているのが無性に許せないのだ。

再び自身の魔力を刀身叩き込む。

今度は“干渉糸”の数と強度を増やすために。

だが、それを遮るように低い声が響いた。

「おい、誰が相手するんだ？誰もやらないなら俺が全員貰うぞ？」

イリヤの威圧感を込めたセリフに、後ろにいる桜たちが身震いした。
だが、そんな彼に呆れるようにセルゲイがため息を吐く。

「君は本当にせっかちですね。もう少し自重した方がよろしいのでは？」

「ハッ！お前にだけは言われたくないぜ。じゃあこいつらは」

そこで一旦言葉を区切るイリヤ。そして、ある方向へ振り向いた。
学校のある方向。

その方向を見つめたイリヤは、心なしか嬉しそうに口元を歪めた。
そんな彼にアレークは首を傾げる。

「どうしたんだい？随分うれしそうだけど」

「……やっぱりこいつらはお前らにやるわ」

「は？」

頭に疑問符を浮かべる二人。だが、その瞬間に疾風がアリーナを駆け抜けた。

「ようやくお出ましか」

イリヤは呟きながら、口元をつり上げた。
まるで獲物を見つけたように。

そして一葉の視界に“何か”が映る。

その“何か”は疾風と共にアリーナを駆け抜け、そして

キイイイイン！！

澄んだ金属の音が響き渡った。

音の根源にはイリヤ、そして左手に握った白銀の剣を振り下ろした悠希の姿があつた。

「ハッハア！ようやく英雄様のご到着かあ！！」

どこか楽しげなこえをあげるイリヤに、悠希は何も答えない。
ただ、その瞳に燃え盛る殺意の炎を浮かべて、剣を再び振るい始めた。

「そっぴや、あんときもこんな感じだったなあ。お前を餌に兄貴をおびき出して、さ！」

それら全てを避け続けながらも、イリヤは武器を出そうとすらしな
い。

いたずらに悠希の傷口を掘り返し始める。

「紅葉を どこにやった？」

ようやく放たれた悠希の言葉は、普段からは考えられないようなゾ
ツとするような冷たい声音だった。

それを聞いて、イリヤは笑みをより深める。

「心配しなくてもいたぶっちゃいねーよ。セルゲイ」

「はいはい、わかりましたよ」

イリヤが呟くと同時にセルゲイが応える。そして、その手に光が現れた。

光が収束すると、その右手に赤い、真紅の指輪が現れた。

「転送」

呟くと同時に、セルゲイのすぐ横に先程と同様に光が現れる。

光が薄れる。

その瞬間に悠希は走り出していた。

一葉も薄目でよく見る。

光から現れたのは真つ黒な黒髪。小柄な背。それを見た瞬間、彼女の背筋に寒気が走った。

現れたのは妹。紅葉だったのだから。

ようやく彼女の全貌が明らかになったとき、急に何かが外れたように身体が傾きかける。

すぐさま悠希はセルゲイへと剣を向ける

が、当の本人はま

ったくその気はないとばかりに後ろへ後退。

排除すべき相手がいないことを確認し、そのまま抱き上げその場から一葉のところまで一足で到着した。

それを確認した一葉は瞬時に紅葉を受け取り、そのまま容態を見る。

よかった。特にこれといった外傷はないようだ。
薬で眠らされたのだろう。本当に良かった。

安堵したも束の間、悠希は目線を後ろにいる桜たちの方へ向け、声を投げかけた。

「遙！綾芽！ニコルが重傷を負ってる！校舎内にいるから治療してやってくれ！一葉、敵に遭遇せず、かつ最短ルートで二人のナビを頼む」

「「わ、わかりました！」」

その余りにも切羽詰まった表情にすぐ頷く二人。
だが、対して一葉は困惑した表情で悠希を見る。

「ナビは、できるけど……けど」

「心配しなくていい」

目の前の相手が、と言いかけるが悠希がそれを遮った。
再び感情を押し殺したような表情を向ける。

「アイツを殺すのは、俺じゃないといけないんだ」

悠希はそう言い切ると背を向けゆっくりと魔力を放出し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4280x/>

犯罪者は英雄？

2012年1月12日17時53分発行